

---

# 電力少年

冴木 昂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

電力少年

### 【Nコード】

N3489M

### 【作者名】

冴木 昂

### 【あらすじ】

ミコトは電力会社に入社したての新入社員。電力料金を扱う部署で、目下研修中の身なのだが、なかなか思うように仕事が進められない。前代未聞のドジ連発で職場のお荷物と化したミコトに、先輩社員の愛のムチがようしゃなく襲いかかる。

## 集金員は楽じゃない

ゴミ袋や、ビール瓶を入れる黄色いケースやらが、所狭しと置かれたアパートの通路。目標は、一番奥の部屋だ。外に出された洗濯機や下駄箱をすり抜けながら突き進み、やっと目的のドアをノックする。

「こんにちは、帝都電力です」  
さらに二度ほどノックをするが、反応は無い。どうやら留守のようだ。

「ラッキー」

篠原ミコトは笑みをうかべた。不在の場合は、電力メーターの二次側、つまり電柱から来た電気がメーターを経由して家に入る方の配線を引っこ抜き、『電気を止めました』のチラシを投函して作業終了だ。

「おい篠原、どうした？」

障害物の遥か彼方で、先輩職員の飯田が、啞えタバコでミコトを呼んだ。

いつの世でも、先輩というのは後輩に嫌な役回りを押し付けるものと、相場が決まっている。ご多聞に漏れず、ミコトの先輩である飯田も、一年先に職場に居たからといって、ただそれだけで、ミコトをあごでコキ使った。

「飯田さん、お留守みたいです」

「あーそう。じゃ、オレは車に戻ってるわ。この辺の現場、ここで最後だし。次はちょっと離れた場所だからな」

「あ……」

ミコトの返事も待たず、飯田はさっさと帝都電力のロゴ入りの軽自動車に乗り込んでしまった。ミコトはムスツとしながら、物に阻まれた狭いアパートの通路を戻り始めた。折りたたんだベビーカーに足をぶつけて呻く。

「いったい、住人はどうやって出入りしてるんだよ、まったく！」  
ミコトは悪態をつきながら、アパートの裏に回って集合メーターの所に行こうとした。今度は手入れをされていない樹木と、足元の雑草が行く手を阻んだ。足元に気を取られていると、顔にクモの巣がハラリと纏わりついた。

「うぎゃあああ！」

ミコトは何とも情けない声を上げて、顔中をかきむしった。ハツとして周りを見回す。こんな所を飯田に見られたら、またバカにされる。それでなくても、お子様だとか、チビスケだとか言われているのに。大学を卒業しているし、当然二十歳も過ぎているのに、そんな事を言われたくはないけれど、仕方がないか……。

身長は百六十センチあるか無いかで、髪はネコツ毛の天然パーマ。近眼のせい、メガネの奥のつぶらな瞳は、いつもうるうる潤んでいるみたいに見えた。華奢な体つきと、色白でうっすらソバカスのある小顔は、女の子よりカワイイと、昔から言われ続けてきた。

「おっと、仕事、仕事」

ミコトは計器番号を確認し、積数の文字盤に目を留める。ぐるぐる回っている。

「なんだよ、居留守かよ……。チツ、仕方ないか」

ミコトはメーターの二次側につながる配線を引っこ抜いた。ぐるぐる回っていた計器がストップし、電力が供給されなくなった事を示す。電力停止作業完了。これで、溜まっている電気代を支払うまでもう通電してはもらえない。

クモの巣を避けながら、『電気を止めました』チラシをドアに挟みに行く。居留守をつかっている間、電気を止めた途端に中から人が出てくるケースは、しょっちゅうある。

さっきの部屋のドアが開いた。やっぱり、居やがった。ミコトはため息をつき、狭い通路を再び進んで、開いたドアの傍に行った。中から出てきたのは女の子だった。どう見ても、小学校五、六年生くらいだ。ほっそりとした体つきで、手足が長く顔が小さい。ま

るでバービー人形のような。春休みはとくに終わっているはずなのに、どうして平日の昼間に学校にも行かず、家にいるのだろう？

「あの……」女の子は泣きそうな目でミコトを見上げた。

「おうちの人に、この手紙を渡してくれるかな？」

女の子はじつと黄色のチラシを見詰めた。電気代の未納金五か月分が、つらつらと書かれている。

「今、お金を払えば、電気つけてもらえますか？」女の子は唇を噛みしめて、くしゃっとチラシを握りしめると、家の中に引っ込んだ。子供相手は非常にやりにくい。親の未払いのせいで、言わなくてもいい相手に、事情を説明するのはいかなものかと思うが、これも仕事だ。いつ、誰と金の話をしたか、未払い客のリストに記入しなければならぬ。

女の子は封筒を手に戻って来た。

「これで、今日のところはどうか許してください」消え入るような声で、女の子が差し出した封筒には、二千元が入っていた。表に返してみると、『修学旅行積立金』と書いてある。

こんな金、もらえるわけがない。

「あのさ……。これじゃ、金額ゼンゼン足りないし。おうちの人が帰って来たら、このチラシにある窓口まで払いに来てくれれば、すぐに電気をつけるよ。ねっ」

ミコトは女の子の目を見ないように言うと、二千元の入った封筒を返却してクルリと背を向けた。

「あの……待ってください。お願いです。お父さんもお母さんも今日は帰って来ないの。一人で、夜……暗いと怖いです」

つい、うっかり振り向いてしまった！

絶妙のタイミングで、女の子のつぶらな瞳から涙がポロリとこぼれた。

ああ……今日もノルマ達成できず……か。

ミコトはため息をつき、カバンの中からピンクの紙を取り出した。一週間後の日付を記し、女の子に手渡す。

「今日は、電気つなげるけど、一週間後のこの日までに支払いが無ければ、また同じ事になるから。必ずおうちの人に見せてね」

「ありがとう……本当に、ありがとう」女の子は何度もミコトに向かって頭を下げた。

車に戻ると、飯田が読んでいたスポーツ新聞から目を上げた。

「おい、やけに遅かったじゃねえか」

「人が出てきて……」

ミコトは飯田の鋭い視線を避けるようにうつむいた。

「金、もらってきたのか？」

「いいえ、来週まで延伸しました」ミコトはボソリと言って、運転席のシートベルトを締めた。

飯田は無言でミコトを見詰めた。

ミコトはいたたまれなくなり、上ずった声で言った。

「だ、だって……仕方ないじゃないですか。小学生の女の子が一人で出てきて、修学旅行の積立金二千元を払おうとしたんですよ」

「けっ……じゃあ、一部収入二千元って事か」

ミコトは目を丸くする。

「そ、そんな！先輩、鬼みたいなこと言わないでください！もらえるわけないでしょ、そんなお金」

お前、バカじゃねーの？ といったげな目で、飯田はミコトを見て言った。

「金に、そんなもこんなもねえよ。何の金だろうと、もらえるもんをもらわなきゃ、仕事になんねえよ」

飯田は長い前髪を、うるさそうにかき上げた。長身で、パツと目を惹く容姿。『花がある』と言う言い方がピッタリの飯田は、女子社員から絶大な人気がある。飯田はミコトより二つ年上だ。一年先輩だが、二つ年上……。これは、あくまでもミコトの推測だが、つまりは一浪しているという事だろう。出身大学も二流程度、有名一流大学卒のミコトとは、ダンゼン頭の出来が劣る……と、ミコトは

思う。しかし、入社してしまえばそんな事は関係ない。仕事が出るか出来ないか、女にモテるかモテないか、上司にウケるかウケないか、そんな事がとても重要なのだ。

「じゃあ、先輩は子供から金を取り上げるようなマネ、やった事がありますか？」

飯田を睨みつけて、ミコトは詰め寄った。ここまでシビアに言うからには当然、ミコトに出来ない事が、飯田には出来るということだ。

「当たり前エじゃねえか。あれは、正月明けだったか……寒い日です。電気を止めた途端に子供が出てきやがってさ、わらわらと四人も」

「で、どうしたんです？」ミコトが身を乗り出す。飯田はつまらなそうに鼻を鳴らして言った。

「マニユアルどおりに、『金を払えば電気をつける』って言って、チラシを渡したら、お年玉の袋を持って来たんだ……一番大きい子がさ」

ミコトは絶句する。

「お……お年玉」

「それでも足りねえよって言ったら、弟もお年玉を持って来て、それでちゃんと集金して電気つけてやったぜ」

ダメだ……！ オレにはそんな事出来ない！ ミコトは頭を抱えて呻いた。

その様子を、憐れみともつかぬ目で見つめながら、飯田が言った。「なあ、篠原よ……。今、お前があの子に同情して金をもらわなかったからってさ、たぶんあの家、次はガス屋が来て、その金持って行っちゃまうと思うぜ」

「な！」ミコトは言葉を失った。

ああ……なんて、ヒドイ世の中なんだろう。こんな時、ミコトはつくづくそう思っただった。

憂鬱な気分で次の現場に移動する。持ち出し件数二十件のうち、まだ半分も終わっていない。

「飯田さんも手伝ってくださいよお。今日まだ一件も仕事してないじゃないですか」

ミコトは口を尖らせる。

助手席のシートを倒し、顔の上にスポーツ新聞を乗せていた飯田が、新聞をずらしてチラリとミコトの方を見た。

「あのなア、オレはお前の指導員として来てるの。だから、実務は全部お前がやるの。わかった？ ミ・コ・ちゃん」

ミコトのこめかみに青筋が浮いた。

「いくら新入社員だからって、そんなふうにからかわないで下さい！」

ハッハッハ！ 楽しそうな笑い声が車内に響いた。ミコトが怒るほどに、いつも飯田は楽しそうに笑うのだった。

次の現場はマンションだ。車を止めて出向リストを確認しているミコトの手元を、飯田が覗き込んだ。

「あ……ここ、オレ、行くわ」

「え？」

飯田はミコトの手元から顧客カードを奪い取ると、さつさとマンションのエントランスに入って行った。

「ほえ、めずらしい。飯田さんが自ら出向くなんて」ミコトは何気なく飯田の向かった家の名義を見る。

『タコジマ アソブ』

「タコジマ……？ なんじゃこりゃ。ヘンな名前」

ファンキーな名義に、ミコトはどうしても『タコジマ アソブ』なる人物の顔を見たくなってきた。路肩に止めた車から降りて、ドアをロックすると、ミコトは飯田の後を追った。

「えーと、確か307号室だっけ……」

エレベーターを三階で降りて、開放廊下を覗くと、飯田が307号室の中に入って行くのが見えた。飯田が「自分に任せろ」と言っ



たのに、のこのこついて来たのは気が咎めたが、どおおおしても『タコジマ アソブ』の顔が見たい。中年のオッサンか、はたまたタコのような赤い頭をした若者か？

ミコトは307号室のドアを軽くノックして引き開けた。

「すみませーん」

玄関に展開されている光景に、ミコトは思わず「あ！」と言って後ずさった。

飯田が大柄の美女と、濃厚なキスシーンを繰り広げている。飯田はチラリとミコトを見ると、女の腰に回した手をサツサツと振った。あっちへ行つてろ！のサインだ。美女はうつとりと目を閉じて、飯田の唇を貪っている。

半分腰が抜けたような情けない状態で、ミコトは307号室を後にした。

な、なんてことだろう！ 飯田が他人の奥さんと？ これは明らかに、不倫だ！

ミコトが顔を真っ赤にして軽自動車のハンドルに突っ伏していると、何事も無かったかのように涼しい顔をして、飯田が戻ってきた。「ホイ。全額集金したぜ」そう言くと、飯田は顧客カードと現金をミコトに手渡した。助手席に乗り込んだ飯田は、ダッシュボードから粗品用の白いタオルを一つ取り出した。彼は勝手に封を切ると、タオルを首にひっかけて言った。

「悪いけど、この先の公園に寄つてくんねえかな」

公園に着くと、飯田は真っ直ぐ水道に向かって歩いて行き、二、三回うがいをする、バシャバシャと顔を洗った。

「オエ……まずい口紅だ。ニナリツチか？」

飯田の後を犬のように付いて歩いて来たミコトは、恐る恐る彼に声をかける。

「飯田さん……いいんですか？ 仕事中にあんな事……。しかも、人の奥さんと」

「え？」

飯田が何事かと言う顔で振り向いたが、ミコトと目を合わせた途端に、サツと顔を背けた。

「別に……いいんだよ。だって、金もらえただろうが。カラ手で帰って来る誰かさんより、よっぽどマシだと思うけど」

ミコトはぐつと答えに詰まって、口をつぐんだ。確かに飯田の言うとおりかもしれない。自分たちは電気を止めるのが仕事ではない。未納金をもらってくる、集金員という肩書きなのだ。止めるのは、やむを得ずの時の手段だ。でも……。

複雑な表情で眉根を寄せるミコトに向かって、飯田は五百円玉を手渡して言った。

「おい、篠原。あそこの自動販売機で缶コーヒー買ってきて。冷たいヤツね。お前も好きな買えよ」

ケツ……またパシリかよ！

ミコトは黙って自販機に走って行った。

十年前に山を崩して住宅地になったこの辺り一帯は、それなりに街路樹も育っており、のんびりとしたたたずまいを見せている。公園内にも緑が多く、砂場では小さい子供を遊ばせている若い主婦のおしゃべりが、風に乗って耳に届いた。

公園を突っ切って戻ってくると、飯田は長い足を組んでベンチに座り、両腕を背もたれに回してぼんやりと空を見ていた。

ミコトはふと歩調を弛めて、飯田の視線を辿った。パステルブルーの春の空に、白い綿雲がひとつ、ふわりと浮かんでいる。

彼はアレを見てるのか？ ……なんかあの雲、シュークリームに似てるな。

「あー、シュークリーム食いたくなってきたな……」

飯田がボソリとつぶやくのが聞こえ、ミコトはドキッとした。こんな無神経な冷血漢と同じ事を考えていたかと思うと、動揺を隠せない。ミコトはドギマギしながら、缶コーヒーを飯田の鼻先に突きつけた。

「お、サンキュー」

飯田は軽い口調で言うと、プシュツとプルタブを開けた。

いただきます、と言ってミコトは飯田の隣に腰を下ろした。無言でコーヒーをすすりながら、ミコトは横目で飯田を盗み見た。

目元まではらりと掛かった前髪を、春のそよ風がふわりと掻き乱すと、整った顔が現れた。誰が見ても、必ず平均以上のイイ男と認めざるを得ない。ミコトは飯田をひと目見た時から、自分と比較しては、絶えず落ち込んでいた。

「お前、どうして帝都電力に入ったんだ？」

突然飯田に尋ねられ、ミコトは口ごもる。面接用の答えは簡単だ。「御社に魅力を感じたからです」「公共性のある仕事に、やりがいを感じます」等々……。でも、今の飯田の問いは、そんな事を訊いているのではない……と思う。

「オレ……向いてないですね、この仕事」

ミコトは思わずポロリと本音をつぶやく。

入社してから早一ヶ月。電気代の回収を担当する部署に配属され、毎日何十件もリストアップされた未払い客の家を回るが、ほとんど回収できた試しが無い。

「お金が無い。もう少し待ってくれ」と言われる度に、ついついズルズルと延伸してしまうという事を繰り返しているのだ。

「向いてる、向いてないと判断するのは、時期尚早だと思うが、本人がそんなふう zu 思っ てんなら、きつと向いてねえんだろ うな」

飯田もミコトの言葉を否定しなかった。

「オレ、ダメなんです。飯田さんみたいに、シビアになれない。ついつい気の毒になっちゃって……」

飯田はじつとミコトの横顔を見ていたが、残りのコーヒーを一気に飲みすると言った。

「まあ、お互い人間同士だからな。気持ちわかるが、同情したからといって客の言いなりになっ てばかり、というのもちよつと違 う 気がする」

「え？」ミコトはパツと顔を上げた。今のは、どういう意味だ？

飯田はサツとベンチから立ち上がると、車に向かって歩き出した。

「まって！ 飯田さん」

ミコトは慌てて飯田の背中を追いかけた。

車に戻つてくると、飯田が運転席に座った。

「時間が押してる。スピードアップするぞ。顧客カードに良く目を通しておけ」

そう言うとき飯田は、本日分の顧客カードが入っているファイルを、ミコトに手渡した。

ミコトはうつむいて、ファイルを受け取った。昼近くになって、まだ予定の半分しか終わっていないのだ。

彼はミコトをダメなヤツだと思って、きつとひどく呆れてるんだろう。

そう思うとき、悔しいよりも悲しかった。新入社員とはいえ、一ヶ月近くも毎日、毎日、同じ事をしていれば、そろそろコツが掴めても良いものだが、もともと人見知りの強いミコトは、他人と話をする事が大の苦手だった。それなりに年齢を重ねて、なんとか日常会話は他人に不快感を与えずに受け答えできる程度になったが、ちょっと混み入った話になると、すぐに相手のペースに巻き込まれていくのだった。

「着いたぞ」

ぼんやりと考え事をしてるうちに、次の現場に到着していた。

古い住居が並ぶ住宅街の玄関先で、インターホン越しに支払いの交渉に入ると、主婦の声が驚いたように言った。

「すみません、電気屋さん。今朝、主人にお金を渡して出勤の途中で支払いをもらうように頼んだんです。ですから、今ここにお金はありません」

ミコトは一瞬、口をつぐんだ。こういう場合は、待つべきなのだろうか？

「あの、さっき僕、確認したんですが、まだお支払いいただけてな

みたいで……。ご主人はどこでお支払いになるのかご存知ですか？」

「ええっ？ どこで払うかなんて、知りませんよ。……本人に訊かないと」

当たり前の事を言わないでくれ、と言う調子で、インターホンから主婦の声が言った。

ミコトはため息をつく、「わかりました」と言っ、て、しぶしぶ引き揚げた。

また、お金を払ってもらえなかった。持ち出し件数二十件のうち、今のところお金をもらえたのはたったの一件。しかもそれは、先程のマンションで、飯田が『タコジマ アソブ』なる人物から集金した金だ。

ミコトは打率ゼロだった。

車に戻ると、前方から飯田が走って来た。

「篠原、これ、カバンに入れておいてくれ」

飯田は三件分の顧客カードと現金をミコトに手渡した。

「飯田さん、三件もまわってくれたんですか？」

「おお、たまたま三件とも払ってくれて、ラッキーだったよ」

ミコトは目をみはった。自分が一件行って来て、しかも空振りだったというのに、飯田はあつという間に三件のお金を集金して来たのだ。一年先輩だからと言って、あと一年経った時、自分は今の飯田と同じくらい仕事が出来るとは、とても思えなかった。

「すみません、飯田さん。オレがグズなばかりに……」

シユンとするミコトに、飯田は一瞬「へ？」という表情を見せたが、すぐにハハハと笑って、子供をあやすようにミコトのネコツ毛頭をポンポンと軽く叩いて車に乗り込んだ。

なんだか、まともに相手にされていないようで、ミコトはフウとため息をつき、助手席に座った。

飯田のおかげで、気がつけば残り一件となっていた。

ラストの一件は、大きな屋敷のような住宅だった。門扉に付いたインターホンを鳴らす、応答は無かった。

こんなでっかい家に住んでいるくせに、電気代を滞納しているなんて、いったいどうなっているのだろう。非常識すぎる。

ミコトは胸の内で悪態をつく、門の取っ手を回した。鍵は開いている。玄関ドアに目をやると、そこにも呼び鈴がついていた。そちらも押してみようと思い、ミコトはそっと門扉を押し開けた。

彼は勝手に入って行くと、ドアに付いている呼び鈴を押した。やはり応答が無い。留守のようだ。

ミコトは停止作業をするために、住宅の裏へ回って電力メーターを探した。景観を損ねないように、電力やガスのメーターは大抵家の裏や、勝手口付近に取り付けられている。

目的のメーターを見つけ、二次側の配線を引っこ抜こうと手を掛けた時、唸り声がした。

「ウウウウウ」

ミコトはハツとして固まった。庭の方から大きなドベルマンがこちらを見て唸っている。首輪をしているが、鎖に繋がれていない。犬は呻りながら歯を剥き出した。

ま、まずい！

ミコトの背中に汗がひと筋流れた。……と、その時、背後から飯田が飛び出して、犬とミコトの間に立った。

「おい篠原、早く作業しろ！ 引っこ抜いたら逃げるぞ！」

飯田が言い終わらないうちに、犬がこちらに向かって走って来た。「うわぁ！」思わずミコトは叫び声を上げた。

犬が飯田の脛の辺りに噛みついたのだ。

「飯田さん！」

気が動転して、ミコトは頭の中が真っ白になった。飯田のブルーの作業ズボンが、みるみる紺色になってゆく。飯田は足を犬にかじらせたまま怒鳴った。

「し・の・は・ら ボケエ！ 早く引っこ抜け！」

ミコトははじかれたように動き出し、配線を切った。

「逃げるぞ！」そう言うと、飯田は足に噛みついている犬の腹に、もう一方の足で思いつきりケリを入れた。

ギャウン！ と悲鳴を上げた犬が、遙か彼方に蹴り飛ばされた。

二人は猛ダッシュで玄関へまわった。すると、なんと家の逆側からさっきの犬が物凄い勢いで走ってくるのが目に入った。犬は狂ったように吠えている。

「うわぁ、き……来た！」

思わず立ちすくんだミコトを、飯田が肩で門の外に突き飛ばした。間一髪、飯田が脱出して閉じた門扉にドーベルマンが突っ込んで、ガシャンと物凄い音をたてた。

ミコトと飯田は二人して額の汗を拭った。

「マジ、ヤバかったな……」つぶやいて、飯田はガクリと膝を付いた。

「飯田さん、大丈夫ですか？」

ドーベルマンに噛まれた飯田の足は、膝から下が血だらけだった。ミコトは真っ青になった。

どうしよう、どうしよう！

「大丈夫だよ。今のが最後の一件で良かったな。へへっ……」

そう言った飯田の手元から、ひらりと落ちた顧客カードに目を留めて、ミコトはハッとした。大きな赤い文字で『犬放し飼い要注意』と書かれていた。さっき飯田から顧客カードによく目を通しておけと言われていたのに。

無防備に門を開けて入って行った自分を心配して、飯田は犬に噛まれてしまったのだ。ミコトは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。病院へ行ったほうがいい、と心配するミコトに、飯田は「へーきへーき」といつもの調子で軽く言った。

「オレは平気だから。犬に噛まれる事なんて、よくあるんだ。とにかく時間が無いから、早く会社に戻ろうぜ」

飯田は助手席に乗り込むと、涼しい顔でタバコに火を点けた。

血だらけだけど、見た目ほどひどくないのだろうか？

ミコトは飯田の言葉に従って車を運転し、会社に戻った。

会社に戻ると、飯田は着替えて傷の手当をするから、と言って更衣室に行ってしまった。心配で「手伝います」と言ったミコトのおでこをチョンと軽くつついて、飯田は「さっさと仕事しろ！」と叱りつけると、更衣室のドアをパタンと閉めた。まるで、オレに構うな、迷惑だ。とても言うように鼻先で閉められたドアを、ミコトはやり切れぬ思いでじっと見詰めた。

今まで自分をダメなヤツだと思った事など一度も無かった。勉強はいつも人より出来たし、スポーツだってそこそこだった。思えば何かにつまずくなどという事が無いままに、今日に至った気がする。気が抜けたようにふらふらと自分のデスクに戻ると、ミコトの上司の坂井課長がやって来た。この部署で一番偉い坂井は、今年の二月に転勤してきたばかりの新課長だった。

ひとことと言うと『脂ギツシユな中年』というのがピッタリだ。

小太りで、少し薄くなり始めた髪に、ゆるくパーマをあてている。

小さな下がり気味の目がいつも笑っているように見え、この男の第一印象を温厚そうに見せていた。

「どうかね、篠原くん。仕事には慣れたかい」親しげにポンと肩に手を置かれ、ミコトは坂井を曖昧な表情で見返した。

「頑張っているようだね。頭にクモの巣がついているよ」

そう言うのと、坂井はミコトのネコツ毛を一房つまんで、何かを捨てる仕草をした。父親のような雰囲気呑まれ、つい本音が口をつく。「もう一ヶ月になるのに、僕はぜんぜん慣れません。どうしてでしょうね」

「ふーむ、本来なら一流大学卒のキミに、こんな末端の現場作業をさせるのはどうかと思っていたんだけど、これもボクの前任者の方針でね。今年度はその方針を変えられないんだよ。もう少し我慢してくれよな」



ハア……とため息をつくミコトに、坂井は思いもよらぬ言葉を言った。

「一ヶ月も経つのに、満足に新人に仕事を仕込む事も出来ないとは、こりゃ、指導員である飯田の責任だな」

「え！」

つい、うつかり言ってしまったグチが、とんでもないことに！

「か、課長。それは違います！ 誤解です。僕は……」

ミコトが弁解する間もなく、坂井は別の話を始めた。

「そうそう、篠原くん。もうすぐ支店長との懇談会の時間だ。筆記用具を持って会議室に行きなさい。ネクタイをキチンと着用し、社章も着けてね」

ミコトは「あっ」と口に手をやった。すっかり忘れていたが、今日は新入社員と支店長の懇談会があったのだ。支店長は、平社員のミコトにとっては、会社の中で最も偉いと認識している人物であった。普通、会社で一番偉いのは代表取締役社長だが、大きな会社組織である帝都電力は、本社に勤務しない限り社長の姿をナマで見る機会など皆無だった。したがって、社長はミコトにとっては雲の上の目に見えぬ存在だ。実際に姿を見て話の出来る範疇で、支店長は今のミコトの中で、最上の人なのである。

ポケットとしているミコトに、念を押すように坂井は言った。

「終わったらすぐに外の店で接待するから、キミも来るんだよ」

「え、でもまだ仕事が……」

あたふたするミコトに、坂井はつまらなそうに言う。

「そんなのは飯田くんにやらせておけばいい。キミは早く会議室に行きなさい」

ミコトは慌ててデスクの引き出しからノートを取り出して、ふと飯田の言葉を思い出した。

『時間が押してる』

あれは、ひょっとして、支店長との懇談のことを言っていたのだろうか。

まさかね……。

ミコトはズレたメガネを鼻に乗せなおすと、会議室に向かった。

飯田は男子更衣室のパイプ椅子に座り、犬に噛まれた左足にそつと触れた。

「うつ……」

思わず口から呻き声が漏れる。

早く会社に戻らなければと思い、平気なフリを装ったが、本当はあまりの痛みに今にも気を失ってしまうのでは、と思うほどだった。血液で湿って重くなったズボンの裾をめくって、飯田は思わず顔を背けた。自分の足が正視できない。肉を食い千切られなかっただけ、幸運だったのかもしれない。

この仕事はある意味犬との戦いでもある。

ミコトに話したとおり、飯田は何度も犬に噛まれた経験があつた。いろいろな会社の取立て人や作業員が入れないように、わざと犬を放し飼いにしている家もある。

しかし、さすがにドーベルマンともなると、アゴの力は尋常ではない。

飯田は更衣室の奥にあるシャワールームに行き、痛みを我慢して患部を洗った。帰社途中でミコトに買ってこさせた消毒薬や包帯で、何とか傷口を覆う。巻き付けるそばから血に染まる包帯を見て、飯田は眉をしかめた。

とりあえず、定時であがって医者に行くことにして、何とか手当てを終えた。ズボンをはき替えると、飯田は何事も無かったような顔で自分の部署のフロアに入って行った。

自分のデスクに戻ると、元々山積みになっていたトレイの山が、さらに一段高くなっていた。新人のミコトに付いて、一日中外回りをしているが、飯田には飯田の仕事がある。ミコトのために時間を費やしたからといって、その間誰かが彼の代わりに彼の分の仕事をしてくれるわけではない。必然的に仕事は溜まってゆく事となり、

今では積み上がったトレイがタワーのようになりつつあった。

どこから手を着けていいかわからず、ぼんやりと書類の入ったトレイの山を見詰めていると、課長の坂井がやって来た。

「飯田くん、今日の結果はどういうことだ？」

ミコトに対する態度とは打って変わって、厳しい声で坂井は言った。手には本日出向分のリストを持っている。無言で振り返った飯田に、坂井は不愉快そうに目を細めて言った。

「持ち出し件数二十件のうち、収入が四件、停止作業が五件。あと  
の十一件が延伸とは！ お金をもらって来なさい、お金」

「どうも、すみません」

飯田はうつうつらで謝って、椅子に座ったままぺこりと頭を下げた。

「いいか、篠原くんは新人だ。何の為にお前が同行してると思ってるんだ。前・課長の石塚さんに気に入られていたからって、私は彼のようにお前を甘やかす気は無いからな」

小さな細い目を吊り上げて飯田を叱りつけると、坂井はくるりと背を向けて、それから、ふと思ひ出したように付け加えた。

「篠原くんは懇談会の後、私や所長と共に支店長の接待に入っても  
らう予定だから、彼の分の残務整理もやっておくように。いいね」

飯田は返事の代わりにピクリと片眉を吊り上げて坂井を見た。

彼の態度に、坂井の顔色がわずかに赤味を増したかに見えた。坂井は手に持ったリストをぐしゃっと握りしめて踵を返すと自席に戻って行った。

飯田は、坂井の前任者であつた石塚を懐かしく思った。前・課長だつた石塚という人物は、極めて有能な上司であつた。たつた二年の任期の間に、飯田のいるこの事業所の債権回収率を県内トップに押し上げたやり手だ。部下の扱いが上手く、業務にも精通していて、誰からも一目置かれる好人物だつた。

委託社員として働いていた飯田の仕事ぶりに惚れこんで、正社員に引き揚げてくれたのも、石塚だつた。委託社員から正社員に引き

揚げるなど、今どきの就労事情では、異例の好待遇だった。委託社員と正社員では、圧倒的に待遇が違う。福利厚生や労働条件など、天と地ほどの差がある。

飯田は自分を取り立ててくれた石塚の恩に報いる為に、一心不乱に努力した。また、石塚も、中途採用の飯田を、他の社員と区別する事無く正當に評価してくれたのだった。

しかし、その石塚も、今年の二月に辞令が出て、さらに上へと出世して、この事業所を去ってしまった。

後任の坂井は、けっして無能ではないが、石塚と比べると、やはり彼はただの凡人だった。坂井は前任者の石塚に対して、異常なほどにライバル意識を持っているらしく、石塚の忘れ形見のような飯田に対して、最初から敵意のこもった態度で接してきたのだった。

飯田は痛む足を庇いながら、のろのろとミコトのデスクに移動して、坂井に言いつけられたミコトの仕事を、黙って片付け始めた。

## 半人前にもできること

支店長の待つ会議室に入って行ったミコトは、先に来ていた同期入社の女子社員、上条ありさかみじょうの隣に座った。上条ありさも、やはり一流大学卒の美人で、父親は大手ＪＢトラベルの幹部だと聞いている。根っからのお嬢さまで、カップ焼きそばの作り方も知らなかった事にミコトは啞然とした。食べたことがないのかと尋ねると、彼女はしれつとして言ったのだった。

「そういう低俗なものは婆やが買ってくれないんだもん」

カップ焼きそばが低俗って、どういう意味だ！ しかも今どき婆やって……？

ミコトは、目線を上条ありさから会議室全体に向けた。

会議室内には支店長を筆頭に、入社試験の面接の時に見たことのある、支店の幹部がズラリと並んでいた。後で聞いた話だが、支店長と新入社員が懇談会をするのは毎年恒例で、この企画をすることにより、各事業所にその為の多額の予算が下りるらしい。要するに、交際費の予算を獲得する為のイベントなのだった。

そんな事を知らないミコトは、最初から最後までガチガチに緊張したままで過ごし、終わった時には今にも倒れそうなほどに疲労していた。

ミコトとは対照的に、上条ありさは終始リラックスした笑顔を振り撒いて、オジサマたちにおおいにウケていた。

飯田の足のケガが心配で、退室早々に部署に戻ろうとするミコトに、課長の坂井が声をかけた。

「今から五分以内に帰り支度をして、社員通用口に来なさい。我々は先に店に行って、料理を注文しておく役目になっている」

「え……でも、明日の足順も組んでないし」足順とは、現場を回る順番のこと、これをきちんと組んでおかないと効率よく現場作業がこなせないのだ。

ばそぼそ言つミコトを一喝し、坂井は彼の尻を叩くと繰り返した。

「五分以内だ、いいな。これは課長命令だ。早くしろ！」

『これは課長命令だ！』……何だか理不尽な気がした。

自分は仕事をする為に来てるのだ。飲み会の為じゃない。

どうもこの会社は、何かと言うとすぐに飲み会だの、打ち上げだのをするらしいのだ。きつと、上司がそういうカラーなのだろう。

酒が苦手で、人と話すのも苦手なミコトにとって、宴席は拷問以外の何物でもなかった。

「五分以内」と言われたが、どうも飯田の事が気になり部署に戻る  
と、ミコトのデスクはきれいに片付けられていた。

「飯田さん……あの」

ミコトの声に、飯田は積み上がったトレイの陰からチラリと彼を見上げて言った。

「ご覧のとおりお前の仕事は片付いている。足順も組んだ。さつさ  
と行けよ」

でも……とぐずぐずしているミコトを見て、飯田はフツと笑ったように見えた。

「接待も仕事のうちだぜ、ミコちゃん」

彼の言葉で、ミコトの顔が一気に赤くなった。心配などして損をした気分だ。ひらひらと手を振る飯田に、ふくれっ面で頭を下げると、ミコトは憤然とした足取りで着替えに行った。

駅近くの新しいビルに入っている小綺麗な居酒屋。その一番奥の個室を借り切つて催された宴会は、このご時勢にあつてはならない、理不尽な『業務命令』の元、窓口業務担当などの綺麗どころの女子社員を集めるだけ集め、まるでキャバクラのような状態だった。乾杯からまださほど時間は経過していないというのに、オジサマたちは上機嫌だ。不思議系お嬢さまの上条ありさは、何故か経済通で、支店長と人事部長を相手に株式投資の話題で盛り上がっていた。

「ミコちゃん。支店長さんにウーロンハイおかわりね」

ニコニコしながらオーダーを言いに来た上条ありさに向かって、ミコトはムツとして言い返した。

「上条さん、そういう呼び方やめてくれないかな」

「あらあ、どーしてエ？ 私とあなたは二人っきりの同期じゃない。親しみを込めて呼んではいけないのお？」

からかっているような、甘ったるいしゃべりかたで、上条ありさはクスクスと笑った。

「飯田さんも篠原クンのこと、ミコちゃんって呼ぶじゃない。あれは、よいわけえ？」

答えに詰まって、顔を真っ赤にするミコトを楽しそうに眺めて、上条ありさはまた、クスクスと笑った。

宴会はなかなか終わる気配が無い。ミコトはひたすらアルコールの注文係に徹していた。人と話をしなくて済む分、この役のほうが好都合だ。このまま早く終わってくれ。

そんなミコトの祈りも虚しく、トイレから戻ってきたひとりのハゲ頭のオヤジが彼にぶつかった。

「すみません」謝るミコトを、トロンとした目で見ると、ハゲオヤジはニマ〜と笑っていきなり肩に手をまわしてきた。

「ちょ、ちよつと……！」

えーと、この人誰だっけ？ あまりに大勢のオッサンが居るので、誰が誰やらよくわからない。そうこうするうちに、ハゲオヤジは「まあまあ来なさい」と言つて、ミコトの肩を抱くようにして自分の席の方に連れて行った。

おたおたしているミコトに、ハゲが話しかけた。

「いやあ、キミ、篠原くんだったけ？ 可愛いね。あっちに大勢居る、愛想笑いのおねえさんたちより、よっぽど初々しくて好感が持てるよ」ハゲは酒臭い顔を近づけてきた。すると、もうひとり新手のオッサンが逆サイドからミコトに寄って来た。

「お、配電課長。可愛い新人に、何か良からぬ事してるんじゃないですか？」そう言ったオッサンは、見事な馬面だった。

馬面とハゲに両側からガツチリ固められ、ミコトは身動きがとれず、仕方なくテーブルに着いた。グラスを手にしたされ、いらぬ酒を注がれる。この馬面は、確か広報担当の偉い人だと、ようやく思い出した。

ミコトは苦笑いをしながら、一杯、二杯と、注がれるビールを飲み干した。あつという間に、ミコトの白い肌がピンクに染まった。

一次会が終わる頃には、ミコトはすっかりゆでだこのように赤くなっていた。

お金の精算のために、坂井課長について席を立ったミコトは、何も無い所でコケた。ミコトを助け起こしながら、坂井はダメな子供を見る父の様な温かい目を彼に向けて言った。

「飯田と違って、キミは素直で可愛いね。」

「え？」飯田の名前が出て、ミコトはドキリとする。

「あいつは元々、街金の取立て屋あがりだ。しかも、大学も二流の夜学卒だし。キミのように一流大学出の正規の新卒採用とは訳が違う。仕事に関しては見習うべき事もあるだろうが、それ以外はあまり彼とは親しくしない方がキミの為だよ」

温厚で、人当たりの良さそうに見えた坂井課長の口から、こんな辛辣な言葉が出てくるとは……。ミコトは何ともいえない嫌な気持ちになった。

坂井は二次会に出席するようと、ミコトに促したが、精神的にも体力的にも、もうこれ以上飲み会には参加できない状態だった。「すみません、気分が悪いんです。今にも吐きそうなのでご迷惑にならないうちに、帰りたいのですが」

ミコトは坂井に弁解して、帰る事を許してもらうと、駅には向かわずに会社への道を戻り始めた。

今日の失敗をふまえて、明日の顧客カードに目を通しておくつもりだった。

夜九時少し前、商店街をぶらぶらと歩きながら、閉まりかけたケイキ屋のウィンドウを見て、ミコトは思わず店内に飛び込んだ。



あー、シュークリーム食いたくなってきたな……

飯田のつぶやく声と共に、パステルブルーの空の色が頭の中に甦って来た。

「いらつしゃいませ」

店の女性従業員に声をかけられてハツとする。この時間では、もう飯田は帰ってしまっているに違いない。ミコトは苦笑しつつも、シュークリームを三つ買うと店を出た。

会社の社員通用口に着くと、ミコトは社員証を取り出した。セキユリティーロックに自分の社員証をスキャンし、暗証コードを入力する。カチツと音がしてロックが解除された。

『省エネ』の為に、ほぼ全館消灯された暗い建物の廊下を歩いて行くと、遙か先のフロアに煌々と灯りがついていた。

「うちの部署だ。誰かいるのかな？」

静まり返った他の部署を通り過ぎて、ミコトがフロアに入って行くと、積み上がったトレイの陰に飯田の頭が見えた。

「飯田さん？」小声で呼ぶが、返事が無い。並んだデスクを回り込んで飯田に近づくと、彼は書類の上に突っ伏して寝ていた。

「飯田さん」もう一度声をかけると、飯田は目を覚ました。

飯田はぼーっとしてミコトの顔をしばらく見ていたが、不機嫌そうな声で言った。

「お前、何してんだよ」

「あ、明日の仕事分の確認を……」言いかけてミコトはハツとした。飯田の顔は真っ青で、額から脂汗が吹き出している。ミコトは手に持っていたカバンとシュークリームの箱を放り出すと、飯田に駆け寄って彼の頬に触れた。

「熱、あるじゃないですか！」そう言ってから、あっと思い当たり、ミコトはしゃがみ込むと素早く飯田のズボンの裾をめくり上げた。

「うわっ！」

飯田の左足は、膝から下が内出血でどす黒く変色し、パンパンに腫れていた。

「オレに構うな！」飯田はミコトの手を払い除けた。真っ青な顔は、本気で怒っているように見えた。

普段のミコトだったら、こんなに怒っている相手に対しては、スゴスゴと引き揚げてしまふところだが、今はアルコールが入っていて、妙に気分が高ぶっていた。

「なんで、すぐに病院に行かなかったんですか」強い口調で珍しく言い返してきたミコトに、飯田は荒い息づかいで、ぶっきらぼうに言った。

「そんなの、お前に関係ねえだろ。仕事してんだよオレは。じゃますんな！」

強がっているのが見え見えの飯田の態度が、逆にミコトの酔った頭をクリアーにした。

ミコトから目を背け、手当たりしだいに書類を引っ張り出している飯田に向かって、ミコトは言った。

「飯田さんの仕事は、オレがやっておきます」

ミコトの言葉に飯田が振り向いて、目を丸くする。

「……って、言えたらカッコいいけど。残念ながら、オレにはあなたの仕事は出来ません」

ミコトは飯田の整った顔を見据えながら言った。フツと飯田は瞳だけで笑った。

「んじゃ、わかってんなら とつとと帰んな。ミコちゃん」

ミコトは一步前に踏み出して言った。

「でも！ 仕事は半人前でも、社会人としては一人前のつもりです」再び飯田の目が、何事かというように見開かれる。

「社会人として、オレのせいでケガをした飯田さんを、このまま放って帰る事はできません！」瞳に力を込めてそう言うと、ミコトは飯田の腕をとって、自分の肩に回した。

「おい篠原、何すんだよ！」

喚く飯田を引きずるように、ミコトはエレベーターに向かった。「救急病院に行くんです！」

嫌がる飯田をタクシーに乗せて、救急センターにやって来たミコトは、ソファに座って処置室のドアを見詰めていた。飯田が入室してから、もう二十分以上経っている。

さらに十分ほど経過してドアが開き、飯田が出てきた。左足のズボンがめくられて、膝から下に包帯がぐるぐる巻きになっていた。「まったく、すぐに来なきゃダメじゃないか」

飯田の後から出てきた色黒の医師が、不機嫌そうに言った。

「このまま放っておいたら、内出血のせいで左足が壊死してしまうところだったじゃないか。そんな事になったら、ヘタすりや膝下を切断だぞ」

医師の剣幕に、飯田が「うへっ」と言っ、肩をすくめた。

担当の色黒医師は、今度はミコトに向かって言った。

「付き添いの人だね。足のケガ、二十二針縫ったから。入院を勧めただけど、彼、嫌がるから仕方ない。今夜たぶん発熱して痛がると思うけど、足を動かさないように注意してやってくれよ。それから、六時間後に薬を必ず飲ませるように。いいね」

ミコトは深々と頭を下げると、色黒医師に何度もお礼を言った。

当の飯田はムツとして、あさつての方を向いたままだった。

救急センター前から再びタクシーに乗り、飯田のアパートに向かった。飯田は数年前からこのアパートの二階で一人暮らしをしているとの事だった。

ミコトが肩を貸してようやく階段の上までくると、飯田はぺこりと頭を下げた。

「悪かったな。手間かけさせちまって」

いつもと違って殊勝な飯田の態度に、ミコトは信じられない、という顔つきで目をパチクリさせた。

カギを開け、敷きっぱなしになっている布団に飯田を寝かせると、ミコトは台所に行つて病院で買つてきた水枕に砕いた氷を入れた。

目を閉じてぐったりと横たわっている飯田の頭の下に水枕をあてがうと、彼は形の良い眉をしかめて薄目を開けた。

「サンキューな、篠原。……もう、帰れ」

「先輩こそ、何も考えないで寝てください」

ニツコリ笑って声をかけると、飯田は目を閉じて静かになった。

飯田の荒い呼吸が寢息に変わったのを聞いて、ミコトはようやくホツとすると、ネクタイを弛めた。改めて、飯田の住まいをぐるりと見渡す。一人住まいと聞いて、想像していたよりは片付いていたが、やはり男の一人住まいはこんなもんだろ、というような部屋だった。

二間続きの間取りは、玄関を入ってすぐがフローリングの四畳半で、隅の方に台所が付いている。今、飯田が寝ているのは奥の部屋で、畳の六畳間だった。こういうのを1DKというのだろうか。よくわからないけど。ミコトは興味深げに部屋の中をチェックし始めた。開けっ放しの押入れには、カラーボックスが押し込んであり、本がずらりとならんでいる。中でも分厚い六法全書が目惹いた。飯田があの本を手に法律の勉強でもしてるのかと思うと、なんだか物凄くミスマツチな気がする。どう考えても週刊誌を読んでいる姿の方が似合っている。

けれど、その他にも債権確保に関するものや、交渉術のノウハウなどというタイトルの本が目についた。

「飯田さんが仕事出来るのは、陰で努力しているからなんだな……」人は見かけによらないものだ。

フローリングの部屋の隅に座椅子を見つけると、飯田の布団のそばにそれを持って来て座った。六時間後、ちょうど明け方の四時ごろに彼に薬を飲ませなければならぬ。今夜はここに居るしかない。と諦めて、ミコトはスーツの上着を脱いだ。

眠る飯田の青ざめた顔は、見事なまでに整っていて、見ているだけで目の保養といった感じがする。ミコトはふといたずら心をおこ

して、ポケットから自分の携帯を取り出すと、飯田の寝顔にピントを合わせてシャッターを切った。

「いじわるされた時とか、何かの役に立つかもしれない」

いつもからかわれたり、使いつパシリをさせられたりしている分、ささやかな仕返しのもりで、ミコトは数枚にわたって写した飯田のアップを、携帯のフレーム機能を使って加工してはひとり楽しんだ。

「ハゲのヅラをかぶせてみよう。さらに鼻眼鏡を追加。うひょひょ、おもしれえ」

いつの間にか携帯を握ったまま、ミコトは寝息をたてていた。

足の痛みに、飯田は突然目を覚ました。天井を見て、自宅であることがわかった。

今、何時だろう？

閉め忘れたカーテンから見える窓の外はまだ真っ暗だ。首をめぐらせると、座椅子に座ったまま眠っている後輩の姿が目に入った。

「篠原……帰れって言ったのに」

わずかに口を開けて眠るミコトの顔は、とても社会人には見えないくらい幼い。

仕事は半人前でも、社会人としては一人前。

そう本人が言っていたのを思い出して、飯田はクスツと笑った。

「腹、減ったな……」

ゆっくりと身を起こすと、ミコトのカバンのそばにケーキ屋の箱を発見した。手にとって開けてみると、シュークリームが入っている。

「賞味期限がせまってるから、食つといてやるか」

飯田は勝手にシュークリームをほおばった。

「ん、うまい」

菓を飲んで、ふとミコトのほうを見ると彼の携帯が目に入った。

画面に自分の顔が出ている。

「このやろっ、人が寝てるうちに妙な事しやがって。油断もすきもないな」

飯田はミコトの携帯から自分のフォトを消去した。無防備に眠りこけるミコトのメガネを外し、毛布を掛けてやると、飯田は彼の顔をまじまじと覗き込んだ。

「ホント、ガキみてえな顔してんな……」

飯田はミコトの携帯をカメラモードにすると、彼の顔に近づけてシャッターを切った。

がくりと首がかしいで、ミコトはハッと目を覚ました。起き上がった拍子に、掛かっていた毛布がズレた。視界がぼやけて、一瞬自分がどこに居るのかわからず、鼻の頭に手をやった。メガネが無い。「メガネは……?」

手元を探ると携帯に触れた。ほとんど鼻にくっつけるようにして時間を確認する。

『AM 6:47』

「あれ?」

違和感に、携帯画面をもう一度見直すと、待ち受けの壁紙が自分の寝顔になっていた。みっともなくヨダレを垂らしている。

昨夜の記憶が一気に甦って来た。

「しまった! 飯田さんに薬を飲ませるの、忘れた」何の為にここに居たんだか、まったく意味が無い。ぼんやりする視界で横を見ると、飯田の布団は空っぽだった。

のろのろと起き上がった時、玄関のドアが開いて、飯田が外から帰って来た。彼は玄関に杖代わりの傘を放り出すと、ひよこひよことびっこをひきながら歩いて来た。

「飯田さんっ! その足でどこに行ってたんですか!」

ミコトの言葉を見殺して、飯田はコンビニの袋から何かを取り出

す仕草をした。

「朝メシだ。顔洗って来いよ」

ミコトはおぼろげな視界で、怖々と一歩進み出た。飯田の手が頬に触れたかと思うと目の前が明るくなった。

「あ、メガネ……どうも」

ミコトは、ズボンのシワを伸ばしながら台所に行ってメガネを外すと、流し台で顔を洗った。ナイスなタイミングでタオルが飛んできて、パフッと頭に乗った。

「あ、ありがとうございます」

ミコトは落ち着かない様子で戻ってくると、飯田に尋ねた。

「飯田さん、薬、ちゃんと飲みました？」

「ああ、ちつと時間ズレたけど、飲んだ」

「足は？」

心配そうなミコトの顔を見て、飯田は大丈夫だ、と言うように大きく頷いた。

よかった……。心の中でつぶやいて、ミコトは俯いた。

結局、ここに泊まって何にもできなかった。薬だって、飯田はちゃんと自分で飲んだ様子だし、逆に朝食のサンドイッチまで買いに行かせてしまい、迷惑をかけただけだったと気付いた。

そもそも飯田が犬に噛まれる原因を作ったのが自分なのだから、本当にどうしようもない。こんな自分に、飯田はさぞ呆れて嫌気が差している事だろう。きっと、彼は「もう指導員を降りる」と言うに違いないのだ。

朝っぱらから自己嫌悪に陥って、ミコトはポツリとつぶやいた。

「役立たずの後輩で、ごめんなさい」

小さくなって、いじけたようにサンドイッチをかじっているミコトの頭に、ふわりと飯田の手が乗った。

「役立たずじゃない。お前のおかげで、オレ、足一本無くさずに済んだんだぜ。感謝してるよ」

今まで聞いた事もないような優しい口調で言われ、ミコトは急に

胸に熱いものが込み上げて来た。鼻の奥がツンとして、メガネを掛けているのに視界がぼやけた。自分自身の感情がコントロール出来ない。

なんで？　なんで飯田さんに優しくされただけで、涙が出ちゃうんだろう？

飯田はミコトの慌てぶりを見てみぬフリをして、枕元にあった灰皿を引き寄せると、タバコに火をつけた。

メガネを外し、手の甲でそっと目元を拭っているミコトに、飯田がぼそりと言った。

「お前さあ、仕事、向いてないって言ってたけど、もうちつと頑張ってみろよ。お前なりのやり方でさ。……オレも手伝うから」

ミコトはメガネを掛けぬままの顔で、ビククリして飯田を見た。昨日の犬事件で、もう絶対に指導員を断られると勝手に思い込んでいただけに、今の飯田のセリフが信じられなかった。

「これから……一緒に仕事して、教えてもらえるんですか？」  
うるうるする瞳で見詰めるミコトに、飯田は照れくさそうに言った。

「オレにとつちや、お前は初めての後輩だしな。面倒みてやるよ。……ただ、今日はちつとムリっばいけどな」



職場のお荷物・・・って、人から格下げ???

飯田の代わりに、今日ミコトに同行してくれるのは、入社六年目の島だった。島は相撲取りのような巨漢で、いつも汗をかいていた。「よろしくお願いします」ペこりと頭を下げると、島は頷いてニコツと笑った。「まいう」のタレントにそっくりだとミコトは思った。

「今日の件数は十六件か」

ファイルを片手に運転席に乗り込もうとするミコトに、島は慌てて声をかけた。

「ダメダメ！ 新入社員が運転なんて、危ないじゃないか」

「え？ でも……」昨日までやっていた事をいきなり止められて、キョトンとするミコトに、島は怒った様に言った。

「新人のキミに何かあったらボクが叱られちゃう。さあ、キミは助手席に乗って」

最初の現場は県営住宅だった。この県営住宅内だけで七件だ。今日は早く終わるかもしれない。顧客カードをめくって確認していると、太った手がファイルごとカードを全部取り上げた。

「あ……」と言ったミコトに、島は小さい子に言い含めるように話をした。

「現場では、ボクが対応する。キミは黙ってボクのやり方を見ていればいいよ」

飯田の「勝手に行ってこい」的な指導に慣れていたミコトは、島の過保護ぶりに少々困惑したが、黙って頷くと彼について歩き出した。

『団地』と呼ぶのがふさわしい県営住宅は、全部で八棟あり、すべて同じ造りだ。差別するわけではないが、やはり公共の住宅である県営住宅や市営住宅には、料金滞納者が多いように思えた。様々な

事情を抱えて生活している人が、多く入居しているからだろう。母子家庭であつたり、老人の一人住まいであつたり、体に障害を抱えていたり。世の中には、本当に色々な理由で働きたくても働けない、払いたくても払えない人が居るのだと、この仕事に就いてから、ミコトは初めて知った。

「篠原くん、ボクが停止作業をするから、キミはチラシを投函してきてくれる？」

すでに大汗をかいている島が、黄色いチラシをミコトに手渡した。「え、ボクは実務もやらなくていいんですか？」ミコトは目を丸くした。

「ああ、まあ……後で一件くらいやってもいいけど……。時間無いし、ボクがやった方が早いから」

ミコトは複雑な気持ちでチラシを入れに、一階のポストに向かった。

「島さんのやり方だと、オレ、本当に見てるだけでいいみたいだな」次の家を訪ねると、中年の主婦が出てきた。化粧つけの無い顔は、かなり疲れているように見えた。ミコトは表札を見て、顧客カードを思い浮かべた。『ハマダ ノリ』。確か母子家庭と書いてあったように記憶している。

島が支払いの交渉に入るが、主婦は「お金が無いのよ」の一点張りだった。

「ハマダさん、生活保護受けてますよね。昨日が支給日だったでしょ」

主婦はぐつと口をつぐんだ。

「昨日の今日で、お金が無いつて事はないでしょう」島は淡々とした口調でしゃべる。

「でも……」主婦は島の巨大な腹のあたりに視線をさまよわせて、何かもぐもぐ言った。

「電気代の支払いは、毎月の事ですしね。当然ご承知だと思いますけど」

島は、じわじわと理詰めで物を言うタイプだと気付いた。ねちっこい言い方は、お客との間の空気をいやーなものへと変えてゆく。ミコトはじつと主婦を観察した。

「生活保護のお金って、我々の払った税金なんですよ。それで生活なさっているんですから、電気代くらいは払ってくださいよ」

これにはさすがにミコトもギョツとした。そこまで言うのか？

思わずミコトが自分の口に手をやった時、主婦がキレた。

「生活保護だからって、バカにすんじゃないよ！ こっちの苦勞も知らないくせに。払ってやるよ、払えばいいんだろっ！ このデブ！」

主婦はギャーギャーと口汚く罵ると、家の中から五千円札を持ってきた、島の腹に投げつけた。

「毎度ありがとうございます」島はしれっとして言うと、さらに付け加えた。

「奥さん、未納分は一月、二月、三月分です。一番古い一月分に充てて、おつりが千二百九十円出ますけど、まだ二月、三月分が残っちゃいますから、おつりの分を二月分の一部に充当させてもらいますよ」

有無を言わせぬ島のセリフに、主婦は悔しそうに唇を噛むと「勝手にしやがれ」と言い、ボタンと勢い良くドアを閉めた。

今の一幕を見てただけでハラハラして、ミコトは大汗をかいていた。

「ん？ 篠原くん、どうかしたの？」

島がいつものにこやかな顔に戻って声をかけてきた。まるで檻の中の動物を棒でつついて隅に追いやるような島のやり方に、ミコトは危ういものを感じた。

「あのお、島さん。今みたいに言って、逆ギレされて殴られたりした事、無いんですか？」

島は、フフフと笑ったが、目は笑っていなかった。

「ボクだって、きちんと相手を選んで物を言うさ。でも、もし相手

が暴力に訴えるなら、それこそ思うツボなんだよ」

「え？」ミコトはどういう意味かと目を瞬かせた。

「傷害で警察呼びますよ、って言えばいいし」

「でも、もし逆上した相手に刺されでもしたら……？」恐れをなすミコトに、島はニヤリと不敵に笑って言った。

「刃物を持ち出した時点ですでに犯罪だし、刺されたら……まさに傷害事件だよ。ソイツは警察に捕まって、要注目人物のファイルに移されるから、ボクら下っ端のリストから外される事になるね。そうしたら、もう課長の扱い分だから、ボクらは手を出さなくて良い。厄介なのが一件減る、というわけだ」

ミコトはあんぐりと口を開けた。挑発するような事をしておいて厄介なのが減るって、それで本当にいいのかよ！

何だか釈然とせぬままに、県営住宅最後の一件となった。ミコトはチラリと島の手元のカードを盗み見た。

『ニワ トリオ』

今まで滞納履歴は無く、今回が初登場の人物だった。

『丹羽』という表札を確認してチャイムを鳴らすと、しばらくたって中から「どうぞ、あいています」と返事が返ってきた。

「こんにちは、帝都電力です」

島と共に玄関に入ると、中から饅えたような臭いがしてきた。ミコトは思わず眉根にシワを寄せた。

島は顔色ひとつ変えず、すぐ支払いの話に入る。このあたりはさすがだ。

「数日前から具合が悪くて、動けないんです。電気代……気にはなっていたんですけど、銀行にも行けなくて」

顔色の悪い中年の男性が、懸命に布団から起き上がろうとしていた。ミコトは思わず島を押し退けて家に上がりこむと、男性を布団に寝かしつけた。本当に具合が悪そうで、顔や手が酷くむくんでいる。何日も風呂に入っていないのだろう。饅えた臭いの元は本人だった。

島は男性の様子を気にも留めず、マニュアルどおりに対応した。

「じゃ、お支払いが無いという事で、電気止めます」

丹羽さんは、布団の上に寝たまま、「仕方ないですね」と言っ  
て、咳き込んだ。ミコトは彼が気の毒になってしまった。

島が停止作業をする間、ミコトは気になって再び丹羽さんの家の  
ドアを開けた。

丹羽さんは、ぐったりと目をつぶったまま動かない。異常なほど  
にむくんだ顔や手を見て、ミコトは何気なくズレかけた布団を直し  
てやろうとしてハツとした。チラリと見えた彼の腹が、尋常でない  
大きさに膨れ上がっている。ミコトは慌てて島を呼びに行った。

「島さん！ 丹羽さん、ヤバイですよ。すっごいお腹が膨れてて…  
…きつと本当にヒドイ病気ですよ」

焦るミコトをチラリと一瞥し、島はタオルで汗を拭うと言った。

「予定より大幅に時間が遅れてる。早く次の現場に行くぞ」

「島さん！」ミコトを無視して、島は団地の階段を降りて行ってし  
まった。

もうちょっと頑張ってみろよ。……おまえなりのやり方でさ。

ミコトの脳裏に、今朝の飯田の言葉がよぎる。

「オレのやり方で……」

ミコトは丹羽さんの家に引き返すと、躊躇わずにその家の電話で  
救急車を呼んだ。

数分後に到着した救急隊員は、ミコトに向かって言った。

「電気屋さんが来てくれて、この人、運が良かったよ。こんなに腹  
水が溜まっていたら、そのうち死んでしまうよ」

ミコトは勇気を出して行動して良かったと思った。しかし、車に  
乗り込んだ途端、島の嫌味が飛んできた。

「正義感出しやがって。篠原、お前のせいでどれだけ時間をロスし  
たと思ってるんだ。お前の仕事が終わってから、オレだって自分の  
持ち分、回らなきゃなんねえのに……。どうしてくれんだよっ！」

「あ……」舞い上がった気持ちが一気に急降下した。

それつきり島は一言も口を利かなくなってしまった。いやな雰囲気の中で、ミコトは飯田の顔を思い出した。

ミコトが遅くなったり、何かやらかしたって、飯田はこんなふう  
に文句を言ったりは、しなかったのに……。

島は結局何ひとつミコトに手を出さなかった。マンションの十階、メーターボックスを開けて停止作業をする島の後ろで、ミコトは所在無げに自分の胸ポケットに入っている防犯ブザーをいじくったりしていた。

飯田は、病院に行って消毒してから会社に来ると言っていたが、大丈夫なのだろうか。

「おい、篠原」

ぼんやりと飯田の事ばかり考えていたミコトは、突然呼ばれて驚いた。

「ハイッ！」返事をした拍子に、なんとミコトの手から防犯ブザーが滑り落ちた。

「あ……」

プルルルルルルルルルルルルルルルルルルル

ストッパーだけをミコトの手の中に残し、けたたましい音と共に、防犯ブザーは階段の手すりの間から落下して行く。十階のフロアから一階まで落ちたブザーは、よほど頑丈なのか壊れもせず、遙かな下界で迷惑極まりない音を出し続けている。

「何してんだよ、篠原！ 早く拾って止めてこい！」島が鬼のような形相で、ミコトを叱り飛ばした。

エレベーターを使う事も思い浮かばず、ミコトは十階から一階まで、ぐるぐると階段を下りていった。

一階から三階付近の住民が、窓やドアから顔を出し、何かと辺りを見回している。

ああ……マズい！

マンションの住人が外に出てき始めた頃、ミコトはやっとブザー

を回収し、ストッパーを差し込んだ。

「あービックリした」ホツとため息をついたミコトの周囲には、大勢の人が集まっていた。

「ちよつと、電気屋さん 何してんのよ！」太ったおばさんが怒った。

「大きな音で、赤ちゃんが起きちゃったでしょ！」若い主婦が、泣きじゃくる赤ん坊を抱いて、目を吊り上げた。

大汗をかいてようやく一階に下りてきた島と二人で、ぺこぺこ頭を下げ続け、やつとの事で現場を離れる事が出来たのだった。

島はカンカンだった。

「明日もお前に付いてくれって、課長に言われたけど、もうこりこりだ。オレは断るからな」

ミコトは助手席で俯いて小さくなった。

職場に戻ると、さつそく島は本日ミコトがやらかした事の数々を、坂井課長に逐一報告し、そして最後にこう、締め括った。

「……ですから、もう篠原さんの指導員を降ろささせていただきます！」

さすがの坂井も、島の剣幕に圧倒されて、「わかった、わかった」と言ってから、彼にねぎらいの言葉をかけただけに留まった。

「いやー、困ったなあ」

坂井課長のため息に、ミコトは穴があいたら入りたい心境だった。これでは、完全なる職場の厄介者だ。

「飯田くん、ちよつといいかな」

自席に座り、こちらに背を向けている飯田に向かって、坂井がいつになくやわらかい口調で声をかけた。

「な……なんすか？」

振り向いた飯田の顔は真っ赤だった。彼の顔を見た途端に、ミコトの顔も羞恥と怒りで真っ赤になった。

ミコトと目が合って、堪えきれなくなったように飯田がプーッと

吹き出した。彼につられて周囲に居た何人かもクスクスと笑い出した。皆が自分の失敗談を聞いていたのだと思うと、ミコトは逃げ出したい気分になった。

ふと隣を見ると、なんと坂井課長までが笑いを堪えて苦しげな顔になっているではないか。

なんて嫌な職場なんだろう。……ひどいよ。

ミコトは泣きたいのを懸命に堪えた。

ひととおり笑いの波が去ると、真面目な顔で坂井が言った。

「飯田くん、明日からまた、篠原くんを頼むよ」

飯田はチラリとミコトを見て言った。

「いやあ……オレもちよつと、お断りですね。足もこんなだし、自分の仕事も溜まっちゃってますから」

「ええ？ い、飯田さん？」 もしもーし！ ミコトは面食らった。

話が違っじゃないか！ 今朝、面倒見てやるって、あんた確かに言っただじゃないか！ アレは幻か？ 飯田さんのうそつき！

ミコトは言葉が出ず、口をパクパクさせたまま、心の中で飯田を罵った。

「そこでですね課長、件数を減らしてひとりで行かせちゃったかどうか？」

飯田がさらにと放り出すような発言をする。

「え？」 な、何を言い出すんだ、と言わんばかりの顔で、坂井が飯田とミコトの顔を交互に見た。

「し、しかし 飯田くん、先程の島くんの話、聞いていたでしょ」

坂井の言葉に、飯田は意地の悪い笑みを浮かべて頷いた。

「ですからあ、コイツ緊張感が足りないんですよ。前から思ってたんですけど、コイツは人に頼る事に慣れちゃってる、お坊ちゃんなんで、その辺から叩き直さないとダメっすよ、課長」

「飯田さん、ひどい！」 ほとんど涙目のミコトに向かって、「うーん、それも一理あるなあ」と、坂井も珍しく飯田を支持する。

坂井にしてみれば、飯田に断られた以上、もうミコトに付いてく



れる先輩は居ないし、それならばいつそ一人でやらせても同じ事だった。

「よし、わかった。じゃ 篠原くん、明日は六件だけにするから、一人で行くんだよ。今までの成果を発揮できるように頑張ってね」  
完全に見捨てられた、と思った。

オレはゴミだ。ホコリだ。……いや、チリか？ もっと厄介な……  
ウンコだ。ああ、もう誰もオレに近づきたくないに違いない。ウンコなら、いつそ何処へなりとも違う職場へと流してくれ。

ミコトは下唇をクツと噛みしめると、真っ赤になった目を洗いに、トイレに向かった。

顔を洗ってトイレから出てくると、廊下の向こうから上条ありさが歩いて来た。

「篠原くん、ちょうど良かった。あなたにお客様が来てるわよ」

「お客様？」

上条ありさは窓口担当だ。わざわざ窓口に自分を訪ねてくるなんて、いったい誰だろう。

心当たりが無いので、不安になりながら、ミコトはありさに付いて営業窓口へ向かった。「あちらの方よ」

ありさに言われてお客様フロアを見たが、窓口カウンターの一番端の席に、ミコトの知らない青年が一人座っているだけだ。

「知らない人だよ。誰？」ありさに問い返すと、私だって知らないわ、と冷たく返された。

ミコトはカウンター越しに青年の前に行くと、おずおずと話しかけた。

「お待たせいたしました。篠原ミコトですが」

上目使いで青年を見る。年齢はミコトより少し上くらいだろうか？ 濃紺のスーツをパリッと着こなして、いかにもビジネスマンといった雰囲気だが、近くで見てもやはり見覚えの無い顔だった。

ひょっとして、保険のセールスマンかもしれない。警戒しつつミ

コトは尋ねた。

「本日は、どういったご用件でしょうか？」

ミコトがおどおどと訊ねると、青年は満面の笑みを浮かべてミコトの手を取った。

「あなたが……電気屋さんですか」

「は？」ミコトは訳がわからず、首をかしげた。

青年は、握った手に力を込めて、大きな声で言った。

「ありがとうございます、篠原さん。あなたは命の恩人です！」

何かの冗談だろうか？ 青年の大きな声に、営業課のフロアに居た全員が、窓口の様子に注目した。

不審な目を向けるミコトの手を握ったまま、青年は、感極まったように嗚咽を漏らし始めた。

「本当に、本当にありがとうございます」

「……あのお？」

ミコトの声に、青年はハツとして彼の手を離し、ポケットから取り出した名刺を手渡した。ミコトはもらった名刺に目を落とす。

『パチンコ・ニューバード 店長・丹羽鳥彦<sup>にわとりひこ</sup>』

「ニワ……トリ……？」

あ！ とミコトは声を上げた。

「あなた、もしかして『ニワ トリオ』さんの？」

「ハイ、本日は父が大変お世話になりました」

そう言くと、丹羽さんの息子は手の甲で、涙をぐいっと拭いた。

「父は、半年前に失踪したきり行方がわからず、私はずっと捜していたんです。そうしたら、今日、いきなり病院から電話があつて、父が病氣だと」

「ニワ トリオさん……お父さんは、どうなったのですか？」

昼間の様子を思い出して、ミコトが訊ねると、丹羽青年はニッコリ笑った。

「電気屋さんが、救急車を呼んでくれたおかげで、父は危ない命が助かりました。父が見つかり、命も助かって本当に夢のようです」

彼は、何度もミコトにお礼を言い、父親の未払い分全てを精算して帰って行った。

一部始終を見ていた営業課長が、窓口でボーっと立っているミコトに声を掛けた。

「いやあ、篠原くん、良い事をしたね。今どきなかなか出来る事じゃないよ」

営業課長の言葉を聞いて、他の営業課の社員たちも口々にミコトを褒めた。ミコトは何だか照れくさくなって、顔を真っ赤にしながら営業課のフロアを出た。

落ち込んでいた事が嘘のように、またやる気が出てきた。明日からは一人で現場に出る。考えようによっては、これも自分なりのやり方を試せるチャンスかもしれない、と思う事にした。

「よし！ 自分なりに頑張つて、飯田さんやさつき笑った人たちを、ビックリさせてやる。今に見ている！」

ミコトは鼻息も荒く、自分の部署に戻った。

部署の入口に近づいた時、ミコトはなにやら険悪な空気を感じて、その場に立ち止まった。そっとフロアを覗くと、自席に座っている飯田の横に立って、相撲取りのような島が真っ赤な顔に汗をかき、物凄い目つきで飯田を睨みつけていた。

「まだやってないって、どういう事だよ」島が低い声で言う。

「そのまーんま。あれこれ片付けてたら、時間無くなっちゃってさ」飯田が先輩に対する口調とは思えない、軽い調子で言つて、頭を掻いた。

「朝一番で仕上げとけて、メモつけといただろ」島の声のトーンがさらに下がった。

「だからあ、そのメモの上にトレイが乗っちゃってて、見たのがついさっきなの。そうなっちゃったら、オレがやる事もないですよ。だから、島さんにそのまま返却したんですよ」

飯田はもういいかげんにしてくれ、という態度で前髪をかき上げ

た。惚れ惚れするようなカツコイイその仕草も、今の状況では島の怒りを煽るだけのような気がするのだが、本人にその自覚はないらしい。

冷静な島が、とうとう声を荒げた。

「オレはお前のせいで、今日一日あの坊やの子守りだったんだよ。おまえが自分の不注意で捻挫なんかするから、オレがお前の代わりをしなくちゃいけなかったんだぞ。それなのに、せめてオレの仕事を手伝うくらいの気づかいは無いのかよ！」

「無いですね。誰の仕事だろうと優先順位つてのがある。島さんに渡された仕事は、オレの持つてる分に比べたら、急ぐ必要を感じませんしね。しかも、こんなのはただ手間がかかるだけで、誰にでも……それこそあの坊やにでも出来ますからね」

もう言う事はない、と言うように飯田は島にクルリと背中を向けた。

島の顔色は、いまや赤から紫のような色に変わっている。見かねた入社五年目の男性社員・岩佐が、なだめる様に割って入った。

「もし、良かったらボクがその仕事やりますよ。ちようど、手が空いたし」

じゃあ頼む、そう言つて島は岩佐に書類を渡すと、しゅしゅ自席に引き揚げていった。

今度は岩佐が飯田の横にかがみ込んで、彼に向かって注意をした。

「飯田、お前は正しいよ。だけど、言い方つてもんがあるだろ。……

……いいかげん、うまくやれよ。俺だつて庇いきれないぜ」

飯田は岩佐の顔を見ずに、小声でボソボソと何か言った。

岩佐はすつと立ち上がると、飯田の肩をポンと軽く叩いて、ミコトの立っているフロアの出入り口に歩いて来た。

彼はミコトを見て「あつ」と言う顔をした。

「し、篠原、居たんだ。お……お客さんって誰だったの？」

ミコトは岩佐に向かってちよつとだけ微笑むと、頭を下げて自席に向かった。

先程の揉め事は、そもそもの原因がどうやら自分らしい。「あの坊や」というのは間違いなくミコトのことだ。

飯田は眉をしかめてミコトをチラリと見たが、すぐにデスクのパソコンに目を戻してしまった。

せっかく営業課で皆に褒められて、やる気を取り戻していたのに、自分のフロアに戻った瞬間に一気にまた落ち込んだ。

自分のデスクに座り、何となく散らかった書類をまとめたりして、仕事をするフリをしていると飯田に呼ばれた。

「おい、篠原。ちょっと」

机を回り込んで飯田の席に行くと、顧客カードの束を二つ渡された。

「これ、明日の現場出向分だ。オレのとお前の。残確ざんかくだけやっといてくれ」

「残確？」

「お金が払い込まれたかどうか、確認しておく事だよ」

いつもと変わらぬ言い方で言うと飯田はまたパソコンに目を戻した。何気なく見えたパソコンの画面には、県庁のホームページが開かれていた。「子供の権利四か条」などという文字が目につく。

島が怒るのもちょっとわかる。飯田はインターネットなどを見ていて、全く仕事をしている様子がない。

ミコトは自席のパソコンを立ち上げると、業務の画面を呼び出した。画面を見詰めながら、ミコトはさっきの飯田たちの言葉を、思い返した。

こんなのはただ手間がかかるだけで、誰にでも……それこそあの坊やにでも出来ますからね。

飯田はミコトを「坊や」と呼んだ。

事実上、戦力にならない事は認めている。しかし、島からは完全に厄介者扱いをされ、自分への指導を『子守り』とまで言われた。でも、何より一番のシヨックは飯田に見捨てられた事だった。

この部署に配属されて薄々感じていた事が、先程の揉め事で一気に

に明るみに出たような感じだった。飯田は明らかにこの部署で浮いている存在らしい。岩佐だけはどちらかというと中立を保っているように見えたが、それ以外は課長も含めてほぼ全員が飯田に好感を持っていないようだ。

そんな飯田が、彼には申し訳ないけれど、同じ様な「はみ出し者」のミコトの気持ちをわからないはずはない。その、「はみ出し者」の飯田にまで、自分は「はみ出し者」扱いされたのだ。

ひとりで行かせちゃったらどうですか？

面倒くさそうに言う飯田の顔がいつまでも頭から離れなかった。

ミコトは上の空のまま、とりあえず残確を終えるとカードを自分のファイルにしまった。

## 波乱の独り立ち

定時になり、本日の業務終了を告げるチャイムが鳴った。いつものように、島が真つ先にフロアから引き上げて行つた。同じフロアにいる女性職員二人も帰り支度を始めた。

この女性二人は、もと帝都電力の社員だった人たちで、子育てが一段落したのでパートということ雇われている。しかし、元々十年近くこの会社でOLをしてきただけあって、基本的な業務の知識は、島や岩佐より上だった。

「私たち、パートだから」これが、彼女たちの口癖だったが、ミコトが電話対応などひとりでオロオロしていると、さりげなく助けてくれたりするのだった。

「お疲れ様でした」

席を立つた女性職員二人にミコトが挨拶すると、そのうちの一人、露崎めぐみが近づいてきた。年齢三十七歳で、小学生の母である露崎は、誰が見ても子持ちには見えなかった。服装や化粧のせいもあるが、それだけではない、キャリアウーマンのような雰囲気漂わせているのだ。

たしか、先日来店した支店長は、露崎の事を『めぐちゃん』って呼んでいたっけ。

偉い人と知り合いなんですネ、と声をかけると、「誰も最初っから偉いわけじゃないわよ」と言われた。

「篠原くん、もう仕事終わりよねえ。これから三人でちょっとだけ飲みに行かない？」

「え？ でも、明日の仕事が……」

ミコトは躊躇った。お姉さま二人と飲みに行くなんて……なんだか恐ろしい。

「大丈夫よ、遅くならないから。私だって娘の塾のお迎えがあるから、酔っ払うまで飲んでる時間無いし」

もう一人の女性職員、酒場さかばちづるがニツコリ笑った。おっとり癒し系の酒場は、露崎とは対照的に「お母さん」というイメージがぴたりだった。年齢も、酒場の方が露崎より上だった。

露崎は飯田のほうに顔を向けて言った。

「……ってことで、飯田くん。篠原くん借りるわよ」

「なんでオレにいちいち断るんですか」飯田がムツとしたように言い返した。

「だって、飯田くんが保護者でしょ？」

酒場がまじボケで言って、ニツコリ笑う。たぶん、指導員と言いたかったに違いない。

飯田は「お疲れさん」と言って、犬を追い払うようにひらひらと手を振り書類をめくり始めた。

ミコトはほとんど強引に熟女二人に挟まれて会社を出た。

女性二人に連れて行かれた所は、大皿料理のお店だった。

「まずはビールで乾杯、といきたいとこだけど、篠原くんあまりお酒、得意そうじゃないから、好きな頼んでいいよ」

露崎がミコトの前に「どうぞ」とメニューを押しやった。

「じ、じゃあストロベリーフィズで……」

ミコトが小声で遠慮がちに言っていると、露崎は「かわい〜」と言って、彼の頭をぐりぐりと撫でた。女性から可愛いと言われるのは抵抗があるが、露崎や酒場くらいの年齢の女性では、怒る気にもならなかった。

女性二人は恐ろしく酒飲みだった。ミコトが一杯目の半分しか飲んでいないのに、彼女たちはもう四杯目を注文していた。

「ほら、いちおう主婦だからさ、時間がもったいないのよ」酒場は肉じゃがをほおばりながら、さらにスティックサラダを引き寄せた。「私たち、何かあると、美味しいものを食べて、飲んでストレスを発散する事にしてるのよ」



あ……そうか、二人は自分の為につきあってくれているのだ。ミコトはようやく気がついた。この二人になら、何でも言えそうな気がした。

「オレ、失敗ばかりしてて。今日も防犯ブザーを……」

露崎がゲラゲラと遠慮の無い笑い方をした。ムスツとするミコトに、酒場が優しく言った。

「それって、何か腑に落ちないこととか、気になる事があったからじゃないの？」

ミコトはハツとして目を見開いた。

「ひよつとして、島のやり方と飯田と、どっちの方がいいかな、なんて比べたりして、ボケボケしてたんじゃないの？」

露崎にズバリ言われて、ミコトは言葉を失った。露崎は綺麗にマニキュアの塗られた爪で、シガレットケースからタバコをつまみ出すとワイン色の唇に咥えた。

「島のネチネチしたやり方も、飯田の手段を選ばない取り立て方も、どっちもどちただけど、でも、私に言わせれば二人は同じタイプよ」  
露崎はそう言ってタバコに火をつけた。

「同じタイプ……？」

とてもそうは見えないけど。ミコトは首をかしげた。

「二人とも、人に仕事を任せられないタイプ」

「そんなことないですよ！ 飯田さんいつもオレにばっかしやらせて、自分は車の中で寝てるんですから！」

露崎の言葉に、ミコトは飯田の所業をぶちまける。

酒場がフツと笑った。

「この一ヶ月、キミが支払いを先延ばしにしたお客、どうなったか知ってる？」

「え？」

ミコトはキョトンとする。そんな事は考えたことが無い。だって、お客さんが払いますと言った日を設定したのだから、払っていて当然だ。

「そ、そんなの支払い済みになつてるに決まってるでしょう？ その日に払うって約束したんだし。後から確認したら、ほとんどちゃんと支払ってたし」

ハア……と露崎がため息をついた。

「あんたが延伸したお客、全部飯田が後から念を押して回ってるんだよ。奥さんに言ってたってダメな家もあるし、だから時間を変えて夜に足を運んだりさ」

ミコトは目を丸くした。

知らなかった……。

「島は飯田みたいに面倒な事をしたくないから、全部自分でやったんだと思うし、だから基本は同じタイプなんだよ」

「じゃあどうして飯田さん、明日からひとりでやらせちゃえ、なんて言うんだろう。オレの任されたのって、元々全部飯田さんの持ち分だし。同行しないというだけの事で、今までと変わらないと思うけど」

ミコトが飲み物のグラスを見詰めたままつぶやく。

「今までと同じか、同じで無いかは、キミしだいなんじゃないのかな？ 飯田くんもたぶん、勝負に出たんだね」酒場がなにやら意味深な発言をした。

「とにかく、仕事に責任を持つ……ひとりでやるって、そういう事よ」露崎はそう言っただけで煙を吐いた。

明日からがんばってね、と二人に肩を叩かれ、ミコトは複雑な気持ちで家路についた。

\*

独り立ちの朝は、ミコトの前途を暗示するかのようになり、どんよりした雲が垂れ込めていた。

朝のミーティングを終えると、ミコトは自転車のキーを取りに行った。車の台数は限られている。病院に行ってから出勤する、と言

つていた飯田はまだ来ない。彼が車を使うかどうかは知らないが、足が悪いのだから、彼の為に一台は残しておくべきだと思った。幸い今日の現場は事業所の周辺だ。ミコトは坂井課長に行つてきますと挨拶をして外に出た。

昨日は色々な事があり、ちゃんと顧客カードのチェックもせずに女性二人と帰つてしまった。ミコトは自転車にまたがったまま、今日の分に目を通した。

『タクミ商会』ずいぶん、高額な電気代だな、とミコトは思った。同じ名義で何口も契約がある。ミコトは地図を確認し、『タクミ商会』へ向かった。

集金先の住所は何の変哲も無い雑居ビルだった。カードに記されているとおり、二階に上がつてゆくと『タクミ商会事務所』の看板を掲げた部屋があつた。ここで使用している電気代じゃないのだろう。やはりどこか別の場所に、大きな施設があるはずだ。

インターホンを押すと、中から男性の声で応答があつた。

「こんにちは、帝都電力です。お支払いの件なんですが」

ドアが開いて、ミコトはいきなり腕をつかまれ事務所に引き入れられた。

「な……」

腕をつかんだ男の目が鋭い。素人のミコトでさえ、ひと目でただ者じゃないとわかるこわもてだ。

「電気屋さん、そういった内容の話は、インターホン越しにしちゃいけないよ。うちだって客商売だからね、誰かに聞かれたら恥ずかしい。まるで、滞納しているみたいに聞こえるし」

ミコトはチラリと顧客カードに目を走らせた。

滞納してるじゃん！

「田村、来客かしら？」事務所の奥から女性の声がした。

「社長、電気屋さんです」

女社長は、光沢のあるボルドーのスーツを着て、縁の無いメガネをかけている。ミコトは豊かに盛り上がったバストとキュツとくび

れたウエストに目が釘付けになった。美人の上に、おそろしくスタイルがいい。叶姉妹の姉にゲキ似だ。

ミコトを見た女社長の目が細められた。

「いつものイケメン君じゃないのね」

飯田の事だな、とミコトは思った。

ま……いいわ、と言って女社長は応接セットに座るように促した。「あなた見かけない顔だけど、新人？」

女社長は、ソファに座ったミコトの顔をちよつとかがんで覗き込んだ。彼女の豊かな胸の谷間が丸見えになった。女社長は「少し待っててね」と言って、奥の部屋に消えた。

ミコトが落ちつかなげに周囲を見回すと、ドアのそばに仁王立ちする、田村と呼ばれたこわもてと目が合った。

ミコトは慌てて目を逸らし、姿勢を正した。

「お待たせ」と女社長が戻ってきて、ミコトの正面に座った。手にした紙片をミコトに差し出す。

「あ……小切手」小切手を見るのは初めてだ。

「契約四口分の合計よ。預かり書はいつものように、四件バラバラでちょうだいね」

そう言つて、女社長は美しい足を組んだ。白い太ももがチラリと見えて、ミコトはドキドキした。

緊張しながら、四件分の領収証を切る。電気代の金額を確認し、本日の日付を入れてさらに電卓で四件の合計金額と小切手の金額を確認した。よし、バツチリだ！

領収証を受け取った女社長は、にっこりと妖艶に微笑んだ。

「次回の集金はいつが良いですか？」

ミコトはマニュアルを思い出して言った。キチンと次回の約束も忘れない。やればできるのだ。

「来月の月末にお願いね」

女社長に見送られて、ミコトは『タクミ商会』事務所を後にした。

自席に置いてある本日出向分の顧客カードを見て、飯田は真っ青になった。これはミコト用にピックアップした現場分だ。

「あいつ！ オレのと間違えて持って行きやがった！」

今日の現場は溜まっていた分の中から厳選した、超ハードな顧客ばかりだった。百戦錬磨のツワモノ相手に新人のミコトが交渉しても、相手にされるところか、逆に難癖<sup>なんくせ</sup>付けられて、大変なことになるかもしれない。

「……ったく、あのバカが！」

飯田は足を引きずって駐車場へ向かった。

## トラブル続発！

「えーっと、次の現場は……っと」

『加藤シゲゾウ商店』

商店と名がついている割には、その場所は町外れの一角だった。

「うー、自転車だと結構遠いなあ」

ミコトは背中に大汗をかいて、現地に向かった。

錆びの浮いた金網に囲まれた敷地内に、『加藤シゲゾウ商店』はあった。ミコトの目を奪ったのは、たくさん並んだ自動販売機だ。その並び方は、中身の品物を販売する為ではなく、自動販売機自体を扱っているらしい。ドミノのようにズラリと並んでいる本体は、お馴染みの飲料メーカーの物や、タバコ、珍しい所では観葉植物（いったい誰が買うんだろう？）の自動販売機など、種類は色々だった。

立て付けの悪い引き戸を開けて、事務所を覗き込むと、机に座っていたおじさんが顔を上げた。

「あ、電気屋さん？」

「こんにちは」ミコトは元気良く挨拶をした。

こっちに来て座って、と言われて、事務所の机に座らせられたミコトの前に、おじさんはバケツを一つ、ドンと置いた。

「へ？」キョトンとしてミコトが覗き込むと、大量の硬貨が入っていた。動きの止まっているミコトに、おじさんは言った。

「飯田さんはお休みかい？」

「え？ いいえ、今日は他をまわっているんで、代わりにボクが来ました。篠原といいます」

「そうですか。じゃあ篠原さん、ここから電気代、遅れてる分だけ二月の分だっけ……持ってってくださいよ。確か十三万ちよつとだったよね」

「うえあああ？」ミコトは妙な声をあげてしまった。再びバケツの

中を覗き込む。

銅貨ばかりが目立つ中から、十三万円持ってたと言われても。

「何か飲み物もってくるよ。缶ジュースなら何でもあるよ。飯田さんはいつもコーヒーだけど、キミは？」

「あ……コーラください」

おじさんはミコトと大量の十円玉（バケツ入り）を残して事務所を出て行った。

「十円玉で十三万円って……百個で千円、千個で一万円、じゃあ……一万三千個数えるの？」ミコトは始める前から泣きなくなってきた。

五百個ほど数えたとき、おじさんがコーラを持って戻ってきた。

「あれ？ 機械持って来なかったの？」

「機械？」ミコトが首をかしげた。

「飯田さん、いつも機械で数えてるんだよ。ほら、銀行や郵便局にあつて、お金をザラザラ入れると、自動でカウントしてくれるやつ」「えー！ そうだったの？」

ミコトは機械を持って出直して来ますと言い、コーラをもらっただけで『加藤シゲゾウ商店』を出た。

「機械が必要なら、カードに記入しておくべきだ！」ミコトはプリプリしながら自転車にまたがった。

それにしても……。

小切手の次は大量のジャラ銭。いつもと違う現場に戸惑いつつ、ミコトは次の現場へと自転車を漕ぎ出した。

飯田は焦っていた。足順どおりに追いかけているのに、ミコトの足取りがつかめない。トップに行くはずの現場に行くと「まだ誰も来ていません」と言われてしまった。お客さんが嘘をつくはずもない。

「あいつ、順番バラバラでまわってるみたいだな」

飯田はミコトの携帯に電話をした。さっきから何回もかけている

が、同じメッセージだ。

お客様の掛けになった番号は、電波の届かない所に居るか、電源が入っていない為掛かりません。

「……しよーがねエな。ったく！」

飯田は勘を頼りに次の現場へ移動した。

まだ二件しか行っていないのに、ドツと疲れてしまい、ミコトは通りすがりの公園のベンチでさつきもらったコーラを飲んでいた。飲みながら、次の現場を地図で確認する。

「あれえ？　ここ、さつき通ったじゃん。自販機の会社に行く前に寄れたのに……もしかして、足順違ってたりにして？」

嫌な予感に全部の現場を地図で確認すると、まったくバラバラであることがわかった。ミコトは乾いた笑いを漏らす。良く確認しなかった自分のミスだ。仕方がないので、手当たり次第に近くの現場からまわる事にした。

「えーと、『ミシマ ヤヨイ』S大病院看護師寮。看護婦さんか……ふふ」

何故か顔を赤らめる。

「ばあちゃんが入院してた病院の看護婦さんは、全員が美人で優しいかったよなあ」

看護師寮についたミコトは、ウキウキしながら建物に入って行った。寮と言っても、まったく普通のマンションだ。一階のロビーの奥に、オートロックのガラス扉がある。

「困ったな、入れない」

ちようどいいタイミングで中から人が出てきた。ミコトは入れ違いにマンションの中に入る事に成功した。

『ミシマ ヤヨイ』の部屋は最上階だった。

エレベーターで上がり、表札を確認してインターホンを押すが、応答は無い。

「チエツ、せつかくここまで来たのに、不在かよ」



ミコトはしつこく二回、三回とインターホンのボタンを押した。  
『いいかげんにしないと警察呼ぶわよ！ 何時だと思っているのよ！』

留守だと思っていたところに、いきなり大声が返ってきて、ミコトは慌てた。

「あ、あの……」

すごい勢いでドアが開けられ、中から太ったおじさんのようなおばさんが出てきた。

「げ！ これがヤヨイちゃん？」

想像を見事に打ち砕かれて呆然としているミコトに、おばさんは大声を張り上げた。

「何時だと思っているのよ！」

「え？」

時間？ 午前十時はべつに非常識な時間でもないが……。

「まったく、何度言ったらわかるの？ 夜勤明けでやっと休んだところなのに！」

「あ……」ミコトはハツと思った。

世間では常識の時間でも、看護師など夜勤の人にとっては非常識なのだ。

「だいたい、オートロックなのにどうやって入ったのよ。不法侵入で訴えるわよ」

「す、すみません。ボク初めてで、知らなくて。ごめんなさい」

フンと鼻を鳴らしてドアを閉めようとする『ヤヨイちゃん』に、ミコトはおずおずと声をかける。

「あの、電気代お支払いいただけますか？」

『ヤヨイちゃん』はジロリとミコトを見て、一旦奥に引っ込むと、財布を持って現れた。

「今日は払うけど、今度またこんな時間に来たら二度と払わないわよ。お金が無いわけじゃなくて、あなたたちの仕事に対する態度が気に入らないのよ」

「え？」ミコトは『ヤヨイちゃん』の顔をじっと見た。

「何度言っても同じ間違いをする。私たちの職場でそんなことされたら、患者さんはいくら命があっても足りないのよ」

まったくそのとおりであった。顧客カードをよくよく見ると、飯田の文字で「午後三時以降」と書いてあった。ミコトは再度謝って看護師寮を後にした。

また、ドジを踏んでしまった。

ミコトはうなだれて自転車にまたがった。

「でも、払ってもらえただけ良かったかな」

なんとか、自分を励ますと次の現場へ向かって自転車をこぎだした。

「さて、次は……」と『カネモチ フク』。おばあさんだな」

今度こそ失敗しないように、顧客カードに隅々まで目を走らせる。カードには、かなり古い日付でごちゃごちゃと書き込まれていた。

「勝手に入ってはいけない・頭上注意・足元注意・電卓を見せてはいけない・工具を見せてはいけない……なに？ これ」

何人もの担当者が記入したらしい記録の、一番最後に、飯田の文字で簡潔に記されているコメントを見て、ミコトは『カネモチ フク』の人格を理解した。「被害妄想の変人」

その家は呼び鈴がついていなかった。

「こんにちは。帝都電力です」

ミコトはガラスの引き戸を軽くノックして、大声を張り上げた。

いきなり引き戸が開いたかと思うと、怒鳴り声と共にグレーの背広の男性が後ずさり出てきた。

「帰れったら、帰れ！」

中から思いつきり突き飛ばされた男性は、すぐ後ろに居たミコトにぶつかり、二人して地面に尻餅をついた。

「いててて！」下敷きになったミコトは、ズレたメガネを掛けなおして、上に乗っている人物の尻を押しやった。

「す、すみません。大丈夫ですか？」

グレーの背広の男性は、慌てて立ち上がると、ミコトの手を取って立ち上がらせた。

「あ、はい……大丈夫です」

ミコトはズボンの尻をはたいて、男性の陰にいるおばあさんを見た。しわくちやで、すぐ腰が曲がっている。そのせいか、子供のように小さかった。大人の男性を突き飛ばすほどの力が出る事が驚きだ。

「あたしや、何度も詐欺にあっているからね。そう簡単には、ハンコは押さないんだよ」

おばあさんは、グレーの背広の男性に勝ち誇ったように言った。

「いえ、先程から申し上げてますけど、私は生活福祉課の職員で、生活保護の手続きをしようとしてるだけですよ」男性はうんざりしたように、白髪の混ざり始めた頭を掻いた。

ミコトは彼が気の毒になってきた。

男性の背後から、おばあさんの様子をうかがうと、おばあさんは精一杯背伸びをしてキーキー言った。

「うるさい、うるさい！ 頼みもしないのに来るヤツは、全員怪しいんだよ！」

『被害妄想の変人』確かに飯田のコメントはピッタリだ。ミコトは思わずクスツと笑ってしまった。

「ちよつと、メガネのあんた。今、笑ったね」

おばあさんは背広の男性を回りこんで、ヨチヨチとこちらにやってきた。

ミコトは後ずさりをしながら言った。

「あ、あのボクは帝都電力の集金員で、篠原と言います。お取り込み中みたいなので、夕方また、寄らせていただいてもいいですか？」

「何時に？」おばあさんはミコトの顔を睨んだまま言った。

「四時半はいかがでしょう」ミコトは引きつった顔で笑った。おばあさんは、ふつと表情を弛めると「あいわかった」と言って、背広

の男性に向き直った。

二人が話をし始めたので、ミコトはそそくさと逃げるように『カネモチ フク』の家を出た。出るときに、門のそばにあった猫の糞を、思いっきり踏んずけてしまった。

「足元注意って、この事かよ……」ミコトはため息をついて、がっくりと肩を落とした。

カネモチ宅から目と鼻の先にある神社の境内に自転車を止め、階段に座り込んで、ミコトは運動靴のみぞに詰まった猫の糞と格闘していた。木の枝を拾って掻き出そうとするたびに、細い枝はポキリと折れた。

「あーん、この靴お気に入りだったのに」

神社の玉砂利を踏む音と共に、頭の上から声がした。

「クソ踏んでんじゃねえよ」

顔を上げると、すらりと背の高い男性が立っていた。

「飯田さん？」

飯田は作業用の腰道具の袋から、長めのクギを取り出すとミコトに手渡した。

「す、すみません……」ミコトはクギを受け取ると、真っ赤になってうつむいた。靴の裏の糞を取っているという、情けない姿を見られてしまった。

飯田はミコトの隣に腰を下ろすとボソリと言った。

「オレも以前、踏んだ」

「へ？」ポカンとするミコトに、飯田は面白そうにニヤリと笑って言った。

「あれは、ババアがわざと置いてるんだぜ」

「ええ？」そんな事して、いったい何が楽しいのかわからない。

「頭に来たから、フンだらけの靴で、ババア家の周りを一周してやった」

「げっ！ な、なんて事をするんだ。この人は！」

おばあさんに負けず劣らず、性格の悪い飯田の所業に、ミコトは

絶句する。

「なーんか、雨降りそうだな」飯田は空を見上げてタバコを啜えた。  
「あの、飯田さん？ 現場、終わったんですか？」

やけにまったりとしている飯田に、ミコトは怪訝そうな顔で尋ねた。

「お前、本当にわかってねえな」

「は？」飯田が何を言っているのかさっぱりわからない。

フウ……と飯田はため息をついた。

「お前、オレの現場まわってんだよ」

「え……？」

「おまえのはこっち」そう言って渡されたカードを見ると、もうすでに飯田が作業を済ませていた。

「オレのって……ええっ！」どうりで普通じゃない現場や、人物に遭遇するわけだ。

「でも、何件か集金できましたよ」

「うそ！」

ミコトが間違えて持っていたカードを手渡すと、飯田が目丸くした。

「タクミ商会、金払ったのかよ！ 信じらんねえ」

「女社長さんの所ですよ」

ほら、このとおり、とミコトは集金カバンの中から、女社長に渡された小切手を取り出した。手に取って、眺めていた飯田の顔が陰しくなった。

「何でこんなのもらうかなあ」

「え？」訳が解らず、ミコトは首をかしげた。

「先付け小切手は、もらっちゃいけないんだよ」飯田はトホホな表情で、髪の毛をかきむしった。

先付け……？

何のことやりますますわからない。

「しょうがねえなあ。預かり書、出してみな」

飯田がミコトの集金カバンを取り上げた。啞えタバコでカバンを引つ掻き回していた飯田の口元から、ポトリとタバコが落ちた。集金済みの領収証の控えを凝視している。

「飯田さん……？」　「なんだか、嫌な予感がして、ミコトは飯田の端正な横顔を覗き込んだ。」

「お前、もう会社に戻っていいよ」

そう言つて、飯田はスツと立ち上がった。

「オレ、なんかマズイ事、しました？」

恐る恐る訊ねるミコトの頭をポンポンと軽く叩くと、飯田は玉砂利を踏んで車の方へ戻つて行く。

「飯田さん、どうしたんです？」

ミコトの声など聞こえていないかのように、飯田はさつさと車に乗り込むと、どこかへ行つてしまった。今日は、飯田の前ではまだドジを踏んでないと思つていたのに。いったい何がいけなかったのだろうか？

腑に落ちないまま、ミコトは会社への道を自転車で戻り始めた。

会社に戻つたミコトは、自席に座つて業務マニュアルを引つ張り出した。しかし、新入社員用のマニュアルには、『先付け小切手』についての項目などは載つていなかった。

「誰に訊いたらいいのかな」

ぐるりと職場を見渡すと、露崎と酒場が談笑しながらフロアを出てゆくのが目に入った。

ミコトは席を立つて、二人を追いかけた。

廊下の一画にある喫煙コーナーでタバコを吸っていた二人は、ミコトの話に一樣に険しい顔をした。

「先付けもらつて領収証きつちやつた……？　めっちゃめっちゃマズイじゃん」

露崎が眉間にシワを寄せたまま言つた。

どうして？　　と言うように首をかしげるミコトに、酒場が丁寧に

説明してくれた。

「先付け小切手は、記入されている期日が来ないと現金化できないのよ。だから期日が来るまでは、ただの紙切れよ。したがって、この場合もらわない方がいいんだけど。でも、どうしても受け取らなきゃいけない場合は、電気料金領収証ではなく、小切手預り証を書くの。そして、現金化して収入になった時点で領収証と預り証を交換するのよ」

「……じゃあ、オレは」

「そう、払ってもらってないのに、レシートを渡しちゃったのよ」  
「そうだったのか！ 知らなかったとはいえ、大変な失敗をしてしまった。」

「あ、でも期日が来れば収入になるんですよえ。期日はいつだったかなあ？」

呑気なミコトの言葉に、酒場が苦笑した。

「信用のおける相手だったらいけどね。タクミ商会は暴力団だよ」  
「ええ！」ミコトの脳裏にあの田村と呼ばれたこわもての顔が浮かんだ。知らないと言うのは、本当に恐ろしい事だ。

「たぶん、期日に現金は入らないよ」露崎がフーと煙を吐いた。  
「それってもしかして、不渡り……？」

女性二人が同時にうなずいた。ミコトは真っ青になった。

「せっかく飯田が女社長のご機嫌とって、毎月キチンと払ってもらったのに、今のままじゃ、期日まで事実上延伸だね。拳句の果てに不渡りになったら、また支払いのサイクルを軌道に乗せるのは大変だよ」

露崎は唇の端を上げて、「さあ、どうするの？」と言った。

ミコトは二人に頭を下げると、自転車のキーを持って外に飛び出して行った。

外はいつの間にか、雨になっていた。風を伴って吹き付ける春の雨が、ミコトのメガネを曇らせた。

飯田はきつとタクミ商会に小切手を返しに行ったに違いない。自分

が無知なばかりに、また飯田に迷惑をかけてしまつ。ニコトは悔しくて涙が出そうだった。

ほとんど役に立たないメガネを外し、ぼやけた視界のまま、タクミ商会へと自転車を走らせた。

＊

「返せといわれてもねえ、飯田クン。そちらが勝手に渡したんでしょ。私は領収証をくれなんて、一言も言つてないわよ」

そう言つて、女社長は飯田の整つた顔を楽しそうに覗き込んだ。

ボルドーのスーツの胸元から、豊かな谷間が覗いても、飯田は顔色一つ変えない。その様子を見て、女社長は面白くなさそうに言つた。

「それに、領収証はもう金融機関に回してしまつたわ」

「金を、借りたんですか」飯田の目が大きく見開かれた。

「いやだ、そういう言い方。融資してもらつたのよ。公共料金の領収証はまじめに商売をしていますって証明になるからね。信用に値するつてわけ」

あなたの所のレシートつて、すごく魅力的よね……と言つて、女社長は飯田のあごに手を添えると、チュツと音を立ててキスをした。「キミがそんな堅気の制服で現れた時には、さすがに驚いたけど……ま、これからも仲良くやりましょうよ」

飯田は無表情な顔のまま、汚らしいと言つように、袖でぐいと口を拭つた。ドアのそばに立つて、じつとこちらを見ていた田村が、ハツとしたように女社長を盗み見た。女社長は飯田の態度に、唇の端を引きつらせて言つた。

「せっかく可愛がつてあげてるのに、ナマイキな坊やね」

「領収証が無いなら、もうここには用は無い」

飯田はスツと立ち上がった。

「どうするつもりなの？」女社長は鋭い口調で言つた。

「あんたの融資元に行つて、領収証を回収する」



「何処で借りたかなんて、知らないくせに」女社長は、鼻先でフフンと笑った。

飯田は女社長に向かって、ふてぶてしい態度でニヤリと笑い返した。

「調べる方法はいくらでもあるんだよ。……なにしろオレは、元オレンジファイナンスの取立屋だったんだから」

不敵に微笑む飯田を見て、女社長はギリリと唇を噛んだ。

と……その時、ノックと共にドアが開き、ずぶぬれのみこトが駆け込んできた。

「お願いです、お願いです。領収証、返してください。僕がいけないんです」

飯田は驚いて目をみはった。

篠原、バカヤロウ！ のこのこ来やがって！

飯田が動くより、田村の方が一瞬早かった。田村はみこトを羽交い絞めにし、あごの下に回した腕に力を込めた。

「く……くるし……」

メガネも掛けずに飛び込んで来たみこトは、何が起きたのか解らず、パニック状態になって目を白黒させた。

女社長が高笑いした。

「あーはっは。なんていいタイミングなんでしょうね、飯田くん。ヘタな真似したら、田村がうっかり怪力を発揮しちゃうかもよ」

飯田とみこトは応接セットに座らされ、目の前に書類を突きつけられた。

出入り口には、田村のほかにあと二人、合計三人の男が立って、こちらを睨んでいる。事実上の軟禁状態だった。

「この念書に、早くサインをちょうだいよ」

女社長はワイン色のマニキュアを塗った爪で、テーブルの上の書類をチョンチョンつついた。

「暴力団と取引なんか、しねえよ」

これだけヤバイ状況にも係わらず、落ち着き払っている飯田に、ミコトは内心舌をまいた。

「取引じゃないわ、確認事項よ。あの領収証にはもう手を出さないと事と、今回は小切手の期日まで、電気代の件はどんな事があるうと持ち出さない。たったそれだけよ」

お互いイイ関係を保ちたいし……と言って、女社長は妖艶に笑った。

「小切手の期日は一ヶ月も先じゃねえか。その間、さらに四月分の電気代が発生する。もし、小切手が不渡りになったら、即刻電気止まるぜ」飯田がギリギリと女社長を睨んだ。

「脅したって無駄よ。予告もせずにいきなり止めたりしない事くらい知ってるわよ。それに、うちはパチンコ店よ。営業中に電気切ったらお客への迷惑料込みで、たつぷり補償金払ってもらっわよ」

切れるものなら、切ってごらんよ！ と女社長は本性を露わにして凄んだ。すごい迫力に、ミコトは思わず目をつぶった。

女社長を睨んだまま、飯田はぐつと唇を噛んだ。その表情に満足したのか、女社長はフツと表情をゆるめた。

「わかったら、早くサインして」

飯田は腕を組んだまま動こうとしない。その様子を見て、彼女はミコトに向き直った。

「じゃあ、あなたでいいわ。そういえば、さっきの領収証もあなたの印鑑だったものね」

「絶対サインするなよ、篠原」飯田が横から口を出す。

パシッ！ 女社長は飯田の頬に平手打ちをした。

「あ！」ミコトは思わず声を上げた。

「ん？ どうしたの、メガネの坊や」

「ぼ、暴力振るうと、傷害で、け、けーさっ呼びますよ」ミコトは震える唇で、絞り出すように言った。すると、入口に立っている田村が面白そうに言った。

「サツを呼ぶ前に、ここから無事に出られるといいな」

ミコトの顔からサーツと血の気が引いた時、来客を告げるチャイムが鳴った。

「すみません、警察ですけど」

覗き穴から覗いた田村が顔色を変えた。

「社長、本物の警察ですよ」

とんでもなくいいタイミングに、女社長は物凄い目つきで飯田を睨んだ。飯田はミコトの腕をつかんで立ち上がると、素早い動作で田村の横をすり抜けてドアを開けた。

「ご苦勞様です」飯田はニコニコしてドアの外の警察官に挨拶をした。そして、何事も無かったように、女社長に向き直って言った。

「どうも長居して申し訳ありませんでした。それでは、当社は規定どおりに手続きを進めさせていただきます。毎度ありがとうございます」

ミコトは訳がわからず、飯田の後について雑居ビルを出た。とにかく偶然いいタイミングで警察が来てくれて良かった。

二人の後からビルを出てきた警察官は、飯田を呼び止めて免許証の提示を求めると言った。

「困るよ電気屋さん。車をあんな停め方したら交通の邪魔になるよ。今回は大目に見るけど、次やったら、レッカー移動するよ」

「どうも申し訳ありません」飯田は笑いながらペコペコと頭を下げた。

ミコトが車の方を見ると、それはほとんど路肩に寄せぬままに停めてあった。作業中の札を出していても、これじゃあ警察が怒るのも無理は無い。

パトカーが行ってしまうと、ミコトはホッと胸を撫で下ろして言った。

「本当に良かったですね、警察」

「ああ、駐禁覚悟だったけど、お咎め無しってヤツだな」

え……？ それって……

「まさか、飯田さん 警察の人が呼びにくるのを見越してこんな迷

惑駐車を？」

「実際に事務所まで呼びに来るとは期待してなかったけど、会社に連絡ぐらいは行くなかってさ。そうしたらきつと誰か来てくれるし」  
ミコトは改めて飯田の機転に驚いた。

それに比べて自分は……。

何にも考えず暴力団の事務所に乗り込んで行って、逆に捕まってしまうなんて。小切手の事でミスをした上に、足手まといになってしまった。

「飯田さん、ごめんなさい。迷惑掛けて、ごめんなさい。オレ……」  
メガネをはずして涙を拭っているミコトの頭に、飯田の手のひらがポンと乗った。

「自転車は駐禁切符、切られないと思うから、どこか邪魔にならない所に置いて来い。雨がひどいから車に乗れよ」

仕方ないな、と言う彼の口調の中に温かなものが混ざり始めている事に気づき、ミコトは曇ったメガネを拭きながら、飯田の顔を盗み見た。

こっぴどく叱られるかと思っていたのに、意外だった。

ミコトはクスンとひとつ、鼻をすすって助手席に乗り込んだ。

雨はますますひどくなった。

フロントガラスに叩きつける雨粒を見ながら、ミコトは働き始めた頭で必死に考えていた。失敗は反省し、そして二度と繰り返さぬことだ。泣いてなどいられない。

会社に向かおうとする飯田に、ミコトはおずおずと話しかけた。

「あの、飯田さん。じつはオレ、二件ほど約束してしまったところがあるんですけど」

「え？ 何時にどこだ？」飯田が嫌そうな顔でチラリとミコトを見て、また前方に視線を戻す。

「自販機の会社。金をカウントする機械を持っていかなかったの、後で行くって言っちゃったんです」

「機械はこの車に積んであるから、そこは後でオレが行く。おまえは別のところを……」

言いかけた飯田を遮って、ミコトは激しくかぶりを振った。

「オレが約束したから、オレが行くんです！」

とにかく、最後まで責任を持つこと……昨日、露崎が言っていたではないか。

何だか変に気合が入っているミコトの様子に、「まあいいか」と頷いて飯田は『加藤シゲゾウ商店』に向かう為に、交差点を左折した。

再び自動販売機の並ぶ『加藤シゲゾウ商店』を訪れたミコトは、飯田と共に立て付けの悪い事務所のドアを引き開けた。

「こんにちは、帝都電力です。先程はどうも」

さつきコーラをくれたおじさんが、事務机から顔を上げた。

「電気屋さん？ 何で二人？」おじさんは怪訝そうな顔をした。ミコトの背後から飯田が首を伸ばして挨拶した。

「加藤さん、ドモ！」

「ああ、飯田さんか。びっくりした。以前電気を止められた時、二人連れで来た事を思い出してしまって」おじさんはホッとしたようにニコツと笑って、硬貨入りのバケツを取りに奥へ引込んだ。

「いつもと違う顔ぶれだと、お客さんが怪しむ。特に金に関係する事はな。良く覚えておけよ」飯田がボソリと言った。

ああ、そういう事にも気をつけないといけないのか。信用を得るのは大変なのに、信用を失うのは簡単なんだと気がついた。

飯田は電気料金を数えて集金をし終わると、機械を置きっぱなしのままです務所を出た。

雨の中、自動販売機のドミノを横目で見ながら、ミコトは飯田に追いついて声をかけた。

「飯田さん、機械、忘れてる！ 取りに行かないと」ミコトが引きかえそうとすると、飯田は彼の襟首をはっしと掴んだ。

「いいんだよ」

どうして？ と首をかしげるミコトの耳元に唇を寄せて、飯田は囁いた。

「誰にも言うなよ」飯田の吐息が耳にかかり、ミコトはビクツと肩を震わせた。

「あそこは売り上げのほとんどがジャラ銭なんだ。だけど、あの機械はすごく高いから、毎月おやじさんが手で数えて入金している。それで、気の毒だから、忘れたフリして毎月貸してあげることにしたんだ」

「じゃあ、カードに書かなかったのはわざと？」

飯田が頷いてミコトに傘を差しかけた。

「会社の備品を他人に貸し出すのは違反だ。あれは、オレが勝手にしていることだ。担当が変わった時、引き継いだりしない事は、加藤さんも承知している」

ミコトは改めて飯田の事を、尊敬のこもった眼差しで見詰めた。ミコトの熱い視線を感じたのか、飯田は咳払いすると照れ隠しのように軽口を叩いた。

「ま、こうやって恩を売っておくのも、何かあった時、有効なんだから。これも覚えておきな。坊や」

「坊やって呼ぶな！」

膨れるミコトに向かって「アハハハ」と笑うと、飯田は車に乗り込んだ。

「さて、一旦会社に戻るか」

エンジンをかける飯田に、申し訳無さそうにミコトが小声で囁いた。

「飯田さん、実はもう一件あるんです……」

「んああ？」飯田の形の良い眉が、片方だけ吊り上がった。

「被害妄想の変人の家」

飯田はがっくりとハンドルに突っ伏した。

被害妄想の変人こと『カネモチ フク』の訪問時間は四時半だ。

まだ時間があるということ、先に飯田の用事を済ませることになった。

「どこに行くんですか？」

ミコトの問いに答えず、飯田は運転しながらタバコに火をつけた。立ち昇る白い煙越しに、飯田の端正な横顔を盗み見ながら、ミコトは密かに決心していた。

料金課のほとんどの人間が、飯田をどう思っているかと、自分の尊敬できる先輩はこの人しかない。何があっても飯田について行くぞ、と。

飯田は商店街の一面に車を停めると、「駐禁取られるといけないから、車内で待っている」と言い置いて近くの建物へ入って行った。「帝都ガス？」

看板を見て、ミコトは首をかしげた。いったいライバルとも言うべきガス会社に、何の用事なのだろう？

五分もしないうちに飯田は戻ってきて、「次行くぞ」と言って商店街を離れた。

雨はだいぶ小降りになってきたが、小学生の集団が傘をさしている所を見ると、まだ傘がいらさないほどではなさそうだ。飯田は信号の無い横断歩道で小学生の列に道を譲った。

ぞろぞろとつながって横断する小学生を眺めながら、飯田はボソリと言った。

「次のところ、お前も来い」

飯田が自分の現場に、自らミコトを同行させるのは、初めてのよな気がする。何だか少し認めてもらえたようで嬉しかった。

いったい何処なんだろう、と考えているうちに、飯田は小学校の正門前に車を停めた。

「降りろよ」

「え？　ここ、小学校ですけど……？」

飯田は車をロックすると、正門から一番近い校舎に向かって歩い

て行つた。

正門から出てきた子供たちが、帝都電力のロゴ入りの看板車を見て、でかい声でCMソングを口ずさんだ。

「てーいーとーで〜ん〜りよく〜」

ミコトはなんだか気恥ずかしくなり、顔を隠すようにして飯田の後を追った。

昇降口を入ると、すぐ横に事務室の窓口がある。飯田は事務員と窓越しに二言、三言話した後、スリッパにはき替えて廊下を進んだ。ミコトも事務員に頭を下げると、飯田に続いた。

小学校に足を踏み入れるのは何年ぶりだろう。飯田とミコトは廊下に貼り出された、たくさんの水彩画や、墨で半紙に書かれた「明日の光」という書道作品の列を眺めながら、職員室を目指した。

事務から連絡が行っていたのだろう。職員室の前に、中年の女性教師が立っていた。上下紺色のジャージ姿で、いかにも先生らしく、化粧っ気が無い。

「こんにちは、こちらへどうぞ」女性教師は、職員室の並びの空き教室へ入って行つた。

「こんにちは、帝都電力で支払いを担当しています、飯田です」飯田は女性教師に名刺を渡した。飯田にヒジでつつかれ、ミコトも名前だけ名乗った。

「同じく、帝都電力の篠原です」

女性教師は「どうぞ」と子供用の机を指さして、二人に座るようにながすと、自分も椅子を一つ引き寄せた。困ったような顔をして、名刺と飯田の顔を交互に見ていた女性教師が、口を開く前に飯田が話しはじめた。

「水沢カナちゃんの担任の先生ですよね」

「はい、水沢カナは私のクラスの生徒です」

「先生、週に一度ずつカナちゃんのお宅に行ってますよね」

ミコトは二人のやり取りを少しはなれた位置で聞いていた。

水沢？ ミズサワ……ミズサワ……どこかで聞いたような？



「はい……不登校になってしまつて、算数と国語のプリントだけでもやつてほしいと思い、いつも金曜日に……」

「ご両親とは会いましたか？」

飯田の言葉に女性教師は明らかに警戒の色を強めた。なぜ電気屋さんに生徒のプライバシーに関することを訊かれなければいけないのか、そんな顔だ。飯田も、先生の表情から察したのか、自分の方の話をしはじめた。

「じつは、先日電気料金を集金に行つたのですが……水沢さんのお宅は、かなり滞納してしまつて」

女性教師がハツと目をみひらいた。

べつに先生に払つてなんて、いいませんよ！ と、飯田は見た事も無いような優しい顔をして見せた。

「カナちゃんが出てきて、修学旅行の積立金を払おうとしたんです」「ええ？」女性教師はさすがに動揺した様子だった。

ミコトは話を聞いていて、ようやく思い出した。電気を止めないで、と涙を流していた小学生のことを。

飯田はカバンから顧客カードと帝都ガスのマーク入りの書類を取り出した。

「ボク、ずっと水沢さんの家を担当してるんですけど、ここ数ヶ月、いつ行つても、カナちゃんはいないんです」

顧客カードには、行つた日付と時間を記入する事になっている。

飯田は先生にカードを見せ、さらにガス会社の書類も見せた。ミコトも書類を覗き込む。

「ボクも、頻繁に行つてゐるわけではないので、ガス会社の人にも資料を借りてきたのですが」

ガス会社の書類も、同じように行つた日付と時間と交渉内容が載つていた。それは、どう見ても帝都ガスの社外秘だ。飯田はいったい誰から借りてきたのだらう？ 外勤者同士のコネがあるのだらうか？

ミコトは関係ないことで絶句する。

先生は観念したように話し出した。

「実は、カナちゃんのご両親と連絡がつかないんです。勤め先に電話をしたら、お辞めになっでいて。でも、カナちゃんには連絡が入るらしくて、行方不明というわけでもないらしいのです。心配して何度もあの子の所に行ったのですが、生活費も銀行から下ろしているから、先生には関係ないと言われて」

行方不明ではない、と娘が言うのだから警察にも行けず、キチンと生活もしていると本人が言い張るのだから、福祉のほうでも様子を見るだけだし、先生もさぞ困っていたのだらう。

飯田が言った。

「たぶん、お金が底をついたのかもしれない。ガスは先日止められてしまったそうです。昨日訪問したときは、何も食べていない様子でした」

「ああ、何てことでしょう！」先生はハンカチを取り出して目頭を押さえた。

「これだけ資料があるなら、行政の方も動くと思いますから、すぐにでも児童福祉課に行ってください。これは二一八条・保護責任者遺棄です。犯罪ですよ」

「犯罪」と聞いて、先生は慌てふためき、資料を持って校長室へ行ってしまった。

「んじゃ、用事は済んだから、ババアのところに行くか」

よっこらしよ、と子供用の椅子から立ち上がると飯田はちよっと身をかがめるようにして空き教室を出た。

ミコトは放心していた。

飯田は、あの少女の家に毎日行ってたのだ。自分はある時お金をもらわなかっただけで「いい事した」みたいに満足していたけど、その後あの子がどうしてるかなんて、考えなかった。それどころかすっかり忘れていた。

外に出ると、雨は上がっていた。夕方の空は紫色の雲がひろがっ

ている。ミコトは飯田の背中に向かって声をかけた。

「あの子、かわいそうですね」

「まあな、親が悪いって言えば、それまでだけど、周りの大人もいけねえよな。本当はもっと早く助けてほしいって顔、してたと思うぜ。でも、あの年頃はビミョーだからな」

ミコトが考え込んでいると、飯田が振り向いて言った。

「昨日、食いもん買って覗きに行ったら、あのコ、何て言ったと思う？」

ミコトが首をかしげると、飯田は吐き捨てるように言った。

「お金が無いから、体で払えばいいですかって……。まさかそんな事、要求された事があるのかなんて、恐ろしくって訊けなかったよ。誰も信用しなくなる訳だよな」

ハア……とため息をついて、飯田は車に乗り込んだ。

なんだかどんよりとした空気のまま、二人は「被害妄想の変人」

こと『カネモチ フク』の家に向かった。

ぼうつとしていたミコトは、飯田が車を停めて「降りろ」というまで、まったく周りの風景が目に入っていなかった。窓の外の風景は『カネモチ フク』の家ではない。

「降りろって、……え？」

そこはあの怖い暴力団事務所、タクミ商会のそばだった。ぐずぐずしているミコトに、飯田は冷たく言った。

「おまえ、ここで降りて自転車で行け。雨、上がったし。ババアと約束したのはお前だからな。……オレは他に行く所がある」

「ええー？ 飯田さん、行かないの？」

飯田はニヤリと笑い、長い手を伸ばして助手席のドアを開けると、ミコトを車外に追い出した。

「クソ、ふむなよ！」と、親切なセリフを残し、飯田の運転する車は見えなくなった。ミコトは呆けたようにしばらく佇んでいたが、ふっとタクミ商会のビルが目に入ると、正気に返った。

「また、怖いお兄さんに捕まったら大変だ」

ミコトは近くに置いておいた自転車に乗って、すばやくその場から立ち去った。

『カネモチ フク』の家についたとき、四時半を少し回っていた。ミコトは自転車を脇に停めて、カネモチさんの家の門を開けた。猫の糞を踏まないように、足元を見ながらゆっくり足を踏み入れた途端に、頭上から何かが落ちてきて、足元の地面に当たって飛び散った。

「うひゃあ！」ミコトはビックリして飛びすさった拍子に、水溜りに右足をつっ込んでしまった。落ちてきた物を確認し、自分の右足を救出して、それからゆっくりと顔を上げた。

落ちてきた物は生卵。右足は靴下までびしょ濡れ。そして二階の窓から顔を出している老婆は、歯の無い口元でニツと笑ったように見えた。

「カネモチさん！ いきなり何するんですか！」ミコトは腹が立ってきた。

さつきはネコ糞を踏まされ、今度は卵攻撃。いったい何なんだ！

「あんた、約束を守らなかったね」

「約束？」ミコトは怒りを堪えて、老婆を睨み上げた。

「四時半に来るって言っただろ。もう四時四十三分だ」

ミコトは二階の老婆を見上げたままキョトンとした。彼の様子に、老婆はイライラした口調で怒鳴った。

「四時半って言ったら、ぴったり四時半に来なきゃ約束違反だ」

「え……だ、だって十分やそこら遅れたからって……」

「ダメだ、ダメだ！」老婆はキーキー喚いた。

「約束の日から一日遅れただけで電気止めるくせに、何言ってるんだ。今日は払わない。あたしのせいじゃないよ、おまえが悪いんだからな！」怒鳴り散らして、老婆はぴしゃりと二階の窓を閉めてしまった。

その後ミコトは何度も玄関から呼んだが、とうとう『カネモチ

フク』は姿を見せなかった。

「何だよ！ くそババアめっ」

ネコフンは踏まなかったが、右足はびしょ濡れで気持ちが悪かった。ミコトは右の靴下だけ脱ぐと、作業ズボンのポケットに突っ込んだ。あまりに悔しいので、こうなったら金をもらうまで、毎日しつこく来てやろうと決心した。

ミコトはカネモチフクの玄関先で、ありったけの大声で叫んだ。

「今日は帰るけど、明日 また来るぞ！」

二階のカーテンがふわりと揺れた。

『カネモチ フク』の家の話をすると、飯田は大爆笑した。

「だっせーな、おまえ！」

笑いすぎて涙目の飯田に、ミコトは顔を真っ赤にして怒鳴った。

「そもそも飯田さんにだって、責任あるんですよ！ 素直に車で乗せて行ってくれたら、時間に間に合ったんですからっ」

背後で二人のやり取りを聞いていた先輩の岩佐が、笑いを堪えながら言った。

「あのばあさん、まだそんな事やってるのか」

え？ と言う表情で振り返ったミコトに、岩佐が面白そうに言った。「担当が変わると、最初の三回くらいは絶対払わないんだよ。だから、もし篠原が間に合ってたとしても、何かテキトーな理由つけて払わなかったと思うよ」

ミコトはすごい勢いで、今度は飯田の方を振り返った。

「飯田さんもその事、知ってたんですか？」

ニヤニヤ笑いの飯田の顔が全てを物語っている。ミコトはあまりの事に、呼吸困難になりかけた。

「ひ、人が悪いにもほどがある！ ちょっと教えてくれればいいのに」

「ネコ糞と、タマゴと水溜りか。すげえな、三つ揃って大当たりだ。」

アハハハ」

飯田の軽口は、いつもの事だ。でも、今日のミコトは心身ともに疲労しきっていた。

「今日はオレ、三つどころじゃないっす……」

ミコトはボソリとつぶやくと、飯田と岩佐に背を向け、唇をグツと噛んでフロアを出て行った。

ミコトがトイレで顔を洗って戻ってくると、デスクの上に肉まんとペットボトルのお茶が乗っていた。

「あれ？」誰がくれたのだろうと見回すと、飯田が同じペットボトルのお茶を飲んでいるのが見えた。今日は忙しくて、昼ごはんも食べないうちにもう夕方だった。

「飯田さん？」ミコトが肉まんをつまみあげると、飯田が器用に片目をつぶって見せた。

肉まんくらいで、懐柔されると思ったら、大間違いだぞ、と心の中でつぶやいて、ミコトはそれをほおばった。

「うまいっ」昼抜き肉まんはめっちゃめっちゃ美味かった。夢中で食べ終わる頃には、ミコトのご機嫌もすっかり直ってしまっていた。

初イベント・・・その実態は？

＊

ゴールデンウィークのせいか、朝の通勤時間帯だというのに、電車はガラすきだった。

「休日出勤なんて、冗談じゃないよな。しかも、他係の手伝いって、何なんだよ」

篠原ミコトは電車に揺られながら、ぶつくさと小声で文句を言った。

五月五日、こどもの日。ただ、新入社員だから といっだけの理由で営業課のイベントに駆り出される事となったのだが……。

「新しく出来たショッピングモールで、多くの企業が参加して産業フェスタと言うイベントがある。営業課主催でうちも参加するのだが、人手が足りないそうさ。そこで、勉強も兼ねて、料金課からは篠原くんに出てもらおう事にしたから」

「ええ？」

坂井課長から、寝耳に水のような話を聞いたのは、連休直前の夕方である。

ミコトの実家は北海道だ。なぜか関東の会社、帝都電力に入社し、母親の姉である伯母の家に居候しているが、ゴールデンウィークには里帰りをして、高校時代の同級生と遊ぶ計画を立てていたのに。用意していた航空チケットもペアだ。日にちがもう少し前半か後半にズレていれば何とかなかったのに、何もと真ん中に出勤を当てなくても……とブツブツ言うが、虚しいばかりだ。

ミコトはショッピングモールのある駅で降り、改札口を出た。眩しい日差しに目がくらんで、思わず両手で顔を覆った。

海沿いに新しくオープンしたショッピングモールは、有名ブランドのアウトレットとして、オープン前から話題にのぼっていた。ア

ウトレットと言っても、キズモノや難あり商品だけを扱っているわけではなく、型落ち商品などがほとんどの為、有名ブランドの品が格安で買えるとあって、若い女性客が遠方から詰め掛ける、今、Y市でいちばんオシャレなスポットだった。また、近くに水族館をメインにしたアミューズメントパーク・アクアパライスもある。連休のど真ん中、眩しいまでの晴天に恵まれた本日の人出は、物凄い数になる事が予想された。

朝八時、十時オープンのショッピングモールはまだお客の姿は無い。いったい今日は何を手伝え方がいいのだろうか？

指定された集合場所、ショッピングモールの中央広場に向かってぶらぶら歩いて行くと、そこだけ賑やかな人の声がしていた。

ほぼ円形の広場には、それぞれ企業のマーク入りテントが十以上も張られ、慌ただしく準備が進められていた。

「スゴイな。一部上場の企業ばかりが出てるのか」

お馴染みのビールメーカー、お菓子の製造会社、自動車会社、そしてライバルの帝都ガスも、もちろん居る。自分の会社のマークを探してウロウロしていると、女性の声で名前を呼ばれた。

「篠原くう〜ん」

甘ったれた呼び方で呼ばれ、キツと振り返ると、同期入社の上条ありさが手を振っていた。彼女は「帝都電力」とでかい白抜き文字の書かれた朱色のはつぴを着ていた。

「遅いわよ。こっち来て手伝ってよ〜ん」

テントの中では、営業課の社員が総出でイベントの準備に当たっていた。皆、上条ありさと同じ朱色のはつぴを着ている。

「なんだか文化祭みたいで、ちょっと面白そうかも」

ミコトは営業課で一番偉い営業課長を見つけると、走っていつて挨拶をした。

「おはようございます。今日はよろしくお願いします」

ミコトの顔を見て、営業課長はにこやかな笑みを浮かべて言った。「いやあ、他係の大事な新人をお借りしちゃって、本当に申し訳な



かったねえ」

「いいえ。うちの坂井課長から、勉強の為に参加して来いと言い含められていますので、何でも言いつけてください」

ミコトがニッコリすると、営業課長は一瞬「へ？」という顔をした後、「あ……じゃあ、とにかく頼むよ」と言ってミコトの肩を勢いよく叩いた。そして、飯田と同じくらいの年齢の男性社員を呼ぶとミコトに紹介した。

「こちらは入社三年目の伊藤くんだ。今日は彼の指示にしたがって手伝ってくれ」

お願いします、と言ってミコトは伊藤を正面から見た。飯田ほどではないが、なかなか整った顔をしている好青年といった印象だ。伊藤は愛想の良い笑顔を浮かべて、ミコトを手招きして言った。

「今日は、お客様にIHクッキングヒーターを体感していただくのが目的だ。キミ、IHって知ってるよね？」

「あ……まあ、パンフレットは見た事ありますけど、実物や性能についてはサッパリ……」

伊藤は少々呆れたような目をしたが、何も言わなかった。

ミコトは自分の勉強不足を呪った。

「IHクッキングヒーターは、電気を熱源とする調理器具だ。でもその最大の特徴は、ヒーター自体が熱を持たないという事だ」

伊藤は嫌がらず、実物を目の前にして丁寧に説明してくれる。IHとは、電磁誘導加熱、つまり炎を使わずに、なべそのものを発熱させる熱源のことだ。磁力発生用コイルから発生した磁力線が、金属製のなべを通るとき、なべ底にうず電流が生じ、なべそのものを発熱させる。なべ周囲の排熱が少なく、熱効率が極めて高いのが魅力なのだそうだ。

「以前は使用できる鍋が限定されていて、しかも鍋自体が高価だったせいもあって、なかなか買い換えるにも手を出しにくかったんだけど、最近では幅広い種類の鍋に対応出来る機種が開発されているから、結構人気が出てきているんだよ」そう言って、伊藤はぐらぐ

らと沸騰したヤカンを脇に寄せると、ヤカンの載っていたプレート部分に素手で触った。

「い、伊藤さん。熱くないんですか？」

ミコトがギョツとして言うと、手を掴まれて同じ箇所を触らされた。「熱くない！」

「コレがIHの安全性。ヤカン自体を温めるからヒーターは手で触れても大丈夫なんだ。ヤカンはもちろん熱いから触っちゃダメだよ。タイマーも付いているから、これなら消し忘れて火事になる事も無い。お年寄りにも安全なわけだ」

「へえー、何て便利なんだ！」

ミコトが素直に感心しているのを見て、伊藤は苦笑した。

「本当は社員であるキミが、お客様に今のように説明できないといけないんだけどなあ」

「あ……」ミコトは真つ赤になって俯いた。

入社してから一ヶ月が経ち、飯田に付いて自分の仕事をするのが精一杯で、会社全体の仕事をまったく把握できていないことを思い知らされた気がした。

「これってやっぱり社員常識の範囲だったりするよな。もっと色々勉強しないと……」

大事な連休をつぶされた時、「勉強になるから」と坂井課長が言った事は、まんざら嘘でもないなと思った。

「伊藤さあくん、こっち来て唐揚げの粉付けてえ。私、どうしたらいいかわからな〜い」

伊藤とミコトが振り返ると、あたり一面を真つ白に煙らせて、上条ありさが半ベソをかいていた。カップヤキソバが作れない不思議系お嬢さまは、唐揚げも作った事が無いしかった。伊藤は額に手を当てて、フウとひとつため息を付くと、ミコトに言った。

「彼女も頑張っているんだけどね。いかにせん、一般常識が欠如していて……」

ははは…とミコトは乾いた笑いを漏らした。

社員常識が無くても、一般常識が無いよりまだマシかもしれない。ミコトは気を取り直して、伊藤と共にお嬢さま救出に向かった。

十時近くになると、一般の買い物客が大勢姿を見せ始めた。上条ありさによれば、アウトレットでは、ゴールドエンウィーク特別セールを開催中だそうで、ブランド品が驚くほどの安値で買えるらしい。目的の商品をゲットする為に、開店前から並ぶのは常識なのだそうだ。そんな常識より、他のことを覚えると言いたい。

唐揚げとポテトを揚げながら、ミコトは心の中で悪態をつく。結局お嬢さまは、ネイルが剥がれるからと言って、粉付けを放棄し、油がはねて怖いからという理由で、揚げ物からも手をひいてしまった。押し付けられた形のミコトは、汗だくになりながら、IHクッキングヒーターで懸命に調理実習をしているのだった。

「しかし、優れものだよな、コレ。油の温度が一定に保てるから、たくさん調理しても焦げないし、火加減を気にする事も無い」ミコトが一人しみじみIHの便利さに感動していると、近くを通りかかった親子が寄ってきた。

「へえ、これって電気なんだ」

ミコトはドキリとしたが、笑顔で子供にポテトの入った紙コップを渡して言った。

「そうなんですよ、火を使わなくてもこの通り揚げ物もできて、その上お手入れがラクラクなんです。五徳の掃除って大変でしょ。でも、コレはセラミックだからサツと一拭きするだけなんですよ」

ミコトは緊張しながらも、早速先ほど伊藤から聞いたことをそのまましゃべった。

ふーんと感心しながらも、パンフレットでヒーターの値段を確認した主婦の足は、徐々にテントから遠ざかっていくとする。すると伊藤が来て、子供にヨーヨー釣りのこよりを渡して引き寄せると、ミコトに説明したのと同じようにIHの宣伝をし始めた。上条ありさが子供をヨーヨーつりに案内し、お客さんは完全に足止め状態に

なった。何気ないけど、よくできたチームワークだと思った。

ミコトは営業課の仕事ぶりに感心した。

言っちゃ悪いが、たいして魅力的ではない商品に興味を持たせるためには、色々な事をして、お客の関心を引かなければならない。ふと周りを見渡せば、どここの企業のテントでも、ミニスカートの綺麗なおねえさんがサンプルを配ったり、アニメーションを流したり、子供に風船を配ったりしている。

「なんだか営業課って楽しいな」ミコトは上条ありさがうらやましくなった。指導員の伊藤は優しくて親切だし、まわりの社員たちも皆気さくで人当たりが良い人ばかりだ。自分の部署と比べるのは間違っているが、新人の待遇だけを見ても、天と地ほどの差がある。なにしろ自分の指導員はあの飯田だし、ミコトは未だに料金課のお荷物扱いなのだった。

「篠原くん 悪いね、揚げ物一人でやらせちゃって」

伊藤が手に缶ジュースを持って現れた。手渡された飲み物を受け取ると、ミコトはつい本音をつぶやいてしまう。

「上条さんがうらやましいです。営業課は楽しそうだし、それに指導員の伊藤さんは親切だし……オレなんか」

伊藤がチラリとミコトを見て言った。

「そんなこと、本気で思っていたとしても、軽々しく口にするものじゃないぜ」

え？ とミコトは伊藤を振り返った。

「皆が皆、自分のやりたい種類の仕事をしているわけじゃないんだから」

テント前に新たなお客さんが現れ、伊藤はそちらのほうへ行ってしまった。ミコトは伊藤の背中をじっと見た。楽しそうにしているけれど、伊藤もやっぱり仕事や職場に対して、何か不満があるのだろうか？

「篠原くん、ちょっと」

ボケツとしていたミコトは、別の営業課の男性社員に呼ばれた。

男性社員は、営業課長の次に偉い営業課の副長だった。ミコトがそばに寄っていくと、大きな紙袋を渡された。

首をかしげる彼に、営業の副長は言った。

「じゃあ、そろそろ手伝いをしてもらおうか」

「え？」今までだって、揚げ物したりして、ちゃんと手伝っているじゃないか。

手渡された紙袋をのぞき込んで、ミコトの頭上にさらに？マークが飛ぶ。

「こ、これは？」

ミコトはほわほわした布地を紙袋から引つ張り出して訊ねた。副長が言った。

「これは我が社のイメージキャラクター・デン坊<sup>ほん</sup>じゃないか。キミ、まさか知らないのか？」

「いえ……知ってますけど」

デン坊は帝都電力のコマーシャルにも使われているキャラクターだ。コンセントをイメージしているらしい二本の角のある帽子をかぶっており、間の抜けたピカチュウのようなモンスターだ。色は白とピンクで、いわゆる『ゆるキャラ』として、子供たちにはけっこう人気があるらしい。

「で？」ミコトが副長に問いかけるような眼差しを向けると、彼は簡潔に言った。

「早くデン坊になってよ」

「ええー！」まさに、聞いてないよ！ だった。

あそこの管理事務所で着替えて来い、と有無を言わせず尻をたたかれ、ミコトは情けない表情で、アーケード二階の端っこにある事務所に向かった。

十時を回って、アウトレットにはおしゃれなおねえさんたちが大勢繰り出してきている。揃いの赤いはつぴもちよつと恥ずかしいな、と思っていたが、このクソ暑いさなかにデン坊の着ぐるみとは……。デン坊の中は予想以上に暑かった。そして、頭にかぶるかぶりも

のは、おそろしくかび臭い。一瞬かぶっただけで吐き気がして、ミコトはすぐにかぶりものを脱いでしまった。

「連休のど真ん中に駆り出され、メインの仕事はこれかよ……」

みんながミコトに優しくしてくれた訳が、今ようやく分かった気がした。

事務所の前でいつまでもぐずぐずしていると、上条ありさが呼びに来た。ミコトは仕方なく吐き気のするかぶりものをかぶると、彼女に付いて元のテント前に戻った。

デン坊は、子供のアイドルどころか、子供のおもちだった。

「おい、何とか言えよ」

太った小学生が、がしがしとデン坊を後ろから蹴った。

「省エネビーム、どこから出すんだよ」

ビームなんか出るわけ無いとわかっていながら訊いてくるガキどもは、かなりムカつく。

しかし、一番腹が立ったのは、かぶりものを脱がそうとする奴らだった。好きでかぶってるわけじゃない！ と何度も喉元まで出かける言葉を飲み込む。デン坊はしゃべってはいけないのだ。

親はどこにいるんだ！ 親は！

ミコトは必死にデン坊の頭を押さえて、小学生の襲撃から身を守っていた。

地獄のような時間も折り返し地点に入り、ミコトに休憩の許可が出た。

「篠原くん、ご苦労様。今日は暑いから、熱射病にならないように、たくさん水分とって、午後も頼むよ」営業課長のねぎらいの言葉も、暑さと疲労でボケツとしているミコトの耳にはほとんど入らない。

ミコトは上条ありさから渡された弁当を手に、デン坊の着ぐるみのままふらふらと日陰を探してショッピングモールのアーケードに向かって歩いて行った。

ポピーやパンジーの咲き乱れる花壇に腰掛けてかぶりものを取ろうとした時、ミコトの目の前のショップから見慣れた男性が出てきた。

あ！ 飯田さん！

声をかけようとして、ハッと思い留まった。

彼の後から、モデルのように可愛い女性が出てきた。美男美女のカップルは、デート中らしく、にこやかに談笑しながら隣のバッグの店に入って行った。

ミコトは飯田の彼女をよく見ようと、バッグ店のウィンドウを覗き込んだ。

カワイイ彼女は、飯田の腕に腕をからめて、白いバッグを指差している。飯田が見たことも無いような優しい顔で、彼女の言う事に対してウンウンとしきりに頷いている。

「なーんか飯田さん、いつもの無愛想な顔は、どこにいったのやら。あーあ、トロケそうな顔しちゃって、こっちが恥ずかしいや」

どうやら飯田は彼女にバッグをプレゼントしてやるつもりらしい。彼女が選んだバッグを受け取ると、財布を出しながらレジへ向かった。

ミコトは目立つデパートの衣装を着ている事を思い出し、二人に見つかからないうちにそっとウィンドウを離れた。

世間は楽しい休日のさなかだというのに、何だかやりきれない思いだった。営業課のみんなも休日に仕事をしているが、妙な着ぐるみを着て子供の襲撃にあっている自分とは、何かが違うと思わずにはいられない。仲睦まじい飯田と彼女のデート風景を目撃したせいもあり、今の自分がとてもなく惨めに感じた。

好きでやってるわけじゃない！

そう思ったとき、先程の伊藤の言葉が鮮明に甦ってきた。

皆が皆、自分のやりたい種類の仕事をしているわけじゃないんだから

ミコトはふう……と一つため息をつく、帝都電力のテントへ戻

って行った。

「篠原くん、もうすぐデン坊と子供のじゃんけん大会があるから、準備しておいてね」

まだ弁当もほとんど手をつけていないというのに、伊藤がミコトの背後でささやいて、広場の中央付近へ押しやった。ミコトは慌ててかぶりものをかぶると、広場で手招きをする上条ありさの元へふらふら歩いて行った。

「やばい……メガネが曇る」

晴天に恵まれたこどもの日の気温は、昼時の今がピークで三十度を超えていると、ショッピングモールの電光掲示板が伝えていた。まるでサウナのようなデン坊の着ぐるみの中で、ミコトはぼんやりする視界のまま、『デン坊とじゃんけん大会』のイベントに突入した。

子供たち一人ひとりとじゃんけんをして、デン坊に勝った子供は賞品として、暗いところでも光るデン坊オリジナルバッジがもらえる。

あんなバッジ、いらねえよ！

ミコトはじゃんけんをしながら、誰にも言えない不平不満を心の中で爆発させていた。

なんでこんなに子供がいるのだろう。日本は今、少子化の時代じゃないのか？

ぼやける視界で子供の列を眺めては、げっそりする。遙か後方まで、列は続いていた。

「おい、おまえグウ出せよな」

目の前の子供が言った。

ムスツとしながら子供の顔を良く見ると、さっき一回じゃんけんをした事のある子供だった。

おいおい、一人一回じゃねえのかよっ！

ミコトは首をめぐらせて司会担当の上条ありさを探した。しかし、



彼女の姿はどこにも見当たらない。他の営業課の面々を探すと、皆忙しそうに接客をしていた。

「ああ……ここでオレが子供を足止めしている間に親をつかまえているわけか……」

ミコトはデン坊のかぶりものの中でため息をつき、時間無制限のじゃんけん大会を再開した。

賞品のバジが底をつき、新たな賞品がゴム風船一個になった途端に、子供はいなくなった。やはり魅力がないものは、たとえタダでももらえないだろう。

「ああ……なんか、頭がくらくらする……」

やめて良いという指示は出されていなかったが、子供が居なくなったので、もうおしまいにしようと思手に決めて、ミコトはアーケード内にある日陰のベンチに寝転んだ。

こうして寝転んでしまえば、ベンチの背もたれとその後ろにある花壇のおかげで中央広場の上司たちから、サボっている所を見られる事も無さそうだった。

かぶりものを外すと、爽やかな五月の風が吹きすぎてゆき、汗で湿ったミコトのネコツ毛をかすかに揺らした。

「なんか疲れたな。昨夜ゲームやりすぎたか？」

ミコトはいい気持ちになり、デン坊のかぶりものを枕にして目を閉じた。

誰かに激しく揺さぶられて、ミコトはハッと目を開けた。ガバツと勢い良く身を起こし、辺りを見回す。

ベンチの背もたれの向こうには夕闇が広がり、賑わっていたはずの中央広場はがらんとしていた。

「あれ？ イベント会場は……？」

ぼんやりした頭でつぶやくと、聞きなれた声が呆れたように言った。

「とつくに終わってるみたいだぜ」

「うげっ！ い、飯田さん？」

ミコトはキョロキョロと辺りを見回した。

イベント会場がすっかり片付けられているばかりか、帝都電力の社員は一人も居なくなっている。

ミコトは再びボーツと飯田の顔を見上げた。

「おまえ、置いてきぼりにされてるぞ」

「ええー！」

デン坊の衣装のまま放心しているミコトを見て、飯田は苦笑して言った。

「まったく、だっせーヤツ」

「うっ……」

信じられなかった。あんなに一生懸命頑張っていたのに、誰もミコトが居なくなった事に気付かないで帰ってしまうとは。

「ヒドイ……。誰もオレの事、探してもくれないなんて」

ミコトはのろのろと立ち上がった。イベントの終わってしまった夕暮れ時、オシャレなショッピングモールには家族連れの姿は無く、カップルばかりが通り過ぎてゆく。着ぐるみ姿のミコトは恥ずかしいというより、哀れを誘った。

飯田は腕組みをしてミコトの様子を黙って見ている。彼の周囲にはカワイイ彼女の姿は無かった。

「飯田さん、なんで？」

彼女とデートじゃなかったの？ その言葉を飲み込んで、飯田を見上げたミコトに、彼は慈悲深い眼差しで言った。

「おまえ、その格好が好きなの？」

「あ……」

着替えて来い、と背中を押され、ミコトは慌てて二階の管理事務所に向かった。

着替えを済ませて事務所を出ると、飯田がヤンキー座りでタバコをふかしていた。ミコトは驚いて飯田を見詰めた。

「待っててくれたんですか？」

まさか彼が待つてくれるとは思ってもしなかった。さらに彼は驚くような言葉を口にした。

「メシ食いに行くんだけど、一人じゃつまんねえから、つきあえよ」  
その場で固まっているミコトの足元に「早く来い」とタバコを投げ捨てると、飯田は返事も聞かずにすたすたと階段を降り、ショッピングモールを横切って行ってしまった。

いいのだろうか？

ひとり、イベント会場に取り残され、世間の冷たさに打ちひしがれていたミコトは、たったこれだけの事で不覚にも目頭が熱くなってしまった。

メガネを外し、汗を拭うフリをして涙を拭いた時、飯田が振り向いた。

「おい、来ねえのか？」

飯田に呼ばれて、ミコトはじわりと胸の奥が温かくなった。

「飯田さん、飯田さん……オレ……うつく……」

声を詰まらせるミコトに、ハア……と飯田はため息をついた。今やミコトの大きな目は、拾われた仔犬のように潤んでいる。飯田はその様子に顔をしかめた。嫌な予感がする。案の定、捨て犬のような後輩は、転げそうになりながら走ってきて、飯田の背中にしがみついた。

「おい、やめろよ、それ……」

飯田はぼそりと背中中のミコトにつぶやいた。

かわいい女の子ならともかく、いくら可愛くても野郎にショッピングモールで抱きつかれるのは勘弁してもらいたい。

でも……。

どういう訳だが、自分はこの後輩が心配でたまらないのだ。

昼間もバッグ屋のウィンドウを覗く挙動不審なデン坊に気付いていた。

連れの女性と食事を済ませた後も、しばらく彼女の買い物につき

あいながら、子供の襲撃にあう『ゆるキャラ』の情けない姿を目で追っていた。けれど、買い忘れた物があり、ショッピングモールに戻ってきたのは、本当に偶然だった。

まさか、取り残されてあんなところで熟睡しているとは。

鼻をすするミコトに、道でもらった消費者金融のポケットティッシュを渡し、飯田はフツと微笑んだ。

ミコトは素直に渡されたティッシュで鼻をかんだ。同情されて優しくされているという事は良くわかっていた。いつもだったら、大きなお世話だ！と突っぱねる所だが、今日は本当に心身ともに疲弊しきっていた。

「飯田さん……ありがとう」

いつになく素直なミコトに、一瞬ドキリとして、飯田はぶっきらぼうに言った。

「んじゃ、軽く飲めるところにでも行くか」

ミコトはコクンと頷くと、飯田の後に付いて歩き出した。

## 波紋

★

ゴールデンウィーク明けは業務が忙しい。

パソコンの業務画面にはいつも目にする倍以上の未払い客がリストアップされている。「五月病」などになっている暇はないな、とミコトは思った。

忙しい事は忙しいが、今日は朝から良いことが二つあった。ひとつは例の小学生、『ミスサワ カナ』ちゃん。彼女の家に近い現場を回っていると、「いつてきまゝす！」の声と共に元気に飛び出してゆく後姿を見かけた。未納金も支払い済みになっていたから、親が帰ってきたのだろう。あとで飯田に報告しなくては。もうひとつは、あの「被害妄想の変人」こと『カネモチ フク』がミコトに支払いをしてくれたのだ。さらに、老婆はどういう風の吹き回しか、庭でとれたという大量のビワまでおみやげに持たせてくれたのだ。た。

「ネコフンも今日は撒いてなかったし、とにかく良かった」

上機嫌でフロアに戻ると、坂井課長の席の周りを、他係の人間がぐるりと囲んでいた。

紺色のつなぎの作業服は配電課の作業グループの制服だ。配電課は、実際に電柱に登って変圧器や電線を扱ったりする部署のことだ。電流を流したままの活線作業は、感電死亡事故と背中合わせの危険な作業である。ミコトのいるこの事業所では扱っていないが、六万六千ボルトの高圧電流が流れる送電線の担当部署は、その作業環境が地上数十メートルの上空なのだ。高所恐怖症のミコトには、考えられない仕事をしている、というも思う。

「高所作業車で電柱に取り付けられてるトランス（変圧器）を交換してたら、マンションの住人が「のぞき」だって苦情を言ってきた、

うちの若いモンが殴られた」

配電課で一番偉い配電課長が呻るように言った。飲み会の席で、ミコトを捕まえて散々ビールを飲ませたハゲオヤジだった。あの時はただの酔っ払いだった。今は威厳たっぷり、そのうえ日焼けしていて迫力満点だ。

「それで、どうしてうちの係にそんな話をしに来たのです？」

坂井課長が、意味がわからないという顔で問い返す。

「殴った若い男は、ガラの悪いヤツでね。ソイツがこう言ったらいい」

配電課長は坂井課長をギロリと睨むと言った。

「文句があるなら、集金員の飯田に言えって」

「ええ？」坂井は眉をひそめた。

飯田の名前が出て、ミコトは思わずビワの入った袋を取り落としてしまった。ころころと転がっていくオレンジの果実を拾い集めるフリで、ミコトは坂井課長の席近くににじり寄った。

左目のふちを赤く腫らしている若い作業員が言った。

「最初は部屋をのぞいたの何のって、文句をつけていたんですが、そのうち、飯田って知ってるかって話になって……」

ボタンと派手な音を立てて、ドアが開いた。半長靴はんちゅうかの足音も高らかに、飯田が入ってきた。啞えタバコかと思いきや、彼は棒付きキヤンディーをしゃぶっている。

坂井の小さな目が吊り上がった。

「飯田くん、ちょっと！」

オレ、忙しいんですけど……と、面倒くさそうに言って、そばに歩いて来た飯田の口から、坂井は棒付きキヤンディーを取り上げた。「あ……」と言って、飯田は自分を囲むように詰め寄る他係の人間をぐるりと見回した。

「オレに何の用っすか？」

飯田はへらりと笑って、長い前髪をかき上げた。ミコトはハラハラしながら見守った。

ふと背後を振り返ると、岩佐以外の全員が、わくわくした表情で見詰めている。ミコトはとても不愉快な気持ちになった。

「おまえのせいで、殴られたんだ」

若い作業員が飯田を睨みながら言った。

飯田はキョトンとして、作業員を見詰めた。

「二丁目のレンガ色のマンションの住人だ。『タクミ商会』って言えばわかるって言ってたぞ。おまえ、何やってんだよ！」

ミコトはハツとしてビワをつかんだまま動きを止めた。

『タクミ商会』……それはミコトが先日 先付け小切手をもらってしまった暴力団だ。田村という名前のこわもてに、羽交い絞めにされた恐怖は、今でも時々夢に出てきたりする。あの時軟禁された事を、飯田は上司に報告してなかったのだろうか？ いや、ひょっとして、先付け小切手の事も黙っているのでは？

ミコトは嫌な予感がした。

「ああ……あのヘタレ暴力団ね。別に何もしてねえよ。ただ、今朝いちばんで、送電停止予告の紙、手渡してきたけどな」

「それだけで殴るかよ。フツー！」怒りを露わにする作業員に、飯田がしれっとして言った。

「あそこのマンションは女社長とその愛人が住んでる。オレよりはイケてねえけど、そいつ、なかなかいい男だったろ？」

意味がわからず、作業員は目をぱちくりさせる。飯田が言った。

「オレのせいだとか言って、ホントにのぞいてたんじゃねえの？」

オ・マ・エ」

作業員の顔が真っ赤になった。一緒に来ていた配電課長も、飯田がわざとからかうような事を言ったのだと気付いたらしかった。さすがにヤバイと思ったのか、坂井課長が揉み手をせんばかりに笑みを浮かべて、飯田を自分の背後に押しやった。

「停止予告は、飯田の与えられた業務です。それについてお客様にやめろと文句をつけられても、こちらも困ってしまいます。情報を……暴力団関係の情報を流さなかったのは、うちの落ち度ですけど

……でも」

「うちだって、ただ殴られてきたわけじゃない！」配電課長は難しい顔で声を荒げた。

首をかしげる坂井に、配電課長は言った。

「支払い済みの領収証を見せられて、払ったにもかかわらず、電気を止めるつもりかって怒鳴られたそうだ」

坂井の温厚そうな顔が一気にこわばった。

「申し訳ないが……」坂井は苦しい表情で、絞り出すように言った。

「事実関係を確認させてくれないか」

配電課の作業員たちは、そろそろと課長の後について無言で料金課のフロアを出て行った。彼らが居なくなると、坂井は飯田を振り返った。

「飯田くん、ちょっと食堂へ行つて、二人でコーヒーを飲もうじゃないか」

飯田はじつと坂井の小さな目を見詰めていたが、やがて「へーい、ごちそうになります」と言つて彼についてフロアを出て行った。

島をはじめとする、反・飯田勢力の面々は、面白そうにヒソヒソと何かをささやきあつては声を殺して笑った。

ミコトは蒼白な顔で立ち尽くしていた。

自分の冒した失敗が、今頃になって大きな波紋を広げている。

血の気の無い顔で、ふらふらと料金課のフロアを出て行こうとするミコトの腕を、誰かがつかんだ。

「どこに行くつもり？」

振り返ると露崎めぐみが立っていた。

「食事にはまだちょっと時間、早いよ」

後から歩いて来た酒場ちづるがのほほんと言った。

出鼻をくじかれ、唇を噛みしめているミコトに、露崎が言った。

「もう、あんたの出る幕じゃあないよ。キッチンと上に報告をしてい



なかった、飯田の責任だ」

「でも……」言い淀むミコトの肩をポンと叩いて、酒場が言った。

「ここが飯田くんの……いや、坂井課長と飯田くんの正念場だよ」

「え？」ミコトは怪訝そうに酒場を見た。この二人も、もしかして反・飯田派だったのか？

「みんな、見てるよ……」露崎が低い声で言う。

ミコトは周りを見回した。誰も見ていない。みんな机に向かって仕事をしている。なんだか薄気味悪くなり、もの問いたげな表情を浮かべていると、酒場が、これまた低い声で言った。

「そう……こういう場面にこそ、新課長の力量がわかるってもんだよ。それから、飯田くんの実力もね。元・課長、石塚さんが、何故あんなに早く出世できたのか、坂井さんは石塚さんのようにうまく飯田を使えるのか……みんな、見てるんだよ」

怖い！　と思った。

組織の中で、上に立つ者に向けられる目は厳しい。無能と知れば、即座に部下は離れてゆく。

ミコトは軟禁されたときの飯田の落ち着き払った態度を思い出した。暴力団相手に彼は言った。

当社は規定どおりに手続きを進めさせていただきます。

ミコトが小切手を受け取ってしまった為に、事実上小切手の日付まで延伸したわけだが、電気を止めるためには必ず踏まなくてはならない手続きがある。督促状を送ったり、予告状を手渡ししたり。

「飯田さんは、小切手が不渡りになったらすぐに電気を止められるように手続きをしているのか」

ミコトの言葉に、露崎は頷いたが、茶色く描いた眉をちょっとひそめた。

「でも、本当は払ってないとはいえ、領収書を持っている人に対して、督促状や予告状を置いてくるのは、マズイよね。」

「飯田くん、何か勝算があるのかなあ？」酒場も首をかしげた。

「パチンコしてて、フィーバー中に電気切れたら、露崎さんはどう

します？」

ミコトの問いかけに、そうね……と、露崎は赤い唇の端を上げた。「パチンコ屋の店長を殴り倒して、それから帝都電力を訴える」

なんだか露崎が、あの女社長に見えてきて、ミコトは眩暈を感じた。

冗談よ！ と笑う酒場の声など耳に入らず、ミコトは放心状態で自分の席に戻って行った。

何だか胃のあたりが重かった。

昼休みだというのに、ミコトは昼食も取らずにふらふらと屋上への階段を上って行った。

外の風に当たろうと思い、重い鉄扉を開けると、眩しい五月の日差しに目が眩んだ。

手をかざしてぐると屋上を見渡すと、日当たりの良いフェンスを背にして男性が胡坐を掻いている。紺のつなぎの作業服は、配電課の人間だ。

男性はミコトのほうを振り向いて、気弱そうな笑みを浮かべ、ちょこつと会釈した。

ミコトも黙って頭を下げる。

男性の胸には黄色の縫いとりで『野口』とネームが入っていた。

配電課の野口は、料金課の先輩で入社五年目の岩佐と同期だ。二人は結構仲が良く、一緒にいるところを何度も見かけた。

野口は手にしたボロ布で、作業員用の黒革の半長靴を手入れしていた。彼のまわりには、感電防止の施された作業用手袋やヘルメット、工具一式が広げられている。日向ぼっこで靴磨きとは、少々変わったいるなと思った。

ミコトが突っ立ったまま興味深げに眺めていると、野口がチラリとこちらを見て言った。

「キミも作業靴、手入れしたほうがいいよ。泥だらけだ」

ミコトは自分の足元を見た。運動靴はネコフンを踏んで以来履い

ていない。ミコトの足元も、野口と同じ作業員用の黒革の半長靴だった。野口は余ったボロ布をミコトに放り投げた。

「あ……ありがとうございます」

ミコトは野口の隣に腰を下ろすと、靴を脱いで乾いた泥をボロ布を使ってこそげ落とした。

野口は何も言わず黙々と作業を続けている。何か話さなくちゃいけないかな、と思い口を開け閉めするミコトに、野口が言った。

「今ときは、第一印象が大切っていうか……。ほら、キレイな家が多いでしょう？ 汚れた靴で訪問すると、嫌がられたりする」

「ああ……」確かにそうかもしれない、とミコトは目からウロコだった。

「それに、ボクらの場合はキッチンと手入れしておかないと命取りになる」

「え？」ミコトは野口の日に焼けた、真面目そうな横顔を見た。

「この靴や手袋は、感電防止の絶縁仕様になっている。でも、もしも穴が開いていたりしたら、そこから電気が通ってしまうから、意味がないんだ。日頃の手入れが大切なんだ」

そういつて、野口はまた単調な作業に戻った。

「でも、入社して以来、道具類の手入れをしている人、見たことないですけど？」

「うん。はつきり言っただ面倒くさいから、みんなやらないみたいだね。ボクはいつも後輩に手入れするように言ってるんだけど……」。

今どきの新人は、人の言うこと、あまり聞かないから……」

言っってしまったから、野口は あ…… という表情をした。目の前にも「今どきの新人」が居ることに気付いたようだ。

「あ…… キミの事じゃないよ。うちの課の若いヤツの事だよ。今日も殴られて帰ってきて。ハラハラするような物言いをするヤツだから、きつと相手の気分を害してしまったのかもしれない」

野口は「余計なこと言っちゃった」と、小声でつぶやいて道具を片付け始めた。

ミコトは言った。

「殴られた人は、運が悪かったんですよ。相手が暴力団だったから。それに……飯田さんの名前も出てたし。なんか、ワケアリっていうか……」

「そうかもね。ボクも聞いたよ。飯田のせいで殴られたって。でも、飯田のせいかもしれないけど……そうじゃないかもしれない」

ミコトは手際よく片づけをする野口の手元を見詰めていた。野口はミコトの視線に気付き、自嘲気味に言った。

「肝心なアドバイスは聞く耳持たなくせに、そういう事だけは、良く知りもせず誰かの言葉を鵜呑みにする。なんか、ヘンだと思わない？」

野口はミコトの顔を見て、目だけで微笑むと、ピカピカになった半長靴を履いた。ミコトは慌てて立ち上がると、お礼を言つてボロ布を返そうとした。野口は「また使いなよ」と言つて、道具一式を抱えて屋上から出て行つた。

野口との会話は、何だかいつまでもミコトの胸の中に残っていた。やわらかい言い方だったが、そこには仕事に対する、真面目な姿勢と、社会人としての厳しい目があった。

「うちの係にも、野口さんみたいな人が居ればいいのに」

ミコトは自分の部署のメンバーを思い浮かべた。ミコトの失敗を指さして笑い、飯田のトラブルを面白そうにウワサする人たち。

昼休みの休憩時間も終わりだった。

「飯田さん、あの後どうなったのかな」

ミコトはボロ布を手にも、屋上を後にした。

自席に着くなり、ミコトは飯田に呼ばれた。

「篠原、今日からお前が入金、行つてこい」

「ええっ！ 今日から……毎日、ですか？」

ミコトは眉をひそめた。収入になった現金は、極力手元に置かないのが厳正管理のルールだ。面倒な事だといつも思っていたが、仕

方が無い。入金を担当になると、午後二時までに集まった金を合計して、銀行の窓口に預けに行くのだ。この仕事は、大抵飯田がやっていた。仕事の早い飯田だからこそ、毎日やれるのだとミコトは気付いた。昼抜きで頑張つて、やっと四時ごろに帰社しているペースの自分が、二時の入金までに帰ってくるなど、地球がひっくり返つたつて無理に決まっている。

「飯田さん、無理つすよ！　ぜーったい、無理！」

飯田は形の良い眉をピクリと動かした。切れ長の目がゆっくりと動いて、ミコトを見据えた。

「無理じゃねえよ。やれつつつてんだよ！」

何だか物凄く不機嫌そうだった。迫力のある飯田の目つきに圧倒され、小声で「わかりました」と言うと、ミコトは車のキーを取りに行くために腰を浮かせた。追いかけるように飯田が怒鳴った。

「営業窓口の女の子も一緒に行くから、声をかけてやれ」

なんで、他係の人なんか？

口に出そうになった時、刺すような視線を感じた。チラリと目を上げると、書類トレイの隙間から、飯田が眼光鋭い睨みを利かせている。これ以上文句を言ったら、タダでは済まなそうな気配だった。ミコトは慌てて金を集計し、逃げるようにフロアを出た。

現金の入ったジュラルミンの手提げカバンを抱えて一階の営業課に顔を出すと、いきなり上条ありさに背中を思いつき叩かれた。

「痛いなあつ、何するんだよ！」

「それは、こちらのセリフです！」

人を叩いておきながら、お嬢さまはふくれっ面でミコトを睨みつけた。見ると彼女も同じようなジュラルミンの手提げを持っている。どつして、ミコちゃんなのよ」

「はあ？」ミコトは怒るのも忘れて首をかしげた。意味がわからない。

上条ありさは、次第に涙目になり、ガツクリと肩を落とした。哀愁

漂うメロディーが聴こえてきそうな様子に、ミコトはうんざりした声で訊いた。

「いったい、何なの？」

「私、今日初めて入金行く事になって、朝からずーっと、飯田さんとのラブラブ入金デートを楽しみにしていたのに」

今度はミコトがガツクリと肩を落とした。こっちだって、上条ありさでは願い下げだ。

飯田に「毎日の入金」という、ミコトにとって非常に理不尽な業務を押し付けられ、プリプリしていたとき、岩佐が彼にそつと耳打ちしたのだ。

「篠原、そう嫌なモンでもないさ。営業課の入金担当は、事業所一の美人、窪田圭子くぼた けいこさんだぞ」

「ええ！」ミコトは胸がドキドキした。

憧れの先輩、窪田圭子さん。新入社員で、初めてこの事業所に来たとき、彼女が一番窓口で接客をしていた。今どきカラーリングしていない真っ直ぐな黒髪、長い睫毛と大きな瞳、まるで日本人形のように美しくそして儚げな印象は、ミコトのハートを一瞬にして虜にしたのだった。

今、この時代の日本女性の中に、彼女のようなしとやかな乙女が存在する事自体が、奇跡だ。

「いらっしやいませ」

鈴を転がすような声で言われ、ミコトは腰が抜けるか思うほどに、動揺してしまったのを思い出す。それ以来、ミコトは一階のフロアに行くたびに、彼女の姿を見ることを密かな楽しみにしていたのだ。「あーん、飯田さんじゃなきゃ、いやーよー。私、ミコたんと同じや、行かないモン」

ムカツクほどに甘えた言い方で、上条ありさはゴネまくる。しかも、どさくさに紛れて「ミコたん」って……なんだよっ！

ミコトはホトホト嫌になってきた。

「オレだって、窪田さんだとばかり思っていたのに……」

ミコトはハツとして口を押さえた。上条ありさがミコトの顔を見て、にんまりと笑っている。目が三日月型だ。

「と、とにかく、時間が無いから。嫌なら一人で行けよな」ミコトはしどろもどろになりながら、クルリとありさに背を向けた。

すると、男性の声で叱られた。

「今日、うちの制服の人間が殴られたばかりだぞ。女性を一人で行かせるわけにいかないでしょう」

振り返ると、苦虫を噛み潰したような顔で坂井課長が立っていた。飯田とお茶を飲みに行った後、二人の間の話はどうなったのだろうか。ミコトは何気ないそぶりで尋ねた。

「殴られた配電の人は、飯田さんがどうのって、言っていましたけど。そういえば、どうなったんですか？」

「キミには関係の無い事でしょ。さっさと入金に行きなさい。銀行が閉まってしまいますよ」

不機嫌な言葉に眉根を寄せつつ、ミコトは頭を下げると駐車場へ向かった。今の坂井の言い方では、飯田は小切手に関するミコトの失敗を隠し続けているようだ。彼は、あくまでも自分一人で何とかする気なのだと思付いた。

「ねえ、やっぱり飯田さんが何かへまをやらかしてしまったのぉ？」背後から甘ったれた言い方で声をかけられ、ミコトは振り返るなりキツと上条ありさを睨みつけた。へまをしたのは飯田ではなく自分なのに、このままではみんなに誤解を招く。

ミコトは仕方なく、銀行に向かう車の中で、ありさに、自分の失敗から飯田が窮地に立たされていることを白状した。

「ふーん、何だか難しくて、よくわかんないけどおー、がんばってね」

ありさの気の抜けるような反応に、言わなきゃ良かった、と後悔しながらミコトは銀行の駐車場に車を停めた。

午後三時前の銀行は、かなり混雑していた。順番待ちの札を取つてくると、上条ありさはちゃっかりソファに腰掛けて、備え付けの

ファッション雑誌をめくっていた。お嬢さまは、どこに居てもマイペースなのだ。

「明日来るときは、読みたい雑誌を持って来ようつと」

やはり、明日の入金もお前か！ ミコトはがっかりとうなだれて、ありさの隣に腰を下ろした。

「こんなに混んでいたら、飯田さんとたくさんお話出来たのになあ」  
ため息と共に力チンとくる台詞を再び吐く上条ありさを睨んだとき、誰かに声をかけられた。

「篠原さん、こんにちは」

声の方を振り返ると、艶のある黒のビジネススーツを着た男性が、にこやかに微笑んでいた。

「あ、ニワ トリオさんの息子さん」

「その節はどうも」

ミコトが現場で救急車を呼んで助けてあげた、ニワ トリオの息子の丹羽鳥彦だった。

「父が先週退院したんです。見違えるように元気になったので、近いうちに篠原さんに改めて御礼を言いに伺おうと話していたところだったんですよ」

「そんな、何度もいいですよ」

照れ隠しに頭を掻くミコトに、丹羽鳥彦はそうだ、と何か思いついたように内ポケットの中に手をつ込むと、数枚のチケットを取り出した。彼はミコトの手にそれを押し付けながら、ニコニコと言った。

「今度うちのお店に遊びにきてください。カウンターでそれを出していただければ、一枚につきドル箱を一箱サービスしますから」

よくわからず「いったい何だろう」と、ミコトがチケットをしげしげと眺めている間に、丹羽はサッと席を立ち、それじゃ！ と爽やかに去って行ってしまった。

「ねえ、ミコりん。今の人だあれ？」

隣で雑誌を読んでいたはずのありさが、興味津々で訊ねた。しか



も呼び方がまたまた進化を遂げている。何だよ「ミコりん」って！  
「この前窓口に来たじゃないか。確かあの人、パチンコ屋の店長さんだっけ」

「ステキな人ね」

ふーん、とミコトはありさを横目で見た。飯田にしろ、丹羽鳥彦にしろ、どうやらスリムで長身なのが好ましい。自分が彼女のストライクゾーンから外れていて良かった、とホッとしつつ入金を終えると、ミコトは急いで会社に戻った。

自席に戻るなり、岩佐に肩をつかまれて、ミコトは目をぱちくりさせた。

「岩佐さん？」

岩佐は注意深く周りを見回すと、ミコトの耳元でささやいた。

「ちよつと話がある。屋上に来い」

先に行っているぞ、と言い、岩佐はフロアを出て行った。

屋上に上がると、夕方の逆光の中に二つのシルエットがあった。

飯田と岩佐がこちらに背を向けてフェンスにもたれかかっている。

飯田はタバコを吸っていた。

「話ってなんでしようか？」

近づいていくと、飯田が岩佐に向かって声を荒げた。

「ちよつと、岩佐さん。コイツ呼んで、どうするつもりですか。使えねえヤツはいらないんだよ！」

登場するなりあんまりなセリフを言われ、ミコトは何だか悲しくなってきた。

岩佐が穏やかな声で諭すように話しかけた。

「タクミ商会のことはあきらめろ。課長がああ調子ではいくらお前が頑張ったって、限度がある。万が一、事が大きくなっても、坂井課長はお前をかばっちゃくれない。あの人凡人だ。前・課長の石塚さんとは違う」

「岩佐さん、もう放っておいてくれ。オレは何が何でもタクミ商会

に支払いをさせる。払わなきゃ、オレが柱に登っても電気切ってる！」

言うなり、飯田はタバコを投げ捨てると、履いていたビーチサンダルで踏みつけた。

「一度甘い顔したら、もうダメなんだぜ。カッコつけるわけじゃねえけど、暴力団には屈しないのが、取立て屋ん時からのオレのポリシーだ」

屋上を去る間際、くるりと振り返って飯田がバカにしたように笑った。

「タクミ商会は他にもたくさん支店を持っている。他の事業所と足並みを揃えないと、後々までやりにくくなるんだぜ……って、腰抜け課長に言っといてくれないかな。センパイ」

ドカンと扉を乱暴に蹴り開けて、飯田の姿が消えた。

「あの〜」

心配顔で立ち尽くす岩佐に向かって、ミコトは声をかけた。岩佐が力なく笑ってミコトに向き直った。

「呼び出してゴメン。もう、いいんだ」

「いったい何があったんですか？」

岩佐はため息をつくと言った。

「飯田の持ち分で、パチンコ屋の『タクミ商会』って知ってるよね。それが、どうやら不渡りを出したようで」

「やっぱり！」

え？ という表情で、ミコトを見詰めて岩佐が尋ねた。

「うちの管轄の事じゃないんだけど、篠原、知ってるの？」

今度はミコトが「え？」と聞き返した。

「うちの隣で、K市を担当する事業所の管轄内のことなんだけどね」岩佐は難しい顔で説明した。暴力団、タクミ商会の経営する風俗店は、隣のK市にも五口ほど契約があるらしい。そこで、やはり同じように先付け小切手をつかまされた担当者がおり、強気な上司の元、不渡りになった時点で送電停止を強行したところ、配電の現場

作業員と暴力団の何人かが小競り合いをおこし、流血沙汰になったらしい。

「それを聞いた坂井課長がビビッちまってさ。そこに、今朝の配電の担当者が殴られた事件があったものだから、課長は飯田を担当から外して、穏便な解決策を模索する、とか言い出したらしくて」

暴力団と取引なんか、しねえよ

タクミ商会の事務所で軟禁されたときの飯田のタン力がミコトの脳裏をよぎった。

「それでね、飯田と坂井課長はとことんやりあっちゃったらしいんだよ。そうしたら、ほらアイツ最近、忙しいだろ？ 債権回収率や個人の成績が落ち込んでることを課長につつかれて……」

あ……ミコトは口に手をやった。

「オレのせいだ。飯田さん、オレのこと面倒見てくれてるから、自分の仕事溜まっちゃってて、それで」ミコトはうなだれた。

「うん、篠原本人がわかってるなら、言い易いから言うけど、オレたちで課長の所に詫びを入れに行こうと思ってたんだ。……飯田本人も連れてね。ところがアイツはあの調子でさ……」

お手上げという仕草で、屋上から立ち去ろうとする岩佐に、ミコトは、今が全部を話す時だと決心した。

「先付けつかまされて、領収証切ったの、オレなんです」

くるりと振り返った岩佐が、コクンと頷いた。

「わかってたよ。飯田は何も言わないけど、四枚領収証の控えが見当たらなくて、探したらタクミ商会の名義でキミの印鑑が押してあるのが出てきた」

「その後、飯田さん すぐに取り返しに行ったんだけど、オレがドジを踏んだせいで事務所に二人して軟禁されちゃって」

「ええ！」岩佐が目丸くして叫んだ。

「軟禁って……。どうしてそんなことがあったの、黙っていたの？」  
どうして黙っていたのか、ミコト自身にもわからない。たぶんあまりにも飯田が平然と対応していたせいで、日常茶飯事なんだろう

と、勘違いしてしまったのかもしれない。

「アイツ、マジで危ない橋渡ってやがる。やっぱり石塚さんに相談するしかないか」

「石塚さんって、元課長の？」

ミコトの問いかけに、岩佐は硬い表情で頷いた。

「飯田はあの人の言う事なら聞くから。今は本店の債権確保部門のトップにいる」

坂井課長を差し置いて、他所の上司に直談判など、いいのだろうか……？ 疑問に思いつつも、そもその原因である自分が口出しするべき事でないのは良くわかっていたので、ミコトは口をつぐんでいた。ただ、今更とは思ったが、岩佐に尋ねてみた。

「あのお、岩佐さん。小切手の件、オレのミスだって事、坂井課長に報告しておいた方がいいですか？」

岩佐は首を横に振ると、目を伏せた。

「いや、言わなくていいよ。たぶん課長も知ってると思うよ。あえて言えば、飯田に言わされたんだと勘違いされて、また彼の立場が悪くなる。後輩に言い訳をさせて……とか、なんとかね」

ハア……とミコトはため息をついた。

「なんか、手伝える事、ないですか？」

無いね、とあっさり言われ、シュンとしていると、岩佐が飯田のようにミコトのネコツ毛頭をポンポンと軽く叩いた。

「仕事では篠原に出来る事は無いけど、飯田はあの通りの性格だから、気を使わずにしゃべれる相手は少ないんだ。力になれなくても、話を聞いてやってよ」

本当にそんな事くらいしか出来ない自分を情けなく思いながら、ミコトは岩佐に向かって小さく微笑んだ。

「飯田さん、今日飲みに行きませんか？」

終業時刻もとくに過ぎ、料金課のフロアにはいつものメンバーだけが残っていた。飯田とミコト、それに夜間集金の業務を専門に

している委託員のおじさんだ。

「悪いが、金、無えんだ。それに仕事もある」

あっさりとは断られ、一瞬諦めかけたが、こんな事では本当の役立たずだと思い直し、ミコトはもう一度声をかけた。

「金はいいいです。この間、ほらイベントの時ご馳走になったから、今日はおごりです」

飯田はチラリとミコトの顔を見ただけで、また視線を手元の書類に戻すと小声で言った。

「サンキューな。気持ちだけ、ご馳走になっておくよ」

ミコトは大きな瞳をいつそう見開いて、まじまじと飯田の整った顔をみつめた。こんなふうに言われるとは思わなかった。もうこれ以上しつこく誘えなくなってしまうた。

所詮役立たずだった、と反省しつつ机の上を片付け始めると、数枚の紙切れが引き出しから出てきた。

「あ……丹羽さんにもらったパチンコのチケットか。こんなの要らないよ、どうせなら景品のチョコレートの方が良かったな」

ブツブツつぶやいていると、ふと視線を感じた。目を上げると、

飯田が書類トレイの陰からじつとミコトの手元を見ている。

何だか飯田の目つきがいつもと違うような？ ミコトは恐る恐る尋ねた。

「もしかしてコレ、欲しいですか？」

飯田はハツとしたように目を背けたが、どうやら図星だったようだ。信じられないぐらいに赤面している。すると、委託集金員のおじさんがニコニコ声をかけてきた。

「飯田くん、パチンコ得意だもんね。行ったらまたタバコとってきてよ」

飲みには行かないけど、これなら行くかもしれない。

ミコトはニコリ笑ってチケットを差し出した。

「あの、コレどうぞ。実はオレ、パチンコやったことなくて。でも前から一度やってみたかったんですね。もしよかったら一緒に行

つてくれませんか？」

飯田は顔を赤らめてチケットとミコトを交互に見ていたが、「しよーがねえな」と言つて机を片付け始めた。

何をやらしてもソツの無い飯田の才能は、こんな所にも花開いていた。あつという間に足元にドル箱を積み上げる飯田を見詰めて、ミコトはあっけに取られていた。

「ここんとこ忙しくて、ゼンゼンやってなかったからな。この新台おもしれえな」

持ち玉もすっかり底をつき、それでもさっぱり出ないミコトは、つまらなくなり、すでに閉店終了状態で飯田の隣に座っていた。

「やあ、早速遊びに来てくれたんですか！」

丹羽店長がボンとミコトの肩を叩いた。初めて声を聞いた時は、地声のでかい人だと思つたが、職業柄、自然と大きな声になつてしまうのも頷けた。この騒々しい中に一日中いるのだから仕方が無い。「ボクは出ませんでしたけど、先輩が出たので奢ってもらうんです」

ニコニコ笑うミコトに、飯田は「そんな事言つてない」といいたげな顔で一瞥をくれた。

「お友達を誘つてまた来てくださいよ。今度は出血大サービスデいのダイレクトメール送りますから」

ははは……と苦笑いのミコトに、店長は頭を掻きながら言つた。

「ライバルのパチンコ店が次々と新台入れ替えるものだから、なかなかお客が固定しなくて。まったくグランドホールさんは羽振りがいいこと。駅前に新店舗を出すらしいし……」

「なに？」飯田が凄い目つきで振り返つた。

何事かと問いかけるミコトを無視して、飯田は丹羽店長に詰め寄つた。

「グランドホールの新店舗って、本当か？」

「え、ええ。本当です」

「いつオープンか知ってるか？」飯田の迫力に、丹羽店長はビク

りしながら答えた。

「来月の八日です。末広がりで大安吉日ですから」

連チャンモードもストツプしたので、飯田は積み上がったドル箱を換金すると、早々にパチンコ屋を出た。丹羽店長と話してから、難しい顔をして押し黙っていたが、ミコトの腹の虫が鳴いたのを聞くと、飯田はフツと表情を弛めた。

「久々に遊んだし、たくさん出てストレス解消になったから、メシ食いに行こうぜ。何でも奢ってやるよ」

「チョコレートたくさんもらった上に、メシまでいいの？」大きな瞳をキラキラさせるミコトのネコツ毛頭を軽く撫でると、飯田は「ついてこい」というように長い足で大股に歩き出した。

焼肉屋で食べまくり、その隣の居酒屋で飲みまくったミコトは、へロへロになっていた。こんなに飲んだのは、大学の卒業コンパ以来だ。真っ直ぐに歩けない。

「おい、ミコト！ もう一軒行くぞ！」

やはり、昼間の事が尾を引いているのか、飯田もいつになく大量に飲んで酔っ払っていた。ただし、飯田は飲んでも仕事のグチをこぼしたり、訳もなく絡んだりするタイプでは無いらしかった。それどころか、人格が変わったように明るく楽しい酔っ払いだった事に、ミコトはビックリした。

「飯田さん、もうオレ、飲めましえん」

ふらつく足元で、しなだれかかったミコトに、飯田は極上の笑みを見せたかと思うと、いきなり近くの道路標識に走って行った。

明るい酔っ払いは、古くからのジャイアンツファンらしく、ポールに片手を巻きつけてくると回りながらタツノリのテーマを大声で歌いだした。

ミコトが近寄ってゆくと、飯田は歌いながらスキップ状態で先に行ってしまう。

「飯田さ〜ん、待ってえ〜」

上条ありさのようなしゃべり方をしている事に気付かぬまま、ミコトは帰ればいいのに懸命に飯田の後について行った。

「それゆけタツノリ」 原監督サイコー！ オレの上司はサイテー！」

飯田は歩道橋の上から通り過ぎる車に向かって大声で叫んでいる。ようやく追いついたミコトに、不敵な笑みを見せ、飯田は言い放った。

「アメリカはテロに屈しない！ オレは暴力団に屈しない！ わははは」

乱心の飯田を見て、ミコトの酔いが少しだけ醒めた。ミコトは飯田の背中を押すようにして歩道橋を渡り切ると、階段に座り込む飯田を乗せる為に、通りを流すタクシーに向かって手を振った。

タクシーの後部シートに乗り込むと、飯田はミコトの肩にもたれて居眠りを始めた。

なんだかんだ言っても、彼は、根は真面目な人間なのだ。だから毎日遅くまで一人でも頑張っているのだ。本音を言くとサラリーマンなんて、言われた事だけやっていればいいと思っていた。確かにそれでも給料をもらえて、うまくやっていけるだろう。現にそういう人はたくさん居る。だけど、それじゃあきつと人生つまらないし、もらった給料にもありがたみが無いような気がする。

ミコトはいつも飯田が自分にするように、彼の長髪ヘアをくしゃっと撫でた。

ミコトの肩にもたれていた飯田が、少し身じろぎをしてボソリと言った。

「オレはなんだかんだで、やりたいようにやってるけど、お前はまだ新人だ。有名一流大学卒で、将来もある。だから……」

何を言いたいのだろう？

首をかしげるミコトの耳元に、飯田は吐息と共にささやいた。

「もつ……オレにかまうな」



## V S 暴力団！・・・それぞれの思惑

\*

それから数日間は何事もなく過ぎた。毎日二時の入金もなんとかなし、ゴールデンウィーク明けの忙しさも一段落といったところだった。

とことん言い争ったと聞いていたが、坂井課長と飯田は、少なくとも表面上は穏やかな雰囲気で、必要なとき必要な事をキチンと話していた。そういうところが、良くも悪くも「大人」というものなのだろう。

そういえばオマケのような事だが、この数日間でミコトはおつとり不思議系お嬢さまの正体を知り、見る目が変わりつつあった。見た目のポヤンとした印象とは180度違って、上条ありさはかなりの切れ者で、しかも情報収集の達人だったのだ。まあ、その「情報」というのが、ミコトにとってはほとんど不要のものばかりだったが。

「課の　さんと　課長が不倫してるのよ！」などなど。

午後二時、銀行のお客様フロアでソファにもたれて居眠りをしてるミコトに向かって、上条ありさが話しかけた。

「ちよっとミコりん、知ってた？」

どうやらミコトの呼び名は「ミコりん」に落ち着いたようだった。「なに？」眠たげに片目だけを開けてありさを見たミコトに、彼女は久々の特ダネを吹き込んだ。

「私たち、夏に異動になるらしいよ」

「ええ？」まさに、寝耳に水とはこの事だ。

春に今の事業所に配属になったばかりで、もう夏に転勤とは、一体どういう事なのだろう。しかめっ面で眉根を寄せるミコトに、ありさは説明した。

「本店の方針でね、大学卒の新入社員を対象に幹部候補を育てるべく、教育が施されるんだって。私たち、三ヶ月間接客業務をやったら、次の三ヶ月は支店の管理部門に行くらしいよ」

「なんで？　せつかく仕事に慣れて、これからって時に？」

聞かなきゃ良かったと思った。

お前はまだ新人だ。有名一流大学卒で、将来もある。

「ちくしょー！」

ミコトは飯田の言葉を噛みしめた。彼がこの情報を知っていたとは思えないが、ミコトと自分の立場は違うのだと飯田は初めから承知していたのだろう。こんなに早く居なくなるとは思っていなかったにしても、ミコトにはいずれ上に行くルートが開かれているという事を、暗に示唆していたのだ。

「だからって、オレのぶんまで失敗の尻拭いをする必要は無いのに」  
ミコトは銀行の壁にかかったカレンダーを見た。七月初旬の異動シーズンまでは、残す所一ヶ月半。サラリーマンゆえのつらい所で、人事異動を覆すことは出来ない。せめて、自分の失敗だけは　やはり自分の手で片付けなければ、社会人として納得がいかない。ミコトはぎゅっと拳を握り締めた。

銀行から帰って、自分のフロアに入ってゆくと、集金担当の社員が全員そろって坂井課長の席を囲んでいた。ただ一人、背の高い飯田の姿が見えない。なにやら不穏な空気が漂っていた。

そろそろと自席に座って様子を伺うミコトに、背後から女性の声がささやいた。

「タクミ商会、とうとう不渡り確定したわよ」

振り向くと、デスクの陰に隠れるようにして露崎がしゃがんでミコトを見上げていた。

ミコトは腕時計の日付を確認した。

「それで、あの騒ぎ？」　チラリと課長の席に目をやるミコトに、目だけで頷いて、露崎が早口に言った。

「それで、飯田が飛び出していった……たぶん、女社長のところだ  
と思うけど。後を追いかけてよとした岩佐を課長が引き留めた為  
あの騒ぎ」

「ええっ？ 飯田さんを一人で行かせたんですか？」

信じられない、と声を上ずらせるニコトを、シーと黙らせて、露  
崎が聞き耳を立てた。

「予告も済んでいるのですから、即、停止するべきです！」珍しく  
岩佐が食い下がっていた。黙っている坂井に対して、さらに言い募  
る。

「とにかく、アイツを放っておくわけにはいきません。連れ戻して  
来ます」

「落ち着きなさい、岩佐くん。一緒に行って、キミにも何かあった  
らどうする気だ」チエックのハンカチで、額の汗を拭きながら坂井  
がもそもそと言う。

「じゃあ飯田なら何があってもいいんですか？」岩佐が声を張り上  
げた。

「そうじゃないが、飯田はあの女社長と懇意にしている。アイツな  
らたぶん……」

曖昧に語尾を濁す坂井に、とうとう岩佐は遠慮の無い言い方にな  
って怒鳴った。

「課長は何もわかっていない！ この前、領収書を回収しようとし  
て、飯田と篠原がタクミ商会の事務所に軟禁されたんだぞ！」

「ええっ！」坂井の小さな目が大きく見開かれた。

「それに、飯田の足。アイツ、現場でドーベルマンに噛まれたのに、  
労災申請しなかったのは、どうせ言ったって課長は自分の事を部下  
だと思っけないからって……」

坂井は口をつぐんだまま、岩佐の顔を見詰めているようだった。  
しかし、その小さな目は何か違うものを見ているような感じだった。  
「あの、勘違いしないでください。飯田がそんな事、口に出したわ  
けではありません。でも、はたから見えてわかりますよ。アイツ

は確かに勝手な事をしすぎるし、手に負えないくらい態度も最悪です。でも、彼は……」

岩佐は一瞬、躊躇うかのように言葉を飲み込んで、やがて静かな声で言った。

「すでに辞表を出しているからって、今月いっぱいにはあなたの部下なんですよ」

「じ、辞表！」

ミコトは思わず大声を上げて立ち上がった。

課長の周りに集まっていた社員たちは、一瞬ミコトのほうを振り返ったが、すぐに岩佐と課長のほうに注意を戻した。

「もう一度言います。即、停止作業を配電の作業グループへ要請してください。予告をしたのに止めなければ、ナメられるだけだ。それに、すでにバカにされているも同然の情報を飯田から聞いたですよ」

ミコトは露崎の方を振り向いた。

「飯田さんの情報って？」

「駅前に新しくタクミ商会のパチンコ店がオープンするのよ。新店舗をオープンする金は有るのに、電気代を払わないじゃ、どうせ強行手段など有りはしないって、バカにされてるようなものでしょ、それはそうだが……。」

「でも、どうして配電の作業グループが関係あるんですか？」

何も知らないのね、と半ば呆れたように露崎はため息をついた。

「工場や業務用のビルなんかは、家庭用の百や二百ボルトの電気と違って六千ボルトで供給されているの。そんなのをむやみに引っこ抜くわけにいかないでしょうが！」

「あ、そうか」

その場合の送電停止は開閉器作業かいへいき さぎょうといって、おおもとの設備の部分から遮断する方法を用いる事が多い。その開閉器を扱う為には特別な資格が必要で、配電課の作業員に限られているのだ。

「配電課長がOKするとは思えない。K市の事業所の停止作業時の

トラブルはまだ記憶に新しいし、この間、うちの事業所の若い作業員が殴られた件もある。配電課の作業担当者たちも、予定されていない作業などに協力する気はないだろう」

薄くなつた髪の上に汗の粒を浮かせて、坂井はハンカチを握りしめたまま言った。

「それを何とかするのが課長の仕事でしょう！」

声のトーンを上げその言葉を言ったのは、岩佐ではなく、なんといつも冷静な島だった。

「今回ばかりはボクも岩佐と同意見です。たとえK事業所と同じく流血沙汰になつても、やるべき事はやらないと」

ミコトは目をパチクリさせて相撲取りのような島を見詰めた。露崎が、ミコトの背後でクスツと笑つてつぶやいた。

「面白くなつてきた」

詰め寄る部下に囲まれて、坂井が無意識に額の汗を拭ったとき、荒々しい足音を響かせて飯田が帰ってきた。

「飯田！ 大丈夫だったのか！」

興奮状態で顔を真っ赤にして駆け寄つた岩佐に、飯田は吐き捨てるように言った。

「あの女、留守だった。ひよつとすると事務所も移転するつもりかもしれない」

「どういうことだ？」島が聞き返すと、飯田が難しい顔で言った。

「あたらしくオープンするパチンコ店、グラントホールの登記簿は、タクミ商会ではなかった。ただ、あの女の名前は出てたから、名前を変えてまた新規で契約を興すつもりだ」

「なぜ、そんなことを？」他の男子社員が尋ねた。

「タクミ商会の名前は、大抵の取引先のブラックリストに載ってる。だけど、新しい店舗は別物よ、とでも言いたいんだらう。よくある手だ」

島が坂井に向き直つて言った。

「もはや考えている時間はありませんよ。早速パチンコ屋の電気、止めましょう」

え？　と言う顔で島を見た飯田に、岩佐が笑いかけた。

「料金課の担当者の意見は、今島さんが言ったとおりにとまとまっている。お前、一人で頑張らなくていいんだからな」

自分が居ない間に、妙な風向きになっており、飯田は何と言ってよいかわからない様子でメンバー全員をぐるりと見渡した。

「ダメもとで、配電課に行つて来る」

すっかり蚊帳の外の坂井課長が、観念したように、ようやく重い腰を上げたときには、午後四時を回っていた。

坂井について、島と岩佐が配電課長のところに行つてしまうと、ミコトは飯田のそばに駆け寄った。

「飯田さん、あの……」声をかけたものの、何からしゃべればいいのかわからない。

こめかみに汗の粒を浮かべて蒼ざめるミコトに、飯田は思いがけず優しく返事をした。

「なんだよ、泣きそうじゃねえか。……にしても、みんなどうしちゃったんだ？　島さんなんか、見たこともないくらい熱くなってるさ」  
「あんたの仕事に対する熱意に、みんな心を動かされたんじゃないの？」

露崎がからかうように笑いを含んだ声で言った。

「なんだそりゃ？」肩をすくめる飯田に、ミコトは涙目で言った。

「責任をとつて、辞表を提出したつて、嘘ですよね？」

飯田は切れ長の瞳を大きく見開いたが、何も言わずクルリと背を向けると、自席に戻つて分厚いファイルをめくり始めた。

メガネを外して目元を拭っているミコトに、露崎がささやいた。

「さあて、これからよ。夕方のパチンコ屋の電気を止めるなんて事、本当にあの腰抜け課長どもに出来るのかしらね」

いつの間にそばに来ていたのか、酒場が楽しそうに言った。

「営業妨害だとか言っつて、ひどい事にならなきゃいいね。そういう場合、パチンコ屋としては、お客さんになんて言い訳するのかしら？」

酒場の言葉に、ミコトは頭の中で何かがひらめいた。こんな自分にも、飯田の為に出来る事があるかもしれない！

「露崎さん、ボクちよつと現場行つてきます！」

あつけに取られている露崎と酒場に見送られ、ミコトは勢い良くフロアを飛び出して行つた。

一階の配電課フロアでは、課長同士がもめにもめていた。

「部下の安全が保証されない限り、うちの作業員は現場には行かせない」

ハゲ頭から湯気を噴かんばかりに、配電課長は声を荒げた。

「ですから、Ｙ警察署のかたも、任意で立ち会つてくれるつて事になつたんですよ」

一方、温厚そうな坂井課長も、今回は一步も引かない様子だつた。部下の手前、二人とも引くに引けない微妙な均衡状態が続く。坂井の広くなつた額に脂汗が浮き始めた。配電課長が脅すように声を低くして言つた。

「相手は暴力団なんだぞ。おまわりさんが一人来てくれたからつて、刃物や拳銃でも出されたら、それこそ死人が出るぞ！」

「作業員の安全は、出来る限りうちの部下がフォローしますから、時間が無いんですよ。お願いします」そう言いながら、坂井はがっくりと跪いた。激しい動悸と眩暈を感じて、立つて居られなくなつたのだ。

急に周囲がざわついた。

坂井は、この間の健康診断で、生活習慣病に要注意という結果が返つてきていたことを思い出した。

血圧か？ 血糖値か？ 体脂肪もかなり危険なラインだつたが：

…。

彼は両膝をつき、四つん這いになって自分を支えた。こめかみに脂汗がひと筋流れる。息苦しさで胸を喘がせながら、これも、すべてあの飯田のせいなのだ！　そう思っ、怒りに唇を震わせて、じっと倒れそうな体を堪えていると、突然雲行きが変わった。

「配電課長、ボクが現場に行つて、開閉器操作をやります。仕事の為に、こんなに一生懸命に頭を下げる管理職の姿を、ボクは初めて見ました」

配電課の野口だった。

「野口、おまえ、やつてくれるのか？」

親友の岩佐が、感激したように野口を見詰めた。

すると、野口の一言に心を動かされた配電課の別の作業員たちも、協力すると申し出てきたのだ。

岩佐が坂井の隣にかがみこんだ。岩佐は坂井の腕を支えて立ち上がらせると言った。

「坂井課長、あなたは素晴らしい上司です。他係にも影響を与えるなんて。課長、さあ立つてください！」　岩佐の目が潤んでいる。

「え？　あ、いやその……」

坂井は、事の成り行きに呆然となった。彼の筋書きでは、ここはとりあえず交渉したが、配電課に拒否されたため停止は出来なかった、という事になるはずだったのだ。だいたい、暴力団と面と向かつて事を構えるなど、坂井のスタイルではない。

第一、危ないじゃないか！　常識で考えろ、これは茶番なのだから！

すぐるように見詰める坂井の眼差しの意味を、完全に勘違いした配電課長は、ため息と共に大きく頷いた。

「坂井くんには負けたよ。うちの作業員の安全を保障してくれるのなら、今日これからパチンコ屋を止めに行こうじゃないか」

坂井は再びヘナヘナとその場にしゃがみ込んだ。



## ガチンコ対決！？

ミコトは作業着姿のまま、非常識にもパチンコ店の正面から堂々と店内に入って行った。

パチンコ店「ニューバード」は、先日飯田と共に訪れた、丹羽鳥彦店長のいる店である。

ミコトはカウンターにいる綺麗なお姉さんに、店長を呼んでくれるよう、頼んだ。

「やあ、篠原さん。今日はどういったご用件で？」

丹羽店長は、濃紺のスーツをカッコよく着こんで、人好きのする笑みを向けた。

ふと、こんな事を丹羽さんに話してもいいのだろうか？ とためらいを見せ、ミコトは一瞬口ごもった。

「どうされました？ 篠原さん。遊びに来てくださったわけでは無さそうですね」

作業着姿のミコトに向かってそう言うと、丹羽店長は店の奥にあるスタッフ専用ドアを示して、ついて来るように促した。

事務所になっっているその部屋に入ってドアを閉めると、耳鳴りがしそうなほどだった騒音が、嘘のように静かになった。接客用のソファをミコトに勧めると、丹羽店長は部屋の隅にある冷蔵庫から缶コーヒーを二本取り出して、一本をミコトに手渡した。

「あ、すみません……オレ」

何から話してよいのか、まとまらない頭の中を整理するように、ミコトは冷たい缶コーヒーのプルタブをあけて、一口飲んだ。

「このあいだのお友達は元気ですか？」丹羽店長はニコニコと愛想よく笑って言った。

ミコトは目を上げると、唐突に尋ねた。

「あの、今この瞬間、お店の電気がストップしてしまったら、どうなりますか？」

「え？」丹羽はキョトンとした表情で、ミコトを見詰めた。

帝都電力の料金課フロアは、緊迫した空気に包まれていた。

覚悟を決めたらしい坂井課長は、普段は戸棚にしまったままになっ  
っているヘルメットを取り出すと、汗で湿った頭に被った。

「じゃあ飯田さんと岩佐くんは私と一緒に先に現場へ行こう。島く  
んと副長は配電の作業員たちと同行してください」

ふう、とため息をつき、それでもまだ諦めが悪い様子で坂井が岩  
佐に小声で尋ねる。

「け、警察の人は本当に来るんだよね。大丈夫かなあ」

「さつき確認しましたよ。現地に直接来るそうです」岩佐が答える  
と、坂井は再び落ちつかなげにささやく。

「こちらから迎えに行つて、一緒に行つたらどうだろう？　なあ、

岩佐くん」

「課長、まだ何をされたわけでもないですし。あくまでもパトロー  
ルという形の任意同行ですから、あまりしつこくも言えませんよ」

「でも……」往生際の悪い坂井に、飯田がニヤリとして言った。

「それより早く行かないと、五時を回ったら、パチンコ屋の客が増  
えて、面倒な事になっちゃいますよ」

坂井の顔がサアーツと蒼ざめた。坂井は「早くしろ」と飯田と岩  
佐に手で合図をし、ギクシャクとした動きでフロアを出て行つた。

坂井がフロアを出て行くと、見計らつたように露崎が飯田に声を  
かけた。

「取り込み中悪いんだけど、飯田くん、携帯かけるかもしれないか  
ら、スイッチ切らないでね」

「え？　ああ、いつも電源入れてますけど……何か？」飯田が長い  
前髪をかき上げながら問い返すと、露崎は彼の耳元に赤い唇を寄せ  
てささやいた。

「篠原くんが何やら思いついたらしくて、さつきどこかに出かけて

行ったのよ」

飯田は一瞬しかめっ面をしたが、無言で頷くと岩佐を追いかけてフロアを出て行った。

「……そうだったんですか。グランドホールさんが滞納……」

パチンコ店ニューバードの店長、丹羽鳥彦は細面の顔に渋い表情を作った。ミコトは頷くと言った。

「当社の措置は、電力供給約款（経済産業省の認可のある規則集のこと）に則ったものだから問題はないんですが、それでも万が一、パチンコのお客さんに対して補償しろと言われたら、どの程度が妥当なんでしょうか？」

丹羽店長は考え込むと言った。

「機械の故障なんかのときは、この間篠原さんに差し上げたドル箱チケットで対応したりしますね。でも、店全体のお客様にそれをするとなると、大変な損害です」

「そうですね……」ミコトは頭を下げると、丹羽店長にお礼を言うて退室しようとした。

「あの、篠原さん、電気止めるのって、いつですか？」

ミコトは他人に言っても良いものかと少々考えたが、ここまで話してしまったら同じ事だと思いなおした。

「今日、これからです。ひょっとしたらもう切ってしまったかもしれません」

丹羽は何やら考え込んでいたが、ニツコリ笑うと言った。

「グランドホールさんがどんな対応をするのか興味がありますし、もしかしたらお力になれるかもしれません。一緒に連れて行ってくださいいますか？」

「え？」キョトンとするミコトの前で、丹羽はスーツの上着を脱ぐと、一般人のようなスポーツメーカーのジャンパーを羽織った。

「さあ、篠原さん、行きましょう」

丹羽店長に背中を押され、ミコトはタクミ商会のパチンコ店に向かった。

タクミ商会の経営するパチンコ店「グランドホール」は、国道沿いにあり、大規模な立体駐車場を持っている。遠方から車で来るお客を掴んで、換金レートが低い割には意外にも繁盛しているようだった。

帝都電力のロゴ入りの軽自動車を運転する飯田に向かって助手席の岩佐が訊ねた。

「事務所に女社長は居なかったんだよね？ とすると店に居るってことか」

「たぶんね。女社長の右腕みたいな、田村っていうおつかないオッサンも居なかったから、手ぐすね引いて待ってんじゃねえの？」

飯田の答えに、後部座席の坂井がゴクリと唾を飲み込んだ。

間もなく道路の左手にグランドホールの看板が見えてきた。飯田はウインカーを出すと、パーキングの表示にしたがって立体駐車場に車を乗り入れた。

「け、警察の人は？」車を降りるなり、キョロキョロと辺りを見回す坂井課長に、飯田は苦笑しつつ言った。

「まだみたいです。ひょっとしたら女社長の機嫌が良くて、今支払ってくれるかもしれないから、事務所のほうに行ってみましょう」

店の裏にある事務所の扉に向かって歩き始めた飯田と岩佐の背中に隠れるようにして、新品のヘルメットと感電防止作業靴で武装をした坂井がちよこちよこについて行く。立体駐車場を横目で見ながら、岩佐が言った。

「けっこう車入ってるね。こりや大変だ」

飯田は笑っただけだったが、二人の後ろを歩く坂井は蒼ざめた顔で何も聞きたくない、と言うようにかぶりを振った。大きめのヘルメ

ツトがぐらぐらと揺れた。

事務所のドアをたたき、返事を待たずに引き開けると、思ったとおり田村と呼ばれた怖い顔のオッサンが顔を出した。飯田の顔を見た途端、まさか本当に来るとは思っていなかった様子で、田村は大きく目を見開いた。凄んでいるときには気付かなかったが、案外目がクリクリしていて可愛いじゃないか、などと、飯田は関係の無い事を考えていた。

「予定通り止めに來たぜ。社長さん、居る？」

飯田が本来使うはずも無い腰道具をチラつかせながら不敵に笑うと、田村は「待つてろ」とドスの利いた声で言い捨てて、奥へ引っ込んだ。

三人は事務所の入り口付近に緊張しながら突っ立っていた。すると、今彼らが入ってきた背後のドアから、女社長が姿を現した。光沢のある黒のタイトなワンピースを着ている。まだ五月だと言うのに胸元が信じられないくらいに開いているデザインだ。坂井の目は女社長の胸元から離れなくなってしまったようだった。彼女の後ろから、茶髪の若い美青年が付き従い、後ろ手にドアを閉めた。カチヤツとカギが掛かった音がして、ようやく坂井の視線が女社長の胸元から逸れた。

「ど、どうして、カギを？」慌てる坂井を無視して、女社長は飯田の顔を見据えた。

「ホントに來ちゃったんだ。ふふふ……」

女社長は妖艶に笑うと、飯田の唇に人差し指で軽く触れた。なにやら妖しい雰囲気、岩佐と坂井が一步後ずさる。

飯田は無表情のまま言った。

「小切手が不渡りになったぞ。今、現金で支払ってくれるなら、間に合うが……。ダメなら止まるぜ、電力が」

「そんなことはさせないわ。ここから出れなきゃ、作業も出来ないでしょう？」

女社長は、飯田の腰道具にチラリと目をやると言った。

その時、坂井の携帯が鳴った。田村がギリリと睨みを利かせる中、坂井はおどおどと電話に出た。事務所内の全員の目が坂井に集中する。

「はい、はい……ちょっと待ってください。今、確認します」

そう言つと、坂井は飯田の背中をつついて言つた。

「で？ 支払いは……？」

飯田がニヤリとする。不穏な気配を感じたのか、女社長の顔が陰しくなった。

「課長、どうやら払ってくれないらしいですよ。外に居る作業グループの方にそう伝えてください」

飯田がしゃべり終わるか終わらないかのうちに、女社長がわめきだした。

「ちよつと！ 作業グループってなによ！ あんたが止めるんじゃないの？」女社長は坂井の手の中の携帯を奪い、床にたたきつける

と飯田に向かって叫んだ。  
「冗談じゃないわ。営業妨害よ！ 田村、メンバーを全員呼びなさい！」

そのとき、フツと事務所の電気が消えた。

ミコトと丹羽がパチンコ店グランドホールに到着したときには、店内は修羅場と化していた。店の駐車場にはパトカーが三台と帝都電力の高所作業車、そして作業用トラックが二台、さらに軽自動車数台がズラリと並んでいる。

ミコトは眉をひそめた。たかが停止作業に、いったいこの物々しさは何だ？

丹羽がミコトの肩をつついて促すと、店内へ入って行つた。普段はパチンコの電子音が溢れている店内は、罵声と怒号の渦に包まれていた。

「どうしてくれんだよっ！ 三万突っ込んで、やっと確変来たって

のに！」怖そうな親父が店員に掴みかかっている。

「このまま帰れて、いったいどういう事？ 納得できないわ！」おばさん連中も、目を三角にしてわめいていた。あまりの喧騒に、ミコトは眩暈がした。帝都電力の社員たちはどこだろう？ 辺りを見回すと、店の奥の事務所から女社長のわめく声が聴こえてきた。「こんな事して、タダで済むと思ってるの！ 損失分の補償金を、必ず払ってもらわよっ！」

女社長は、事務所内に居た飯田たちを、物凄い形相で睨みつけると、言葉にならないわめき声をあげながら、彼らを店の外へと追出し始めた。ミコトが飯田たちに混じって店から押し出される中、丹羽店長の良く通る大声が聞こえた。

「ひどい店だなあ、電気代滞納して止められちゃったらしいよ！今日はもう閉店するしかないみたいだ。こんな店二度と来ないぞ！」  
「ええ？ 本当かそれは」近くにいたオヤジが丹羽の声に反応して言った。

「だって、外に出てみなよ。電力さんの車がたくさん来てるよ」丹羽は大声を張り上げた。

店の中がどよめく。

さらに丹羽は樂しげに怒鳴った。

「いつ電気が止まっちゃかわからない店なんかより、違う店に行つたほうがいいなあ！」

女社長が懸命に取り繕おうとする間もなく、店内の客たちが騒ぎ始めた。

「金返せ！ ドル箱チケツトなんかではごまかされないぞ。また電気切れたらどうするんだよ！ 現金をよこせ」

詰め寄るお客の波にもみくちゃにされる女社長やタクミ商会メンバーたちを尻目に、煽るだけ煽ると、丹羽はしれつとして店から出て行った。ミコトはあつけにとられて、丹羽の背中を追いかけた。

「丹羽さん！」

丹羽店長はミコトを振り返ってニッコリ笑った。

「商売敵を蹴落とすチャンスをくださって、ありがとうございます。これでうちのお客も増えるでしょう」

「は、はあ……」目をパチクリさせるミコトに、丹羽は真顔になって言った。

「篠原さん、もしもタクミ商会在、今後補償金なんだって言うてきたら、ひと声かけてください。我々の商売にはそれなりのルールがあります。あなたの為なら、きつとお役にたてると思いますから」失礼します、と言って丹羽は帰って行った。

首をかしげて丹羽の背中を見送るミコトに、背後から飯田が声をかけてきた。

「いい人脈、掴んだじゃねえか。あの人誰だか知らねえだろ、おまえ」

怪訝そうに振り返ったミコトに、飯田が耳元でささやいた。

「ええええええ！」

ミコトは飯田の言葉に悲鳴に近い声を上げた。

「ヤ……ヤクザの若親分？」

暴力団とヤクザの違いも良くわからないミコトは、すくみ上がった。

「あ、あんな爽やかな人が……若親分？……てゆうかヤクザって何なの？」

はあはあと胸を喘がせるミコトを、飯田は面白そうに見詰めて言った。

「怖がる事はない。丹羽さんの所は昔ながらのまっとうなヤクザだ」

「ま……まっとうな……ヤクザにそんなのあるんですか！」

涙目でふるふると首を振るミコトの、ネコツ毛頭をポンと叩いて飯田が言った。

「オレが以前取立て屋をしていたオレンジファイナンスも丹羽さんとの会社だ。家系は代々ヤクザだが、あの人には裏表の無い堅実な青年実業家なんだ。まあ、オレが居たときは親父さんが仕切ってたけどな」



微笑む飯田を虚ろな目で見返して、ミコトは今にも笑いだしそうな膝にぐつと力を入れた。

お客の対応に追われてパニックするパチンコ店グランドホールを後にして、帝都電力の車は何台もつながりながら国道を戻った。

帰りの車の中で、坂井課長は胃のあたりを押さえて真っ青になっていた。

「もう、こりこりだ……とんでもない……」

ブツブツつぶやく後部座席の声に、飯田と岩佐は声を殺して笑った。

会社に戻ると、料金課の応接セットに知らない男性が座っていた。男性の向かいの椅子に座って、露崎と酒場がニコニコしながら相手をしている。

そろそろと戻ってきた集金メンバーを見て、男性は親しげに微笑んで手を挙げた。

「石塚さん！」

島と岩佐が目を輝かせて駆け寄った。

ああ……この人が飯田さんの尊敬する前・課長の石塚さん！

ミコトは納得しながらじつと石塚を見詰めた。意志の強そうな太い眉と、眼光鋭い猛禽類のような目。がっしりしたアゴのラインは、極自然に、太くて筋肉質の首へと続いている。白い歯のこぼれる口元は、自信に満ち溢れた表情を湛えていた。

本店の債権確保部門のトップにいと聞いたが、坂井よりもずっと若そうに見えた。

「いやあ、みんな、久しぶり！ 元気そうだね」

石塚のキラキラする瞳が、みんなの背後に居る背の高い飯田の姿を捉えたようだった。

石塚は飯田に向かって微笑み、何かを言おうとした。飯田がわずかに首をかしげた。そのとき、配電課長に報告を終えた坂井課長がフロアに戻ってきた。石塚は飯田から目を逸らし、坂井に向き直っ

た。

「坂井さん、暴力団タクミ商会の停止、実行されたんですね。ご苦  
労様でした」

労をねぎらう石塚に対し、坂井は表情を硬くして言った。

「これはこれは石塚さん、本店のお偉いさんがこんな場末の事業所  
まで、わざわざどうなさったんです？」つつかかるような坂井の口  
調にも臆することなく、石塚は笑顔で言った。

「隣のK事業所まで出張だったものですから、ついでに古巣に寄っ  
ただけですよ」

「それで、配電課長と昔語りをするうちに、ふがない今の料金課  
の話になって、心配のあまり何台も現場に作業車を差し向けて援護  
してくださったというわけですか」

嫌味な坂井の口調に気付かないフリで、岩佐がにこやかに割って  
入った。

「ああ！なるほど。それであんなにたくさんうちの会社の作業車  
が来てくれたのか。見た目に数が多いってのも、効果があるんだな  
あ。ねっ、篠原くん」

急に話を振られて、ミコトはドギマギしながら笑顔を引きつらせ  
た。

話題が逸れて、石塚は岩佐と島のほうに顔を向けると言った。

「どうやらキミたちもずいぶん成長している様子じゃないか。私が  
居た頃はケンカばかりしていたが、助け合って仕事に当たれるよう  
になるとは、さすが坂井さんのご指導が行き届いているとみえる」

坂井とは正反対の、まったく嫌味のない爽やかな口調の石塚に、  
何か言おうとしていた坂井はぐっと言葉を飲み込んだようだった。

坂井は面白く無さそうな表情で一番端っこに立っているミコトを  
手招きすると、五百円玉を渡して言った。

「篠原くん、石塚さんと会議室に行くから、コーヒー二つ買って来  
てください」

坂井と石塚は連れ立って料金課のフロアを出て行ってしまった。

二人の上司を見送る集金メンバーに向かって、それまで黙っていた飯田が、信じられない事を言った。

「みなさん、今日は本当にありがとうございました。タクミ商会にケリがつけば、もう、心残りはありません」

ペコリと頭まで下げて見せた飯田の顔には、何の表情も浮かんでいない。一同は啞然として彼を見詰めていた。

「あ……」

何か言おうとするミコトを、露崎が手で制した。誰も何も言わない。

飯田は自席に戻ると、机の上のタバコを掴んでフロアを出て行った。

業務終了のチャイムが鳴った。

## それぞれの歩む道

チャイムが鳴り終わっても、誰も帰ろうとしなかった。飯田が出て行った後のドアを見つめていたミコトに、酒場が声をかけた。

「篠原くん、課長からコーヒー頼まれていたでしょう?」

「あつ! いけないっ、忘れてた」

ミコトは慌ててフロアを出て行った。飯田の姿は無かった。

三階の食堂に上がり、食堂内の自動販売機でコーヒーを買っていると携帯が鳴った。

「もしもし」電話の相手は岩佐だった。

『篠原、あとで料金課のフロアで一杯やることになったから、飯田をみつけて誘っておいてくれないかな』

「え? 飲むんですか?」

確かに係を挙げての大仕事が一段落したのだ。飲みたい気持ちはわかるが、飯田の事が頭に引っかかっているミコトとしては、正直言っただけなんだか飲む気になれない。それに、どんな顔をして飯田を誘えばいいのだろう。

憂鬱な気分で缶コーヒーを手に食堂を出たミコトは、同じく三階フロアの会議室をノックしようとした。

「え…… 損害賠償?」

室内の音がドア越しに耳に入ってきた。ミコトは会議室のドアに張り付くようにして聞き耳を立てた。

「そうです。K事業所がタクミ商会の風俗店を停止した絡みで」石塚のため息がきこえる。

坂井が上ずった声で言った。

「でも、客がこうむった迷惑料を、直接電力会社に請求することは筋違いだし、裁判をしたって絶対にうちが勝ちますよね。そもそも滞納しているほうが悪いんだし、K事業所は手続きだってきちんと踏んでいて、落ち度は無いのでしょうか?」

「ええ、K事業所の場合はパチンコ店ではなくファッションヘルスだったので、昼間の時間帯は客もほとんど居なかったらしいんです」  
「じゃあ、何が問題なんですか？」

坂井の問いかけに、一拍呼吸をおいて石塚が言った。

「死んだんですよ……」

「ま、まさか！」焦りを含んだ坂井の声が問い返す。

「見つかったときはすでにぶかぶかと浮いていたらしいのです」

ミコトはドアノブに手をかけたまま固まった。耳だけが別の器官になったようにドアの向こうの気配を拾おうとして、神経が研ぎ澄まされる。

と、そのとき廊下の向こうから階段をあがってくる足音がした。急いでいるらしく、カンカンとヒールで走っているようだ。

「あ！ 篠原くん、料金課長は居る？」

顔を真つ赤にして息をはずませた上条ありさが姿を現すなり叫んだ。ミコトは慌てて会議室のドアから離れた。ありさのただならぬ声に、会議室のドアがパツと引き開けられ、石塚と坂井が顔を出した。

「上条くん、どうかしましたか？」

にこやかに顔を作って訊ねる坂井に、ありさは涙目で言った。

「坂井課長、大変です！ 窓口に……窓口に大勢！ タクミ商会と名乗る怖いオジサマたちが！」

坂井の顔色がサーツと蒼ざめた。

「な、なんだって？」

「今、飯田さんが一階に降りてきて対応しているんですけどっ！」

坂井と石塚は顔を見合わせるとミコトとありさを押し退けて階段のほうへ走って行ってしまった。二人を追いかけようと、歩き出したミコトの腕をありさがつかまえた。

「ねえ、あの怖い人たち本物の暴力団なの？ 飯田さんと二人して軟禁されたって本当？」

「こんな時に、何悠長なこと言ってるんだよ！」

ミコトはありさをもぎ放すと、彼女の手に二本の缶コーヒーを押し付けて階段を降りていった。

頭の中に、さっきの石塚の言葉がぐるぐるしていた。

死んだんですよ……ふかぶかと浮いていたらしいのです。

K事業所で起きたタクミ商会とのトラブルは、流血沙汰になったと聞いていたが、まさかそんな死人が出るほどの大惨事になったとは……！ ミコトの脳裏に、東京湾にぶかりと浮かぶ、白い溺死体のヴィジョンがよぎる。波にもてあそばれて、ぐるりと裏返った死体の顔が、何故だか飯田にそっくりだった。ミコトは危ない妄想を振り払うように、激しくかぶりをふると、三階から一階へと一段抜かしで階段を駆け下りていった。

「ですからあ、払わなきゃ電気は点きませんって言ってるでしょう？」

うんざりしたような飯田の声が聴こえる。たった一人、窓口の接客カウンターに座った飯田を、営業課の社員たちが数メートル離れた同じフロアの片隅から固唾を吞んで見守っていた。腫れ物を見るように、誰も近寄ろうとはしない。

カウンター越し、飯田の前の椅子には女社長が座り、その右隣に田村、左隣に、たぶん女社長の愛人だと思われる茶髪的美青年がそれぞれ立って、飯田の対応を無表情に見守っていた。彼らの後ろには、数歩下がった位置に威嚇するように五人の怖そうな男性たちが黙って立っている。男性たちはそれぞれスーツを着用していたが、どう見ても会社員には見えなかった。

「明日払うって、言ってるでしょう」

イライラしたように女社長は栗色の長い髪をかき上げた。いつもはキャリアウーマンのように後ろで一まとめにしているが、先程のトラブルでもみくちゃになったらしい。よく見ると化粧がくずれ目の周りのマスカラが滲んでおり、メガネもかけていなければ服もし

わくちゃだつた。美人が台無しだ。

「止まる前に、こういう歩み寄りがあつたらよかったんだけどなあ」  
ふざけたような飯田のセリフに、田村のこめかみに青筋が浮く。

女社長がバンとカウンターを叩いた。

「こんなに頼んでもダメなわけ？ いったいどうなっているのかしら！ どうして現金が無いのか、教えてあげるわよっ！ あんたたちのおかげでお客たちに幾ら弁償したと思ってるの？ しかも現金で！」髪を振り乱し、女社長は阿修羅のごとく飯田を睨み据えた。そこに坂井と石塚が駆けつけた。ミコトも数秒遅れで追いつき、二人の背後からお客様フロアの様子を見渡して息を飲んだ。

女社長は飯田から坂井と石塚の方へ視線を移した。飯田が振り向いて言った。

「あれ、お二人とも……せつかく久しぶりに再会したんだから、上でゆっくりお茶してればいいのに」

間延びした言い方で飯田は二人に向かってひらひらと手を振った。女社長は完全に切れた様子だった。

「こんな失礼なガキ、見たことないわ！ 話にならないわよっ」女社長が立ち上がると同時に、後ろに居た五人の男性が揃って二歩ほど前に出た。恐ろしいほどの圧迫感と緊張感が、お客様フロア全体に充満する。ミコトはキュツと胃が縮んだ気がした。

「金払えって、こつちが言いたいだよ！ お客に支払った分、返してもらおうよ！」

「そんなん、オレらに関係ねえし」

へらつと笑った飯田のアゴを女社長がぐいと掴んで引き寄せたとき、思わずミコトは前に出て叫んでいた。

「やめてください！ ひどい事、しないで！ 飯田さんを放せよっ」  
『流血沙汰』『東京湾で溺死体』などの文字がミコトの目の前でチララした。

女社長の手首を掴もうと伸ばしたミコトの手を、田村が凄いい力でギョツと押さえつけた。飯田が驚いたように切れ長の瞳を大きく見

開いた。フロアの奥で、営業課の誰かがハッと息を飲んだとき……  
来客用の自動ドアがスツと開いた。女社長が振り返ると、左右に  
避けた手下どもの間から、スーツをビシッと着た長身の男性が声を  
かけた。

「これはこれは、タクミ商会の……。こんなところでいったい何を  
凄んでいらっしゃるのですか？」

パチンコ店「ニューバード」の店長にしてヤクザの若親分、丹羽  
鳥彦とその父親、丹羽鳥男氏が立っていた。

「あなたたちは、丹羽組の……！」

飯田のアゴをつかんだまんまの女社長に、丹羽鳥彦は静かに話し  
かけた。

「なんだかわかりませんが、暴力は良くありませんね」

女社長は飯田を放すと、丹羽のほうに向き直った。彼女の耳元に  
手下の一人が何かをささやいた。女社長の美しい眉が吊り上がる。

「なんですって？ この男が客たちを煽っていた、ですってえ？」

色めき立つ暴力団員たちを尻目に、丹羽は飯田の横で田村に捕ま  
っているミコトに向かってにこやかに手を振った。

「篠原さん、先程はどうも！ 父が是非ご挨拶をしたいというもの  
ですから、連れてきました。あれ？ 手なんかつかまれて、いった  
いどうしたのです？」

丹羽の言葉に、タクミ商会メンバーをはじめ、営業課のフロアに  
いる全員の目がミコトに注がれた。田村が放り投げるようにミコト  
の手を離した。

暴力団をもものもしない落ち着いた凛々しい男性は、先ほど何と  
呼ばれていたっけ？

「組」の……？ そんな怪しい人たちが、わざわざミコトに挨  
拶に来たのだ。一瞬の静けさの後、ざわめきがさざ波のようにフロ  
ア内に広がっていった。

ミコトは反射的によろよろとよろけて飯田の肩にもたれかかった。  
女社長に睨みつけられて、ギクリとする。



女社長は高飛車な態度で丹羽親子を一瞥して言った。

「ヤクザだか何だか知らないけど、今私たちが話をしているのよ。引っ込んでいなさい！」

丹羽鳥彦青年は、フツと笑って言った。

「話じゃないでしょ。脅しているのでしょうか？ 素人相手に……」

「おだまりなさい！」女社長の声に、手下どもが動き、丹羽親子を囲むように詰め寄った。

そのとき、飯田が場違いなほどのんびりした声で呼びかけた。

「ねえ、おねーさん。あなたこそ、話し相手はこっちだよー」

「生意気な口をきくと、ぶつとばすぞ」女社長の左に居る、茶髪美青年が飯田の胸倉をつかんだ。

「飯田さんに触るな！」

混乱状態のミコトが青年の手を飯田から引き離そうとした途端に、女社長の平手がミコトの頬を打った。

小気味よい音がしたかと思うと、ミコトは頬を押さえてその場に尻餅をついた。情けない格好でひっくり返ったミコトを、落ち着いた仕草で飯田が助け起こした。

女社長はハアハアと肩で息をすと言った。

「騒ぐんじゃないよ、坊や。言っておくけど、今のは暴力じゃないわよ。取り乱したあんたを正氣に戻す為の非常手段よ」

乱れた髪をかき上げる女社長の背後で、低い声がつばやいた。

「それはわかるけど、あんた手を出した人が悪かったよ」

今まで一言もしゃべらなかった、丹羽鳥彦の父・丹羽鳥男がじつと彼女を見詰めていた。

「今貴女が叩いた篠原さんは、私の命の恩人だ。文句があるなら私が聞こう。どうやらあんたがたは、息子の同業者らしいじゃないか」女社長と丹羽・父は敵意のこもった目で睨み合った。窓口に新たな緊張感が張りつめる。

まったく読めない展開になってきて、飯田とミコトは顔を見合わせた。二人の背後に居た石塚が声を発した。

「あの、こんなところで立ち話もいかなものかと……。よろしければ会議室の方へいらしてください」

丹羽・父は会釈をすると、石塚の指し示す方に向かって歩き出した。

「社長さんどうぞ」

紳士的な笑みを浮かべ、息子の丹羽鳥彦がまるでパーティーにでも誘うかのように女社長をエスコートして歩き出した。タクミ商会のメンバーもはじかれたように動き出し、社長の後を追おうとした。「すみません、会議室が手狭なものですから、そちらの五人の方は、このままここでお待ちください」

石塚は丁重な態度で頭を下げ、坂井課長の他に飯田とミコトを伴ってお客たちを会議室へと導いた。

何がなんだかわからない様子でいちばん最後から付き従うミコトに、飯田が小声でボソリとささやいた。

「うまいだろ？ 石塚さん」

「え？」何のことかわからない。

「タクミ商会、二手に分けたから、人数減ったじゃん」ニヤリとする飯田に、ミコトは驚きの眼差しを向けた。結局大勢で押しかけたタクミ商会のメンバーは、気付けば女社長と田村、それに頭の悪そうな美青年の三人になっていた。

しかし、人数が減ったのは良いが、この後の展開しだいでは、関係の無い丹羽さん親子まで巻き添えになってしまうかもしれない。ミコトは石塚と並んで歩く丹羽鳥男氏を盗み見た。つい先月死にそうになって救急車で運ばれた人物とはまるで別人のように、しつかりした足取りで歩いている。ヤクザの親分というには優すぎる顔立ちだが、後姿にはどこことなく威厳が漂っていた。

ミコトは隣の飯田をつついて言った。

「丹羽さんたちを巻き込んでしまうのはいけません。やはりタクミ商会はボクらだけで何とかしないと」

飯田は小さくため息をつくと言った。

「おまえって、本当に真面目でいいヤツだな」

「え？」 思いがけない飯田の褒め言葉（？）に一瞬立ち止まってしまった間に、前方を歩いていた集団は会議室の中へと消えた。

飯田がミコトのネコツ毛頭をポンと叩いて言った。

「でも……残念なことに、もうみんな会議室に揃ってしまいましたとさ」

「結局最後は他人任せかよっ！」

パタンと閉まった会議室の扉の前で、ミコトは自分の無力さに唇を噛みしめた。

会議室のドアノブに手をかけたままのミコトに、飯田がポツリと言った。

「最後まで、テメエでケリつけたかったけどな、仕方ねエんだよ。オレらはサラリーマンなんだから」

ミコトはハツとして振り返ると、背の高い飯田を見上げた。飯田も自分と同じ気持ちだったのだと気付く。自分の失敗くらいは自分で何とかしたいと……。それでも、組織の一員である以上、手を出せる範囲には限界があるのだ。

「これから先は上の仕事だ」

そう言っただけで微笑むと、ミコトのアゴにそっと手をかけた。

「な、なに？」

メガネ越しに見詰められて、困惑していると、飯田はプツと吹き出した。

「そんな目で見るな。さっきあの女に叩かれたとこ、血が出てるんだよ」

「え……？」

飯田はくすくす笑って指先でミコトの唇に触れた。

「いつ……っつ」

ミコトは口元を押さえて飯田に背を向けた。呻くミコトに、飯田は優しく声をかけた。

「悪かったな。オレをかばったせいで、お前が叩かれちゃった」

「大丈夫です。さつき、K事業所の流血沙汰の話盗み聞きして…

…それでオレ、思わず」

ミコトは飯田に背をむけたままボソボソと言った。

「K事業所の？」飯田が小声で問い返す。

「……死人が出たらしいんです。それで、オレ、パニックになっちゃって。飯田さんに、もしもの事があつたらって……」

ミコトの背後で、飯田がフツと笑った気配がした。彼は少し間をおいて、真面目な声で言った。

「今回の件、お前が気にすることなんて、何も無い。今、中でどんな話になっているのか知らねえけど……もし、丹羽さんのご厚意に甘えて何とかしてもらうとしても、それはお前の人徳ってヤツだ。胸張っていいんだぜ。お前、良くやったよ」

ミコトはうつむいたまま、飯田の言葉を背中中で聞いていた。

飯田とミコトが会議室に入ってゆくと、コの字型にセットされた長い会議用のテーブルに、向かい合うようにして丹羽親子とタクミ商会の三人が座っていた。両者の間、入って正面のテーブルには、窓を背にして坂井と石塚が居た。坂井の目の前には、束になった現金が積まれている。女社長は険しい顔で数枚のペーパーに目を走らせていた。

飯田とミコトは、入口近くの手近な椅子を引き寄せると並んで座った。

丹羽鳥彦青年が、女社長にビジネスライクに話しかけた。

「その内容をご了承いただけたのでしたら、ここにある現金を無利子でお貸し致しますよ」

女社長が悔しげに唇を震わせて言った。

「足元、見やがって。つまりはこんな、はした金で新店舗の営業許可証を預かると？」

坂井と石塚は口を挟まずに黙って双方のやり取りに注目している

だけだった。丹羽青年はニコニコしながら言う。

「ハイ、そう思っていたいても別にいいですよ。ただ、このままでは先程の店舗も電気が切れていて営業できない状態ですからね。来月オープン予定の新店舗の心配より、今の店をなんとかしたほうがいいんじゃないかな、と思っただけです」

老婆心ながら……と付け加える丹羽青年を殺しそうな目つきで睨みつけると、女社長は怒鳴る。

「誰が、オレンジファイナンスなんかから借りるもんか！」

彼女の怒鳴り声に、丹羽・父が笑った。

「タクミ商会の名前、金貸しの間では評判悪いよ。汚い手段で何度も踏み倒したり、ちよつとやり過ぎたとは思わいかな？」

「くっ……」唇を噛む女社長に、丹羽青年がダメを押した。

「あんたたちに金を貸してくれるところなんて、もう無いんだよ」「なんだと！」

思わず腰を浮かす茶髪青年を押し留め、女社長は低い声でなにやら悪態をつくくと、手元のペーパーにさらさらとペンを走らせた。書き上げた書類を丹羽青年のほうに押しやると、女社長は坂井と石塚に向き直って言った。

「未納分、その金で支払うから、さっさと通電してよ！」

坂井は飯田に目配せをした。飯田はテーブルを回りこんで領収証の入っているカバンを坂井に手渡した。

「確かに、電気代の未納分を全額領収しました」坂井は金を数え終わると営業スマイルで言った。

タクミ商会のメンバーは、坂井から領収証を受け取ると、肩を怒らせて会議室を出て行った。

ミコトは、丹羽親子に駆け寄った。

「丹羽さん、これはいったい……？」

丹羽・父はミコトのほうに笑顔を向けた。

「これで電気代の方は解決しましたよね。補償金云々の件も、もう言ってこないと思いますよ。あとは、我々とタクミ商会さんの問題

ですから、電力さんには関係有りませんし」

それでは、と立ち上がった二人に、ミコトと飯田は深々と頭を下げた。

「篠原くん、お客様をお見送りしてください」

問題が一気に解決し、笑顔満面の坂井が言った。

坂井課長とミコトの後に続いて会議室を出ようとした飯田を、石塚が呼び止めた。

「すまないが、飯田くんに話があるんだ。残ってくれないか」

飯田は怪訝そうな面持ちで石塚を見たが、黙って頷くと、彼そばに歩いて行った。

二人の様子が気になって、グズグズしているミコトを促し、坂井は飯田たちを残したまま会議室の扉を閉めた。

廊下の窓から、パチンコ店グラウンドホールの停止解除に向かうため、配電課の作業車が出動して行くのがチラリと見えた。

丹羽親子を見送り、二人だけになったとき、坂井課長がミコトの肩に手をかけて笑顔で言った。

「いやあ、篠原くん。キミの知り合いのおかげで何とか無事解決だ。良かった、良かった」

目を細める坂井に、ミコトは激しくかぶりを振った。

「違っんです、課長、オレがいけないんです」

首を傾げる坂井に、ミコトは涙目で言った。

「先付け小切手もらって領収証を切ってしまったのはオレです。その後すぐに、取り返しに行ってくれた飯田さんの、足手まといになって邪魔してしまったのもオレです。ダブルマンに足を噛まれたのも、オレが迂闊に進入したのを止める為で……飯田さんは、飯田さんは……」顔を真っ赤にしてしゃくりあげるミコトを、坂井はじっと見ているようだった。ミコトはメガネを外して袖口で目元を拭いた。

「課長、飯田さんが辞める必要は、無いんです。辞表を出したって

聞きましたが、お願いです、飯田さんを辞めさせないで！」

涙目で懇願するミコトに、坂井は困ったように顔をしかめて言った。

「辞表の件は、私も何度も確認をしたんだよ。そもそも、担当者が、個人の失敗で責任をとって退職する必要はないからね」

「え？」

じゃあ、どうして……？ ミコトは大きな瞳を見開いて、坂井を見た。坂井は小さく首を横に振って言った。

「何か、別の理由があるんだろう。それに……退職の処理は、システム端末に人力済みだ。私の権限では、もう取り消しはできない」言葉を失ったミコトの背中を、坂井はポンポンと軽く叩くとお客様のガラス扉から社内に戻って行った。

ミコトはぼやける視界で、暮れ始めた空をぼんやりと見上げた。

会議室のテーブルの隅にある灰皿を引き寄せると、飯田はポケットからタバコを取り出した。取り出したタバコを一本咥えて火をつけると、飯田は石塚のほうに「どうぞ」とタバコの箱を押しやった。「うむ、節煙しているんだけどなあ……」

そう言いながらも、石塚は差し出されたタバコに手を伸ばした。

「新しい部署に行ってからというものの、ストレスのせいか、本数がグッと増えてしまつてね。医者から減らすように言われているんだが」ぼりぼりと頭を掻きながら、石塚は少年のような笑みを飯田に向けた。

「今の職場は、忙しいんですか？」

気遣わしげに訊ねる飯田に、石塚はため息混じりに頷いた。

「今日も、停止関係で問題があつてね。先日のK事業所の件でさ」

飯田は先程のミコトのセリフを思い出した。

死人がでたらしいんです

「死んだって、聞きましたけど？」

飯田の言葉に、石塚は太い眉をピクリと動かした。

「ああ、K事業所でタクミ商会のビルをまるごと停止したんだけどね、一軒だけ関係の無い店舗が入っていて、そこで飼っていた南米産の貴重な熱帯魚が死んだんだよ」

「へ？ 熱帯魚……？」飯田がぼそりと問い返した。長く燃えたタバコの灰がぼろりとテーブルに落ちた。

「時価三百万円くらいする、マニアの間ではレアな魚らしいんだ。エアポンプが止まって、持ち主が気付いたときには、もう死んでぶかぶか浮いていたらしい」

飯田はプツと吹き出して、タバコの灰を拾い集めた。背を向けたまま肩を震わせていたミコトを思い出し、笑いが込み上げて来た。何で笑うんだ？ と言いたげな石塚の視線に、ごまかすように飯田は話題を変えた。

「ところで話つて、何ですか？」

単刀直入に話題に入った飯田に苦笑しつつ、石塚は尋ねた。

「辞表出したよね」

ああ……と、飯田は少しすまなそうな目になり頷いた。

「この会社の水は、合わない？」

穏やかに尋ねる石塚の瞳は、何もかも見透かしているようだと感じ、飯田は思わず目を伏せた。

「さっきのキミの後輩……随分慕われているように見えたり、職場も良い雰囲気のようにじゃないか」

上目遣いで石塚を見ると、彼はまっすぐに飯田を見ていた。自分を初めて認めてくれた人物に、飯田は決心したように思い切った胸のうちの声をにした。

「オレ、もう一度、夢に挑戦してみようと思うんです」

「夢？」いつも気だるそうな態度の飯田から、ミスマッチなセリフが飛び出して、石塚は思わず彼の端正な顔を凝視した。飯田も、「らしくない」と自覚している様子で、顔を赤らめて小声で言った。

「司法試験を受けて、弁護士になりたいんだ」



「ああ、キミは確か法学部出身だったよね」

飯田の履歴書を思い出し、石塚は頷く。飯田は彼らしくない、恥ずかしそうな顔で言った。

「さっきの後輩……篠原に出会って、オレ、なんか忘れていた事を思い出したっていうか。親が離婚して、大学行く金が無くて……それでも弁護士に憧れて働きながら夜学卒業した。そんなして、頑張ったのに、いつの間にか何の為だったか忘れちゃって……」

夜学時代、取り立て屋をやりながら、金や法律に関して無知ゆえに、負債を抱えて人生の坂道を転がり落ちてゆく人を何人も見た。仕事が変わってから、それは同じで。

「お客に、『電気切るぞ』って、脅しみたいな言いながら、これじゃあこの人にとって、何の解決にもなっていないって、そんなことまで考えるようになったけど……。毎日毎日同じような人に出会うもんだから、そのうち考えるのが面倒になったんです。……だから、オレ……」

つつかえつつかえ自分の素直な気持ちを話す飯田に、石塚は優しい瞳を向けて言った。

「キミの気持ちは良くわかった。ただ、今、辞表を出すのはどうかな、と思う」

「へ？」という顔で見返した飯田に、石塚はいたずらっぽい表情で、ニヤリと笑った。

職場に戻ったミコトに、岩佐が駆け寄ってきた。

「篠原、ご苦労さん！ タクミ商会、金払ったんだって？ 良かったじゃないか」ミコトは曖昧に微笑んで、コクコクとただ頷いた。別の集金担当の男性社員が岩佐に向かって声をかけた。

「センパイ、ビール買って来ましたが、どこで飲みます？ 応接セットのところでもいいですか？」

「おう、こっちにもってこい」

島が巨体を揺らしてミコトの背後に現れた。両手に、つまみのた  
くさん入ったスーパールのビニールを提げている。

「篠原、飯田に声をかけてくれたのか？」

岩佐の言葉に、ミコトは弱々しく首を振った。

「すみません、言い忘れました。でも飯田さん、会議室で石塚さん  
と話してます」

ふーん、という表情で、岩佐は頷くと島たちのほうへ行ってしまう  
った。ミコトはのろのろと自席に戻り、椅子に座り込んだ。何気な  
く壁にかかったカレンダーに目をやる。どうせ七月には辞令が出て、  
自分はこの事業所から居なくなるのだ。いつまでも飯田と一緒に仕  
事ができるわけではない。それでも、同じ会社組織の中に居れば、  
いつかはまた一緒に仕事をする機会もあるだろう、そう思っていた。  
まさか……辞めちゃうなんて、そんな。

ミコトはどうしていいかわからなかった。実際、自分がどうこう  
出来る問題ではないのだろうが。ミコトは大きなため息をつくど、  
机の上を片付け始めた。

料金課のフロアの片隅で行われたささやかな飲み会は、営業課の  
綺麗どころが加わった事でかなりの盛り上がりを見せていた。

「飯田さんと飲めるなんて、あたし、すごくシ・ア・ワ・セ」い  
つもの甘えた口調で飯田の肩にしなだれかかる上条ありさを、ミコ  
トは冷ややかな目で見ていた。

上条ありさ！ おまえの正体はお見通しだぞ、この、ニセ天然お  
嬢さまめ！

上条ありさから目を逸らしたとき、すっかり営業課の花・窪田圭  
子さんが視界に入ってしまった。

ああ……圭子さん！

ミコトは一人、がっくりと肩を落とした。

憧れの女性<sup>ミコト</sup>は、真っ赤に目を泣き腫らしていた。このささやかな  
飲み会を始めるにあたって、岩佐のほうから飯田が今月いっぱい

居なくなるといふ話が出た。それを聞いた営業課の花・窪田嬢は、大粒の涙をこぼして泣き伏したのだった。彼女がどんなに飯田の事が好きだったか、恋愛にうといミコトでさえ一目瞭然だった。

「圭子ちゃん、コイツはめっちゃめっちゃ軽いヤツだから、絶対やめておいたほうがいいって」

岩佐の言葉に、窪田嬢はさらに号泣する。

「いいやなく、この色男！」

当の飯田は、冷やかし混じりの野次などをものともせず、いつもどおりのクールな笑みを湛えて、次々にグラスに注がれるビールを飲み干した。

「石塚さんは、帰っちゃったんですかね」

島と仲の良い三年目の男性社員が岩佐に尋ねた。

「うん、誘ったんだけど、坂井課長たちと飲みに行っちゃったよ。

しかし、坂井課長もやるときはやる人だったんだな。オレは今日、ちよっぴり見直したよ、ねっ、島さん」

酒がまわって赤い顔になった岩佐が、島に微笑みかけた。

「ああ、あのへんにプライドの高い坂井課長が、配電課でいきなり土下座をしたときは、正直言って感動したね」

島も、細い目をいっそう細くしてニツコリした。別の男性社員が言った。

「オレ、坂井課長ってあんまし好きになれなかったけど、ちよっと見る目が変わりましたよ。課長の部下で良かったって、今はそう思います」

坂井が聞いたら結果オーライでにんまりとほくそ笑んだことだろう。

坂井の話題で盛り上がるフロアを抜け出し、ミコトは屋上への階段をひとりで登って行った。たった一杯飲んだだけだというのに、なんだか胸がムカムカした。事実上の飯田の送別会のような飲み会に、参加したくはなかった。

「一緒に仕事をしていた仲間が居なくなるっていうのに、みんなど

うして何にも言わないんだろう」

屋上への鉄扉の前で、思わず独り言をつぶやいた時、背後で誰かがクスツと笑った。振り返ると飯田が立っていた。

「夕方から、ずっとココにシワ寄せてるから、具合でも悪いのかと思っただけ、そんなこと考えてたのかよ、お前」

そう言っただけ飯田はミコトの眉の間をチョンとつついた。からかうような態度のわりには、目が真面目だった。

ちよっぴり酒が入っているせいだろうか？

勝手に、信じられない言葉がミコトの口から滑り出した。

「オレ、飯田さんと一緒にちょっと仕事がしたいです。お願い、辞めないで！」

飯田が切れ長の瞳を大きく見開いた。ミコトはハツとして、飯田から目を逸らした。

バカみてえ……。

ミコトは真っ赤になった。これじゃあまるで小学生だ。

俯くミコトの両肩に、飯田がポンと両手を乗せた。

「お前のそういうとこ、青臭くてお子様だと思ってたけど、この先もずっと変わらないで欲しいと思うよ。会社組織は半年ごとに人事異動があつて、誰かしらが入れ替わる。いつの間にかみんなそれに慣れてしまう。それでも毎日が成り立つし、回って行く」

飯田はミコトの肩に手を乗せたまま、少しかがんで顔を覗き込みながら言った。

「でも、人との関わりって、もっと大切だって、お前に会って気付いた。社会人になったとき、自分がどんな事をやりたかったかとか、目指していたものが何だったかとかも、みんな忘れて流してて……」

ミコトは首をかしげた。飯田は何を言いたいのだろう。

「新入社員で希望に目を輝かせているお前を見たとき、オレにもやりたい事があつたのを、思い出したんだ。現場での人間らしいやりとりや、ドジ踏んでも一生懸命なお前見てたら、なんかオレも、なりふり構わずやってみようかなって気になってきた」

キョトンとするミコトに、飯田が爽やかな笑顔で言った。

「オレ、弁護士になりたいんだ。人の役に立てるような事、やりたかったんだよ」

「ええ？」ミコトは目を丸くした。

「それって……」顔が良くて、長身でスタイルもバッチリ。度胸も満点で、その上弁護士になったら、窪田圭子さんどころか、大多数の女性のハートを鷲づかみじゃあないか！

「飯田さん……ズ、ズルイよっ」

ミコトはぷうつと頬を膨らませると、下から飯田を睨み上げた。

「それで、勉強する為に会社辞めるって、辞表を出したんだけど……」

飯田は先程、会議室で石塚に言われた事を思い返した。

退職の本当の理由を告げた飯田に、本店債権確保部門の最高責任者はこう言った。

「実はキミの退職の手続きには、私の承認が必要なんだ。坂井課長と支店長の承認はクリアしてるんだけど、私はまだ承認していませんね」

「え？」訝しげに問い返す飯田に、石塚は器用に片目をつぶって見せた。

「私のところの仕事は損害賠償をめぐる訴訟関係なんかが中心だ。

キミは現場も経験してるし、お客の立場も良くわかってる。私の部署を手伝いながら、弁護士になる勉強をしてみたらどうかね。」

「え、それって……？」

意味がわからずポカンと口を開ける飯田に、石塚は説明した。

「留学制度っていうのがあってね、会社に所属しながらでも、業務に必要な資格を習得する為なら学校へ行って勉強できる制度なんだ。その間、給料は基本給だけになってしまいうけど、どう？ 悪い話じゃないだろう？」

信じられない好待遇に、飯田は目をみはった。でも……そんな

で、本当にいいのだろうか？ 自分の考える『人の役に立つ』ってことが、企業に依存していて叶えられるのだろうか？

逡巡していると、石塚の大きな手のひらが飯田の肩をポンと叩いた。

「べつに、帝都電力のお抱え弁護士になれって訳じゃないよ。ただ、一方的にどちらかのことばかりを弁護するような弁護士には、なつて欲しくないだけさ」

「石塚さん……」

確かに、石塚の言う事は正しいと思った。企業の内情と消費者の現実、どちらも公平に見てこそ、解決策が浮かぶ場合もある。

「難しい話は、勉強してからでいいからさ。まあ、ぶっちゃけ、利用できるものは利用して、キミの正義と理想を追求すればいい。私の口から言うのもなんだけど、私は使える人手が欲しい。キミは学校へ行きたい。それだけの理由じゃ、駄目かな？」

あっけらかんと言う石塚に、飯田は感謝の眼差しを向けて大きく頷いたのだった。

「え！　じゃあ、飯田さんは辞めちゃうんじゃないの？」

こぼれそうなほどに大きく目を見開いて訊ねるミコトに、飯田はニツコリして頷いた。

「ただ、今月いっぱい石塚さんの下に異動になる。だからこの事業所には居られない」

ミコトはホッとして頷いた。飯田が辞めないとわかって本当によかった。ミコトは微笑むと言った。

「実はオレも七月に転勤するらしいんです。新入社員教育の一環で、とりあえず支店の管理部門に配属らしいです」

「そうか……」 飯田は目を細めてミコトを見た。

「オレ、本当はこの事業所にずっと居たいって思ってた。でも、いろいろなところに行つて、いろいろな人との出会いを大切に、頑張ってみます」

ニツコリ笑うミコトのネコツ毛頭を、飯田の手のひらがくしゃつと撫でた。

「お前は一流大学卒だ。研修期間が終了したときには、きっと本店に配属になるだろう。……先に行って、待ってるよ」

飯田はポケットからタバコを取り出すと、屋上への鉄扉を押し開けた。すっかり真つ暗になった空に、うつすらと星が瞬いていた。飯田の後ろについて屋上に出たミコトは、湿気を含んだ夜気を思いっきり吸い込んだ。何気なく国道沿いに目を向けると、パチンコ店グランドホールのネオンが赤く光って見えた。

ふとミコトは素朴な疑問を口にする。

「飯田さん、オレたち帝都電力って、電気を作って売ってる会社ですよね。でも、何だかゼンゼン関係ない事で悩んだり慌てたりしてるような……？」

ふうーっと飯田が夜空に向かって煙を吐いた。

「まあな。新入社員研修が終了するまでに、いっぱい勉強することがありそうだな……特にお前は」

ニヤリと笑った飯田の顔は、いつもどおりの嫌味な先輩面だった。

（完）

## それぞれの歩む道（後書き）

長いものにもかかわらず、最後までお読みくださった方、どうもありがとうございます。初期に書いたものなので、たいへん拙い文章で読みにくかったことと思います。コメディなので、登場人物の心理は深く掘り下げてありませんが、書きたかったことは全部詰め込んだつもりです。どこかに共感する部分があればうれしく思います。

どうもありがとうございます。

\*この物語はフィクションです。登場人物および企業、システムなどはすべて架空のものです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3489m/>

---

電力少年

2010年10月8日14時20分発行